
雪椿

良崎 歡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雪椿

【Nコード】

N9434T

【作者名】

良崎 歓

【あらすじ】

入学式の朝。

生物教師、理雪が息抜きのために立ち寄るいつもの場所にやってきたのは、理雪が受け持つクラスの少女、椿だった。

無愛想で不器用な教師と、ごく普通の女子高生。ちよつとずつ親密になってゆく二人は、やがて……。

一話ごとに視点を交互に変えながら、椿の卒業までを描く短編連作集。

自サイト「SIREN」から、同内容を転載しています。また、

squeezed orangeさま(<http://syannari.syanari.com/>)のお題をお借りしています。

後書きや、没ネタの断片などはブログ <http://silent.sirenne.blog7.fc2.com/> の「創作メモ」のカテゴリに置いてありますので、興味がありましたらそちらもどうぞ。

朝ぼらけに立つ

中学生でいられるのもあと半年を切った、三年生の秋。

周りのクラスメイトたちの進路が着々と決まってく中、私はといえは半端な気持ちを持て余したままの日々が続いていた。『高校に進学するんだろ？』とは思っていたけれど、自分のやりたいことが見えないままの私は高校受験とはどうしても向き合えず、志望校が未定のまま秋は深まっていった。楽しかったはずの中学校生活は、息苦しいものへと変わっていく。もともと中の上程度だった成績は目に見えて下がり、なにごとにもやる気が起きず、ますます将来の自分から逃げたくなる……。

進路指導室前の掲示板で、橙南高校入学説明会の案内チラシを見かけたのはそんなときだった。開校してまだ十数年ながら自由な校風と盛んな部活動、加えて比較的高い進学率で受験生からはかなりの人気を誇る橙南。しかし、私の成績は橙南を受けるとすれば、これからかなり巻き返しをはからないとまず不合格というラインだった。

（いいチャンスかも。思い切って、学校見学行ってみようかな。これでやる気が起きなかつたら、きっと受験は頑張れない）

今、思い返せばそこまで思い詰めることもなかったように感じるけれど、当時の私はそんな状態だった。特に橙南を志望していたわけではなく、入試、そして今とこれからの自分と正面から向かいあうきっかけが欲しかっただけ。

しかし、背水の陣で臨んだ学校見学は私の進路を大きく変えたのだ。

「今日の予定では、説明会はこれで終わりです。長時間お疲れさま

でした、頑張ってください」

男性教師が締めくくる。約二時間程度の型どおりの見学のなかには私の期待したきっかけなどなく、生徒の卒業後の進路や入試について一通り説明を受け、校内をぐるりと案内されるとあっけなく終了してしまった。

（やっぱり、受験が大切なことだとはまだ思えない。けど、今ここので何もせずに帰ってしまったていいのかな）

気持ちの整理にはかなりの時間が必要だったが、他の参加者たちがそそくさと帰途につくのを上の空で見送っていた私はやがて勇気を振り絞って彼のもとへと歩み寄った。説明会を担当した教師、初めて見る『高校の先生』は、私よりも優に頭一つ分くらい背が高い。おそらく今日のために作ったと見える真新しい名札には『橙南高等学校 生物担当 若柳』と記されている。

「……すいません。ええと、変なことを聞くかもしれないんですけど」

「何か？」

若柳先生はあからさまに不機嫌そうに、度の強そうなメガネを軽く上げながら私を見下ろす。ややつり上がり涼しげな目元。冷たいまなざしが今にも突き刺さってきそうで怖い。

「先生は……あの、橙南高校のどこが好きですか」

「別に変なことではないと思うが」

最後までは言わなかったが、『説明会に参加していたのに、今さらそんなことを聞くのか』と言いたいようだった。さっきまではすごく丁寧な説明だったけれど、うって変わってきつめの口調。やはり、失礼な質問だったのだろうか。

初対面の人と進んで話をするなんて、普段の私にとっては考えられないことだった。知らない人の視線に出会っていると、どうしていいかわからなくなってしまう。友好的な反応でなければなおさらだ。正直なところこのまま逃げてしまいたい。

しかし、ここまできたら最後まで言わなくては。高校とは、いつ

たいどういいうところなのか。高校生活とはどんなものなのか。知りたかったのはそういうことなのだ。そう思い直し、勢いを付けて一気に質問を投げかける。

「もう少し、生の学校生活が知りたいんです。さきほど説明していただいたことは、だいたいパンフレットで読んでいたので、事前に知ってることも多くて、その……実際にここで過ごしている先生たちは、どんなところがおすすめたと……思っているのかなって」

だんだん失速してくる言葉が悲しかったが、なんとか言えた。大きく息を吐き、先生の次の言葉を待ってその口に集中する。

「なるほど。……すまなかった」

やがて、若柳先生は低く通る声で呟いた。

「他の先生からもらったカンニングペーパーどおりだったから、ありきたりでつまらなかったかもしれないな」

見上げると、それまでニコリともしなかった先生の頬が少々ゆがんでいる。笑っているのだろうか。ほんのわずかに動いた口元とは対照的に、こちらに向けられたメガネの奥の瞳にはほとんど表情が宿っていないように見えた。

「しかし……なかなか難しい。学校施設や進学、部活動以外で、となると」

彼は左手で口元を押さえると、多少うつむき加減でぶつぶつと何事かを唱え始めた。

カンニングペーパーがあったとすれば、きっと不必要なほど丁寧に作られていたものに違いない。先生はそれをそのまま読み上げたのだと容易に推測できる。それとは正反対、今のような不機嫌で無愛想な調子がおそらく若柳先生の地なのだろう。

「あの、そんなに深く考えていたただかなくてもいいんです。例えば学食の人気メニューとか、生徒に人気の場所とか……そういう些細なことを聞きたくて。実は、まだ受験勉強に向かう気持ちが湧かなくて、高校生活がもっと身近になればやる気が出るかと思ったんです」

かなり考え込み、なかなか顔を上げようとしなかった先生だが、私の言葉が切れると「ついてきなさい」という声が唐突に降ってきた。

「今、まさにお勧めの場所がある」

そう言つと、彼は扉に向かって歩き出した。

教室がある棟の二階と隣の棟とを繋ぐ渡り廊下からは、左手には校門、右手には中庭を臨むことができた。ちよつと立ち止まって窓から外を見渡すと、西日が差し始めている。今日は金曜日。私は今日の授業を特別に早退させてもらつてこの見学会に来たのだが、高校もそろそろ授業の終了時刻らしく早足で校門へと向かう生徒もちらほらと出始めていた。

「降りるぞ」

「あ、すみません」

廊下の向こう側で待つてくれていた先生の姿は、下りの階段へと消えた。

「説明会ではコース外だったが、ここからは理科の特別教室が集中している、通称『実験棟』だ。二階は化学と物理、一階は地学と生物の実験室と教材倉庫」

慌てて追いつくと、先生は自分のホームグラウンドとも言える理科の特別教室について簡潔に解説してくれる。この頃になってようやく、人より飲み込みが遅いと自負する私でも先生のペースに慣れてきた。言葉遣いこそぶつきらばうだが、その会話の中身は決して冷たくはない。ただ、表情の鋭さが近寄りがたい雰囲気醸し出しているのは否めない事実だった。

「なんだか薬臭いなと思っていました」

「化学実験用の薬品と生物標本のアルコールやホルマリン、防虫剤などのせいだろうな」

「あ、なるほど」

確かに実験棟には放課後だというのに生徒の姿はなく、冷えた空

気に包まれたまま。渡り廊下で行き来できる二階はともかく、わざわざ渡り廊下から階段を降りて来なくてはたどり着けない一階は、恐らく普段からほぼ無人なのだろう。

「そのおかげで、誰もこの辺に近づかない。特に一階は静かでいい」
人気がないことを歓迎するかのような言葉。でも、実際に人付き合いが嫌なら教師になてならないだろう。先生は、『人嫌い』とまでは言わなくとも一人で静かに過ごすのが好きなのかもしれない。
「そこだ」

先生が指さした先は、実験棟の廊下の突き当たりだった。『非常口』のランプ——緑の地色に、白抜きで人が走っているマークの付いたものだ——のもと、重そうな防火扉があるだけ。おそらくこの外には非常階段があるはず、だけど。

「行き止まり、ですよね？」

「いや。……見た方が早いな。私のお気に入りで済まないが」
目を丸くしている私をよそに、若柳先生は扉をゆっくりと開け放った。

薄暗く、やや冷えた空気が漂う実験棟とは百八十度異なる世界が、私を待ち受けていた。実験棟の三階まで届きそうな見事な紅葉の木が数本と、その足下に広がった真っ赤な落ち葉の絨毯。一枚、また一枚。ひらひらと舞い落ちる真紅のかげらは、敷き詰められた絨毯へと吸い込まれていく。

「見事だろう。学校を建てる際、この土地……まあ山だったんだろうな、ここに自生していたものを残しておいたんだそうだ」

「すごく、素敵。きれいですね」

目に飛び込んできたのは鮮やかな色の洪水が押し寄せるかのような風景だった。月並みな表現しかできない自分が悔しいけれど、そんなことは中学校では教わらなかった。この高校で過ごしたら、もっといろいろな言葉を知ることができるのだろうか。

葉が降り積もる音に聞き入っていると、若柳先生が隣から手を伸

ばすのが見えた。三十センチほどの身長差を埋めるには、私が見上げるか先生が見下ろすかしか手がない。私は思いきり首を反らせ、先生の顔を見上げた。今日は、人生十五年の短い間ながらいちばん首を酷使している日だろう。私の背では絶対に届かない高い位置、そつと枝に触れるわずかな振動に、何枚かの赤いかけらがはらはらと散っていった。

「先ほどの質問に、うまく答えられたか？」

「はい。大満足です。……ありがとうございます」

「なら、良かった。さて」

先生は区切りをつけるように言う私を見下ろし、ふつと息を吐いた。それから、私が『さて』の続きはいつたい何だろうと悩み出すほど間を置いたのち、彼は一言一言を噛みしめるようにゆっくりと話し出した。

「春の若葉の色もまた、格別にいいから。私としては、ぜひ四月にもう一度見てもらいたい」

「え？」

先生の真意を理解できるまで、今度は私のほうに時間が必要だった。遅れをとりながらも意外な言葉に彼を見上げると、夕日を浴びた顔には暖かなオレンジ色が差していた。真一文字に結ばれていた唇の両端が少しだけ上がり、切れ長の目がわずかに伏せられる。ほんの一瞬だけ、ただそれだけの変化。私と目が合ったのに気付くと、先生は視線を外すように橙に染まった顔をやや逸らした。さっきの間は、私を励ますこの一言を紡ぎ出すためのものだったのだ。

逆光を背負った先生が眩しくて、私は大きな瞬きを数回繰り返す。やがて、わざとらしい咳払いが聞こえた。

「何かの縁だ、その時は生物準備室に来なさい。コーヒーの一杯くらい淹れるぞ」

先生は最後に「頑張れ」と付け加えてくれた。

「あ……は、はいっ！ 頑張ります！」

「ああ。……説明会の予定時刻を大幅に超過してしまったな。そろ

そろ日も落ちるし、寒くならないうちに帰った方がいい」

先生は涼しげな顔に戻ると、紅葉にくるりと背を向けて防火扉へと向かう。私も、真つ赤な世界をしっかりと目に焼き付けてからその後を追った。

校内に入ったのはまだ四回目。三回目は合格発表、二回目は入試当日。さらにその前は、あの景色に出会った秋の日。

入学式の開始よりもかなり早く橙南高校の門をくぐった私は、実験棟へと急いでいた。

生徒昇降口に貼り出されていたクラス名簿に自分の名前を見つけ、そのまま目線を名簿のいちばん上に戻すと、『学級担任 若柳理雪（生物科）』と記されていた。若柳先生——ちよつと怖そうな、でも実は優しい先生。久しぶりに見たその名は赤い世界を鮮明に蘇らせた。いてもたってもいらなくなってほとんど小走りで階段を降り、一階の化学実験室、生物実験室の前を抜けてあの場所の重い扉を開ける。

明るさに目が眩むほどの白い風景がそこには広がっていた。春の光が紅葉の木を淡く輝かせ、甘い香りの風が枝を揺らす。見上げると若葉が重なり合い、いろいろな濃さの緑が白く柔らかい朝日に透けていた。今年は春になっても寒さが残っていて、開ききらない新芽もたくさん見えるが、それもまた初々しく可愛らしい。

「格別にいい。……ほんと、格別」

半年前に言われた台詞をこっそり繰り返してみた。

「私、ほんとに橙南に受かったんだ」

目の前に広がる萌黄色に、実感がやっと湧いてきた。合格発表で貼り出された受験番号や家に届いた手続きの書類以上に、この眺めが今の私にとっていちばん身近な入学の証だった。

すばらしい『お気に入り』と、それに考えて考えてやっと押し出

された『四月にもう一度』という先生なりの励まし。表情はすぐに相変わらずの無愛想に戻ってしまったけれど、私の胸には説明会のマニユアルにはない若柳先生自身の感情が込められた言葉が強く残っていた。ここまで来るのは決して簡単ではなかったけれど、高いハードルを確かに越えて、私は今こうしてここに立っている。

誰もいない早朝の静かな世界を独り占めしていた私はギイイという悲鳴のような音に我に返った。比較的新しい校舎に不似合いなその音は、背後の防火扉の蝶番がきしむ音。それに続き「先客か」と、聞き覚えのあるやや鼻にかかったバリトンの声が響いた。

慌てて振り向くと、グレーのスーツの上から、これまた渋いグレーと化した白衣を羽織った男性が防火扉から顔を覗かせている。メガネ、見上げるほどの長身、涼しさを通り越して冷たさすら感じる目元——若柳先生は湯気が立つマグカップを左手に持ったまま、重い扉を後ろ手に閉じた。コーヒーの香りがかすかに私のもとまで運ばれてくる。

「ああ……藤倉、だつたな？」

先生は、相変わらず不機嫌そうな顔でぼそつと呟いた。

「覚えてくださったんですか？」

「印象深かった」

もしかしたら変な質問をした生徒と認識されてるのかもしれないけれど、嬉しいことに変わりはない。新生活が始まる今日、少しでも知っている人が身近にいるならそれだけで頼もしい。

「またお会いできて嬉しいです。先生のおっしゃったとおり、春もいいですね。……きれいです」

「ああ」

短い返答と微妙な表情の変化から正確に気持ちを読むのは相変わらず至難の技だが、なんとなく自慢気に聞こえる。木漏れ日の下、しばし沈黙が下りた。

「そうだな……入学おめでとう」

しばらくして先生は私のすぐ隣まで歩み寄ってくると、思い出したようにそう言ってマグカップを口元に運ぶ。メガネが湯気ですうと曇り、かすむ視界にしかめた顔がスマートな動作とは噛み合わず、つい顔がほころんでしまう。笑ってしまったのを気付かれないよう、何事もなかったように会話を繋げる。

「先生。クラス分けの発表、見てきました」

「G組だろう？」

「はい」

「学担の若柳理雪だ。よろしく」

「藤倉椿です。こちらこそ、よろしく願います」

「……春の季語か。今日の空にはふさわしいな」

「私もそう思います。この名前、気に入っているんです」

そつえば私は、クラス名簿で初めて先生のフルネームを知ったのだった。『わかやなぎ ただゆき』。雪の字は先生に良く似合う。「約束を果たさなくてはな。まだ入学式まで時間があるが、コーヒ―は好きか？」

「はい！」

先生は一度深く頷き私を見ると、今出てきたばかりの扉に再び向かった。鋭い視線にも、あの日の怖さはもう感じない。扉を開く先生の背中を見ながら考えるのは、高校生活への期待と希望ばかり――。

その翼はまだ飛べる

「何をやっているんだ、そんなところで」

残業を終え、いつものようにコーヒーの入ったマグカップを手に防火扉を開けると、暗がりの中で見慣れた生徒が両膝を抱えてうずくまっていた。彼女は非常階段の一番下の段、その隅に、手すりに体を寄せるようにして座り込んでいる。呼びかけが聞こえなかったのか、体を丸めたままピクリとも動かない。

今度は彼女の隣まで歩み寄り、頭上から声を浴びせる。

「藤倉、部活動の時間はすでに終わっているぞ。早く帰りなさい」

彼女は確か演劇部だったはずだ。橙南高校では夏季の部活動は午後七時までと決められている。ちらりと時計を見ると、時刻はもう午後八時を回るところだった。半開きの防火扉から校舎内の明かりが漏れているおかげで彼女の姿を確認するのに苦労はなかったが、日が長いとはいえ、この時間には辺りはすでに闇に包まれている。相変わらず返事がないので、俺はマグカップを階段の端に置いて藤倉の正面にしゃがみ込んだ。

「どうした。体調不良か」

「大丈夫です。もう少ししたら帰りますから」

顔を伏せたまま、藤倉は小さな声でようやくそう答えた。ぐず、とわずかに鼻をすする音を俺は聞き逃さなかった。

ハンカチを巻きつけたピーカーを手に戻って来ると、藤倉は案の定同じ場所、同じポーズで座ったままだった。俺は彼女とは反対側の手すりにもたれるように階段に腰掛ける。体の大きい俺にはかなり窮屈なスペース。何を思い、こんなところでいたいいつから泣いていたのだろうか。

「特別サービスだ」

「ありがとうございます」

「いや。……飲んで落ち着いたら帰りなさい」

そこで初めて彼女は顔を膝から離し、小さな両手を遠慮がちに差し出した。一口飲むと「熱いです」と少し顔をゆがめる。あえかな月光に浮かぶ横顔は目蓋が赤く腫れていて痛々しい。

「すみません、ご迷惑をおかけして」

「ハンカチは貸した。顔を洗ってから帰るんだぞ」

その言葉に藤倉は弾かれたように顔を跳ね上げて俺を見つめたが、すぐに慌てて顔を逸らした。

「あの、あんまり顔見ないでください。たぶん目とか赤くて腫れて、ひどいので」

「悩み相談も仕事のうちだ。詮索はしないが」

「いえ！」

「ごしごしと目をこすり、眉を寄せたままでバツが悪そうに苦笑いをする。詮索してください、とでも言いたげな表情につられて、俺も口元を左右に引いた。」

昨年の秋、新米教師だった俺におどと声をかけた中学生がいなければ、生徒に笑顔を向けることを忘れていたかもしれない。緊張しきった彼女を楽にしてやろうと顔を緩ませたとき、初めてそれに気付かせられた。それ以来、いつも意識してできるだけ笑うことに決めている。

藤倉はカバンの中から何かの冊子を取り出した。表紙には『第八回公演用（仮）』とある。

「台本か？」

「文化祭の舞台用の本です。私、準主役をもらってたんですけど、脚本を書いた先輩のイメージと違うって言われて。今日の練習で役を降ろされてしまったんです。『イメージと違う』っていうのが背が足りないからだって言うんですよ。そんなの、いくら努力してもどうしようもないじゃないですか」

「それで、ここでへこんでいたわけだ」

「実は、がっかりして悲しいのはもちろんなんですが、なんだかす

ごく悔しいんです。……どこかで気分を落ち着けてから帰ろうと思
ったら、ここしか思いつかなくて」

そう言くと、藤倉はビーカーを握り締めて紅葉を見上げた。この
木の下は、彼女にとって何か特別な場所なのかもしれない。悔し泣
きしていた藤倉は、ここにやって来て果たして癒されたのだろうか
彼女は一年生にしては確かにやや小柄なため、俺と立ち話をする
ときなどは上を向きっぱなしで、さぞ首が疲れるだろうとも思
う。身長は見た目ですぐに判断できるのだから、キャストが本決定
した後でそれを取り消すのは酷だろう。

しかし、正直言つて若干驚いてもいた。レギュラー争いはどんな
部活動にも付いて回る試練で、打たれ弱い生徒にとっては大きな挫
折となることもある。俺は藤倉もそんな生徒かと思ったが、余計な
心配だったらしい。

「そうは言つても憤慨できる元氣はまだ残っているな」

「え？」

「中学の頃を少しは見ている私からは十分成長の跡がうかがえる。
去年の秋の自分と比べてみなさい。……納得がいかないと悔しがる
くらいなら浮上できるだろう？ 何にせよ、それだけ一つのこと
に思い入れることが出来るのは素晴らしいことだ」

学校説明会のときには俺に話しかけるのもやっとなった内気な彼
女が、あれから約一年経ち、今は悔し涙を流すまでに逞しく育つて
いる。十六歳というのは、こんなに急速に大人へと近づいていくも
のだったのだろうか。昨年受け持った中にはそう思わされた生徒は
いなかった気がするが、だとすれば藤倉が特別なのか。

「本当に、そう思われます？」

「ああ。……そんなに悔しかったら毎日小魚や牛乳を摂って、背を
伸ばしてやるくらいの意気込みで頑張りなさい。努力することは大
切だ」

「じゃあ、先生くらいになるように全力を尽くします」

「それは大きすぎる」

でも大きければ大きいほどいいかなと思ってと、俺の慣れない冗談を受けて、藤倉は屈託なく微笑んだ。多分、俺の顔もやや弛緩したことだろう。ころころ変わる彼女の表情はまるで子供のようなのだが、その中身——心のほうは立派なものだ。

「さあ、もう帰ったほうがいい」

「ごちそうさまでした！……ありがとうございます。聞いていただけて、すっきりしました。裏方でも頑張るので文化祭は見に来てくださいね」

「見に行こう。さあ、暗いから足元に気をつけなさい」

ぺこりと頭を下げて小走りで去っていく後姿は、いつもより一回り大きく見えた。その小さな翼ははたき始めたばかりで、見守る立場の俺には少しもどかしい。彼女はあと二年も経てば、ここから巣立っていく。それまでに翼はどれだけ大きくなっているのだろう。

そういう俺も去年の秋と比べれば少しだけ大人になっている。その一端はきつと、藤倉のおかげなのだ。

「置いていかれないようにしなくてはな」

すっかり空になったマグカップとピーカーを手に、俺はもう夜闇に溶けて見えなくなった背中を目で追っていた。

洗濯あるいは散歩日和

「あ、若柳先生！」

青空の眩しい、土曜日の昼過ぎ。部活の練習も終わり、今日は薦ちゃんと二人でいつもの防火扉から顔をのぞかせると、白衣の後姿が視界に入ってきた。紅葉の下に立つ白衣の人物なんて先生じゃないはず。そう思って呼びかけたのに返事は無い。

「ちよつとちよつと、何ボケてんの椿。若、いないよ」

友人の突っ込みによく見れば、肝心の中身が入っていない。

「あれ？」

「無理ないけど。この黒衣、間違はなく若のだもん」

そこには、枝からハンガーで吊り下げられた白衣だけが気持ちよさそうに風に揺れていた。ちよつど先生が白衣を引っ掛けたのと同じくらいの高さだったので、見間違えてしまったらしい。抜け殻に声をかけてしまったのかと思うと恥ずかしくて反射的に辺りを見回すが、幸い薦ちゃんの他には誰もいなかった。

「洗剤の香りするね。今日、いい天気だったから洗濯かな」

「洗ったわりに汚くない？」

渋い見た目に反し、さわやかな香りが鼻に届く。年季の入る具合と丈が長めであることからすると、これは先生のものだろう。薦ちゃんの言うように、若柳先生といえばグレーの白衣——生徒の間では通称『黒衣』だ。本来は汚れを目立たせるための白なのに、干されているものは薬品の染みで変色したりひじの辺りが黒ずんでいたりと、ずいぶんひどい状態になっている。

「きれいに洗ってくれるような相手はいないのかな？ もてない要素はないと思うんだよね、若つて。そこらへんの男の人より背は高いし、顔は整ってるし。目が怖いことを除けば水準以上でしょ？」

薦ちゃんはかけてもいないメガネをずり上げる動作をしながら言った。ブリッジを中指で押し上げるのが先生の癖なのだ。

「確かに目は鋭いね」

私は彼女に相槌を打とうと、若柳先生の姿を思い浮かべてみた。紅葉を背景にして微笑んでいた先生、春の若葉の下でメガネを曇らせてしまった先生、夏の夜に私を隣で励ましてくれた先生。防火扉の紅葉のもとのできごとばかりが次々に湧き上がってくる。

中三の秋、学校説明会から一年が経つが、嬉しいこと、悲しいこと、腹が立ったこと――何かあるたび紅葉に会いに来るのが習慣になっていた。先生には、その恒例行事にいつも付き合ってもらっている気がする。ここでの先生との会話はいつも幸せな気分をもたらしてくれていた。

「椿」

いきなり呼ばれ、目を見開いてピントを合わせると薦ちゃんの顔が目と鼻の先にまで迫っていた。驚いて身を引くと、「ボーっとしてたでしょ」と彼女は頬を膨らませた。そんな顔をして絵になるのだから、美少女はずるい。

「なんでもない。……先生は、低い声とか白衣着たときの立ち姿とかも素敵だよ。あと、すごく優しい」

「あんたは視点がマニアックすぎ」

「そう？ 思ったことそのまま言っただけなんだけど」

「だって、若が優しいとか想像付かないって」

「私が困つてるときとか悩んでるときとか、いつも解決してくれるよ。ここに来ると、ほっとする」

「へえ、知らなかった。よく来るんだ？」

「うん。実は去年からなんだけど」

若柳先生がいかに優しく私の話を聞いてくれたか、去年の説明会から今までを順を追って説明する。

黙って聞いてくれていた薦ちゃんは今途中から両手で頭を抱えて何事か考えている様子だったが、やがて彼女は真剣に、でも穏やかに私を見つめた。

「あんたさ、若に言えない悩みできたら私に言いなよね？」

「え？ うん」

「よろしい。……さてと。ここの紅葉、本当にきれいだね。白衣を可愛くしてあげてから帰るか」

仕切り直すように明るく言い、彼女は紅葉の葉を何枚か拾うと爪先立ちで一番上のボタンホールから順に差し込んだ。確かに、紅葉の赤が強い分だけ白衣の色が引き立つし、始めからそういうデザインだったかのように見え——なくもない。

「せっかくだから椿も何か仕込んだら？」

一年前の今頃、初めてここに来たときのように真っ赤に染まった葉。蔦ちゃんと顔を見合わせて、少しだけどきどきしながら私も同様に何枚かを白衣のポケットに入れた。

「これで共犯ね。秋っぽくてきれいでしょ、若も喜ぶ」

「そうかなあ？」

「喜ぶかも。……それにしても、なっがないー」

背伸びをし、蔦ちゃんが白衣を見上げた。彼女も男役もかつこよくこなせるほどの身長を持ち主なのに、このサイズでは袖や裾がかなり余ってしまうだろう。

私も蔦ちゃんに習って背伸びをしたりジャンプしたりしてみたが、そもそも、ハンガーがかけられている枝にすら手が届かない。着丈は1メートルほどだろうか。私がこの白衣を着た姿を想像すると、面白すぎて思わずため息が出た。

「何してんの？」

「私、白衣より小さかったりして。絶対引きずる」

笑って蔦ちゃんを見ると、彼女はニヤニヤしながら私の後ろを指差している。

「何？」

「何だ？」

私の問いと男の人の声はほぼ同時だった。ぎよつとして振り向くと、いつから立っていたのか当の本人が涼しげな顔で腕を組んでいる。

「先生！ いたんですか」

「ずいぶんな挨拶だな」

「あ、あの……ごめんなさい。てつきり誰もいないと思ってたので」
「面白そうだから黙ってた、ごめん椿」

友人を睨みつけるが、当人はそ知らぬ顔で妙な笑みを湛えたまま。不覚なことに、私はまったく気づかずにのん気に背比べをしていたのだ。いつから観察されていて恥ずかしいことには変わりないが、白衣の横で飛んだり跳ねたりしていたのを目撃されていたらと思うと耳まで赤くなる。

「まあいい。乾いたか」

そんな私にはお構いなく、ワイシャツ姿の先生は高い枝に軽々と手を伸ばした。「朝からここに干してたんですか？」と聞くと、「一時間目の予鈴が鳴ってからだ」とハンガーを下ろす。

「家で洗ってきたんだが、この天気ならここに干せば早く乾くと思っ
てな。……何だこれは」

ボタンホールに刺さった葉を取り払ってひらひらと風に乗せると、先生はさっそく白衣に袖を通した。見慣れた白衣姿に、私はなぜだかほっとした。薫ちゃんと言えば、可愛かったのにと小声でつぶやき、口を尖らせている。そういえばポケットにも紅葉が入ったままだけれど、言い出すタイミングを失ってしまった。

「洗ったわりに、あまりきれいになっていないような気が」

「そうか？ 私は気にならないが。ちょうどいいサイズが見つからなくて、大学のときからずっとこればかり着ているんだ。薄汚れてくるのは仕方がない」

葉っぱのことで逡巡している私をよそに、先生はハンガーを回収しながら薫ちゃんのぶしつけな疑問にもポーカーフェイスで答える。最近は大いサイズの洋服を扱う店も大分増えてきたように思うが、白衣でこのサイズでは替えを探すにも一苦労なのだろう。

そういえば、若柳先生の背の高さが女子生徒の間で議論になったことがあった。あんなに背があると彼女にキスするのも立ち膝とか

しゃがんだりとか一苦労だよね、と言ったのは薦ちゃんだったか。身長をはつきりと尋ねたことはなかったと思い、いい機会なので聞いてみる。

「先生つて、どれくらいあるんですか」

「八十五くらいかと思うんだが、ここ何年か測っていない。小さいのも困るんだろうが、大きくても何かと損だな」

彼は今日初めて僅かに顔を緩めた。

小さいのもというのは、この前先生にごちそうしてもらったときのことを指しているんだろう。正直言えばブラックのコーヒーは私には少し苦かったけど、ここで先生に元気を分けてもらい、いじけずに気持ちよく練習に帰ることができたのは紛れもない事実。結果、頑張りが認められて再びその役を手にし、今に至っている。文化祭の練習は最後の追い込みの時期に入り、今日からは本番の衣装を着けてのものへと変わっていた。

「大きい方がいいこと多いですよ。ねえ薦ちゃん」

「白衣を大事に使うなら、ちゃんと漂白とかしたほうが絶対いいですよ。きれいに洗濯してくれる彼女、いないんですか？」

ところが彼女は全く別のことを考えていたようで、私の呼びかけを無視して爆弾を先生に手渡した。

薦ちゃんは相手が誰であろうと、そういう危ない質問を当然のように繰り出す。それでも聞かれた方が思わず答えてしまうのは、入部まもなく看板女優の座を勝ち取った演技力と、意思の強そうな眉が印象的な美貌、それにハツタリのなせる業だと、私は勝手に分析している。

「遠慮というものを知らないのか、薦」

「みんな気になってるんですよ、先生がフリーなのかどうか。格好いいから」

若柳先生が女子に人気だというのはその通りだけれど、面と向かって彼女の有無を尋ねた生徒はおそらく薦ちゃんだけだろう。先生は心底迷惑そうに口をへの字に曲げていたが、面倒そうに言い放つ

た。

「薦の言葉を借りるなら、ここに洗濯物を干している時点で明白だろう。……これで、満足か？」

プライベートを秘密にしようという警戒心はないのだろうか、先生はあっさりと自供して二人の会話は完了したようだった。

「ほんとうに、彼女いないんですか。……先生」

先生ほどの男性が独りだなんて、にわかには信じられない。私が重ねて念を押すと、先生はややふて腐れたように言った。

「情けなくなるから繰り返し聞くな、藤倉。いないよ。不本意がらな」

「う、ごめんなさい」

薦ちゃんは「誰にも言いませんから」とうそぶくと肩をすくめ、フォローを求めてなのか私をちらりと見た。ずっと気になっていた懸案事項が片付いたからか、反省の色があまり感じられない満足げな苦笑いだ。

「言いふらしても構わないさ、私の彼女の話なんて君たちには関係ないことだろうしな。……散歩日和だ。寄り道するためにも早く帰りなさい」

「珍しく笑ってたよ、若。……よく白状したね。フリーとは意外意外」

薦ちゃんの言葉を上の空で聞き流す。私はすっかり呆けてしまっていた。

『君たちには関係ない』

手のひらには生ぬるい汗がにじみ出ていた。ちくりと刺さった先生の言葉。考えても考えても整理しきれない気持ちを何よりもはっきりと表していたのは、思い返すたびに増してくる胸の奥の痛みだった。傷が疼いて、育っていた想いに初めて気がついた。

先生に彼女がいないことに、私はなぜこんなにも安心しているん

だろう。私に向けてくれたたどたどしい微笑み、夕日に照らされたオレンジ色の横顔、長い白衣を着こなす背の高さ、その一つ一つになぜ顔が火照るんだろう。先生の淹れてくれたコーヒ―の味をなぜはつきりと思い出せるんだろう。ここに来るたびに幸せになれるのはどうしてなんだろう。

導き出されるのはたった一つの答え――。

「椿！」

先生はいつの間にかいなくなっていて、薫ちゃんが立ちつくす私を揺さぶっていた。視界に澄んだ高い空が戻り、じつとりと冷や汗をかいた体をさわやかな秋風が撫でていく。口を開くと思いが溢れ出しそう、両手を唇に押しつけた。

「どうしたの？ 具合悪い？」

「泣きそう」

「私に相談したいこと、ある？」

その一言ですべてを察したらしい薫ちゃんが、優しく微笑む。そう言えば、先生には相談できないことは彼女に訊くとさっき約束したばかり。

「……私、若柳先生が好き。先生の彼女に、なりたいな……」

「そっか」

涙目の私を薫ちゃんはぎゅっと抱きしめてくれた。彼女の肩越しに、私の想いを一年間見守ってくれた紅葉が揺れていた。

先生、解答用紙が全然埋まりません！

「一人だけなのか？」

暖房のスイッチは今入れたばかりで、吐く息が白い。冷え切った広い生物実験室の中、藤倉はチョコレート色のコートを着たまま途方に暮れた顔で俺を待っていた。本来なら他にも数名生徒がいるはずの部屋に、彼女が一人きりでぼつんと座っている。

「みんな、帰っちゃいました」

「帰ったというのは？」

「補習なんかやってられるか、って。止められなくてすみません」

「藤倉が謝ることじゃない。遅れてしまった私が悪いんだろ。…」

「たぶん、な」

俺の遅刻は五分程度。時間通りに来たところで実際は大勢に影響はなかっただろう。

今日の放課後は、生物の期末試験の成績が芳しくなかった生徒を集め、解説しながら答案を完全な形にして提出させるミニ講義を予定していた。しかし、必然的にあまり学業に関心のない者が呼び出されているわけだから、結果こういうことになってしまう。ある程度予想はしていたものの、まさか一人しか残らなかったとは。

「呆れていても仕方がない。……マンツーマンになってしまったが、始めるか」

きちんと待っていた藤倉が気の毒で、さつさと始めてさつさと終わることにした。どうせ一人きりなのだからどの席でも構わないだろうと、両手を擦り合わせて暖を取っていた藤倉をヒーターの前に移動させて、俺も彼女の隣に座った。しおりを挟んだ授業用のノートを開き、テストの問題用紙と正答の書かれた解答用紙をファイルから取り出す。

彼女が心底恥ずかしそうに差し出した解答用紙の右上には、俺の

筆跡で『17』という赤い文字が躍っていた。改めて見直してもやはり信じられない数字にしばし言葉を失う。藤倉は沈黙に耐えられなくなつたのか、黙っている俺に「すみません」と謝り出した。

どの教科も平均的な成績の中、入学直後から生物だけは突出して高得点をマークしてきていた藤倉。採点の途中、目を疑つたのは記憶にある。平均点の半分にも満たない赤点は俺の知る彼女からはとても想像できないものだった。

「これは……思い切つたな。眩しい点数だ」

息を呑む藤倉に、「言い過ぎた」と思つたがもう遅い。

藤倉が相手だとしても調子が狂う。秋までは藤倉がよく防火扉の紅葉を訪れていて、俺とは半ば茶飲み友達——実際に飲んでいるのはコーヒーなのだが——と化していた。なまじ会話量が多いためにその成長もよく分かり、変化を追うのもまた一興だったが、雪が降るようになりお決まりだった悩み相談、驚きや発見の機会が少なくなつたのは正直言うとしさ寂しい。このごろは気丈に見えたので少しくらいの軽口は許されると、簡単に考えたのがいけなかった。虐めようと思つたわけではなかつたのに——。

彼女は寒さでやや紫色になつた唇を噛み、小さい体をさらにちんまりとさせて最大限の反省を全身で表していた。きつと、頬が赤いのは空気の冷たさのせいだけではない。小動物、例えるならリスがしょんぼりと尾を垂れているような彼女の姿を見ているといたたまれなくなり、出来る限り柔和に温良に、そして素直に詫びた。

「すまないな。……今のは、言葉が過ぎた。いつも生物は頑張つていたようだったから驚いているんだ。テスト中に具合でも悪くなつたのか？」

「解答欄が」

改めて答案を見直す俺の眉間の溝を認め、彼女はためらいがちに切り出した。

「一度消した後、埋めきれませんでした。制限時間ぎりぎりですれていたことに気づいて修正しようとしたんですが、間に合わなくて」

藤倉の解答用紙は消しゴムをかけたために表面が黒ずんで派手にしわが残り、無機質に並ぶ升目のうち二、三か所がまとめて空欄になっていった。解答を後回しにして空欄にしたところから一問ずつずれていったのだろう。答えを消し、隣の欄に写して書き込み……と繰り返しているうちに時間がなくなったらしい。

赤点がそんな初歩的なミスからきたとは、全く予想外だった。もしかしたら、彼女は俺の想像以上にうかつで天然ボケで、ユニークな生徒なのではないだろうか。真面目でしっかりしていると思いついていただけに、そのイメージは一気に覆された。

試しに彼女の本来の解答で採点してみると、なんとクラスでも五指に入るほどの高得点だった。それを見てもますますやりきれなかったのか、彼女は両の手で顔を覆うようにしてぎゅっと目を閉じ、動かなくなつた。

無言でしばらく待つてみたが復活の見込みがないので強ばる肩をそつと叩くと、体がビクリと大きく震えて小さく息が漏れた。どうもお叱りを待つていたらしい。

「いい点じゃないか」

「でも」

「もったいなかったな。解答自体はそう間違つていないようだし、補習の必要はないだろう。アドバイスとしては、まずは見直しは早めに。他に強いて言うならば、形成体、誘導、予定運命図……発生に関する部分が少し弱いかもしれないな」

「……そうですね。その辺はちよつと自信ありませんでした」

頷きながら繰り返す落ち着きのない瞬きは、やはり小動物ライクな姿。恐縮しきりの彼女を励まそうと目を細めてみると、はにかんだ笑顔が返ってきた。作り笑いもだいぶ板に付いてきたらしい。

「基本的にはいい出来だから、参考程度に聞いておいてくれ。……では、今日は解散」

筆記用具や答案を片付けながら、藤倉は俺のノートに挟んであったしおり——名刺サイズの透明なシートで覆われた二枚の紅葉を目ざとく見つけ、冷えて白くなった指先で示した。

「先生、それは葉っぱ……ですよ」

「これか？ 葉脈標本というんだ。重曹を入れた水で煮ると、このように葉脈だけがきれいに残る。……白衣を外に干していたときがあっただろう」

「あ、はい」

「あのときにポケットに葉が何枚か入り込んでいたんだ。割ときれいだったんで、それを取っておいて加工してみた」

秋の紅葉は校内で俺がもっとも好きな景色のうちのひとつだ。偶然白衣のポケットに紛れ込んでいた真紅の葉を、これでいつでも秋を持ち歩けると標本にした。他人が見たら柄じゃないと笑うかもしれないが。

「あの」

「どうかしたのか」

「いいえ」

明らかに何か言いたげに目を泳がせていた藤倉は、やがて「それ、触ってもいいですか」と許可を得てからしおりをつまみ上げた。蛍光灯に透かすと、寒さのため青白くも見える顔に葉脈の影がくつきりと落ちる。

「こついの初めて見ました」

くるくると角度を変えながら標本を眺める仕草は、両手で木の実を回すリスや、大学時代に卒論のために飼っていたラットやウサギを連想させた。小動物という言葉が似合う小さな女生徒は、まさにかみつきの勢いでしおりを見つめている。

その様子に、軽い気持ちで「欲しいならプレゼントするぞ」と言うのと、「下さい！」と間髪入れずに答えが返ってきた。

「でも、その……先生が困らないのならいいです」

小声で付け足すのが、いかにも藤倉らしい。面食らったのをこま

かすようにメガネを直しながら、俺はやや思案して一つの提案をした。

「もう一枚作ったから私の分はある。……そうだな、『学年末は今回の分まで頑張る』という条件付きではどうだ。別に何点以上取れとは言わないが、せめてこのようなミスはせずにベストを尽くせるよう気を付けること」

「絶賛されるように努力します」

「その心意気を忘れないように。では」

白衣のポケットから出したメガネ拭きでラミネートカードを軽く磨いてから、手渡す。「ありがとうございます」と両手で受け取り、彼女は満面の笑みで大切そうにペンケースに入れた。

「これ、テストのお守りにします。先生とお揃いだし、ご利益がありそうなので」

「お揃い？ ああ、まあそれを見て解答欄、と思い出せばお守りにはなるかもしれないが」

「はい。大事に使います」

もう、そんなかわいいものが似合う歳じゃないのは十分分かってるから、藤倉が照れもなく使った言葉がくすぐったくて仕方がない。実際は『お揃い』ではないのだが、今の彼女には教えない方がいいだろう。

「そんなに、好きなのか」

尋ねると、彼女はコートと同じチョコレート色の瞳を見開いた。

「紅葉だよ。確かに立派な木ではあるが、女子高生にしては渋い趣味だと思ったんだ。そうでなければわざわざ校舎の片隅になど来ないだろうし、こんなカードなんて今どきの生徒が欲しがるわけがないだろう」

藤倉は補習が終わったためか舌がなめらかに動くらしい。一呼吸置いたかと思うと小鼻を膨らませて、怒濤の勢いで抗議を始める。

「変ですか？ ……でも、最初は先生に連れてきていただいたんですよ。夕日があんまり綺麗だったから、合格したらまずあそこに行

こうって決めてたんです。橙南イコールあの木っていうくらいに懂れていて、入学してからあの場所に行……何言ってるんだろ。話が逸れちゃいましたけど、何を言いたかったのかと言えば、私だけじゃなくて先生も渋いんです。きつと」

「私が渋いのは認めよう。それでことあることにあそこに来ていたわけか」

そんなにむきにならなくてもいいのにと思ふ反面、ようやくここ何ヶ月かの疑問——藤倉がこのあたりをよくうろついている理由——が氷解して胸がすつとした。確かに俺もこうして持ち歩くくらいにあの木が気に入っているから、その点では藤倉と同類だ。

「ところで、落ち着きがないが何か言いたいことでもあるのか？

何事もなければ別にいいんだが、悩みがあるなら言ってみなさい」

とたんに黙ってしまった彼女を見れば、挙動不審気味に視線を揺らしている。やがて俺の追求が止まないと観念したのか、彼女は上目使いで「怒らないでくださいね」と呟いた。何のことかさっぱり見当が付かないが、言ってもらわないと分からない。

「何か怒られるようなことでもしたのか？ 内容によるが努力はしよう」

「じゃあ、勢いで言ってしまうけど。……実はそれ、私がポケットに入れたんです。ごめんなさい」

彼女は立ち上がり、ぴよこんと頭を下げた。

「はあ？」

突然の告白に、教師らしからぬ言葉が口を付いて出る。

ポタンホールに葉っぱが飾られていたことは確かに覚えているのだが、あれは蔦の仕業だと納得していた。ポケットの中に紅葉を見つけたときにもいたずらかと考えたものの、いくら蔦でもまさかこんなところにもまで仕込むことはないだろうと、偶然舞い込んだものだとして結論づけたのだった。果たして、藤倉がそんな悪ふざけをするだろうか。

——いや、やりかねない。今日の彼女を見て、やる時はやって

くれるんだと思い知ったのではなかったか。

「すみません！　ちよつと魔が差したというか、悪いことしてるって考えていなかったんです。でも、今日先生のお話を聞いて謝らないといけないと思いました。まさかこんな風に大事にしてくださいってとは思わなくて、言い出しにくくて……。あ、でもボタン穴に葉っぱを差したのは薦さんで——先生、そんなに笑わなくなつていいじゃないですか」

俺の沈黙を憤りだと思い違つたのか藤倉は泣きそうな顔で弁明を始めたが、目を丸くして口をつぐんだ。その声に俺もはつとしたものの、とりあえず怒っていないことだけは伝えようと「いや、意外性の勝利だ。見直したよ」と明言しておいた。

「見直した？」

案の定、彼女は不思議そうに首をかしげたが、あまり細かく説明しても仕方がないと話を逸らす。

「これが藤倉からの贈り物なら、礼を言わなくてはな」

「……お礼なんてやめてください、悪いです。怒られないだけで、十分満足なんですから」

藤倉は、ぶんぶんと髪が乱れるほどに首を振った。

そろそろ補習の予定時間も過ぎる頃だったので、その話は終わりにして俺は藤倉を見送った。彼女は名残惜しそうに例の紅葉の方を眺めていたが、今の季節は防火扉が凍り付いているので外に出るにも一苦労だと言うと、諦めがついたのか軽やかな足取りで去っていった。

巢、もとい生物準備室に戻った俺はしおり代わりにする手頃な紙を探したが見つからず、結局付箋紙を貼ってノートを閉じた。もう一枚作っていたというのはとっさに吐いた嘘。あのカードに思い入れがないわけではないが、藤倉の方が俺よりも必要そうだったのであげたまでだ。きっと、それで正解だったのだろう。

『笑わなくなつていいじゃないですか』

藤倉のその一言が、棘のように引つかつたままいつまで経つても忘れられなかった。一昨年の秋から今まで、一年半の間に彼女にだけは躊躇なく笑いかけられるようになってきているのを俺自身も確かに気づいていたから。——良くない傾向だとは思いつながらも。

何物にも染まりうる魂

三月に入っただけとは言ってもまだ風が冷たいこの時期、実験棟の廊下は日が陰ると思わず両手で肩を抱きたくなるような肌寒さ。まして、校舎裏の一角に好んで近寄る奇特な人間なんて世の中に二人くらいだと思う。

ここに来るのは、いったい何ヶ月ぶりだろう。どうかそこにおいて下さい、と祈るような気持ちでいつもの扉を開けると、当然のように白衣の人影があつた。

「先生、お久しぶりです」

「さつき授業で会ったばかりだろう」

「ええと、じゃあ『ここでは』お久しぶり、です。雪が溶けたみたいなので来ましたが、構いませんよね。……そこ、狭くないですか」「狭い」

「どうしてそんなところに？」

若柳先生は西日が当たる非常階段の一番下で長い手足を窮屈そうに折り曲げながら、今日最後の日溜まりの中でマグカップを傾けていた。その橙色の横顔を見つめながら、私は非常階段へと近寄る。先生を上から見るとなんてたぶん最初で最後のことで、期間限定の優越感を味わうことができた。

先生は意外にも甘党らしく、生物準備室でコーヒーをごちそうになったときに砂糖を二杯入れていたのを目撃している。のぞき込んだカップの中身は残りわずかで、ちらりと見えた限りでは琥珀色ではなく小麦色。その上、今日はミルクまでたっぷり入っているようだった。そろそろ年度末で何かと忙しそうだし、疲れて甘いものが欲しくなる時期なのかもしれない。

「ちよつと息抜きをな。そういえば、期末は約束通りかなり精進したようだが」

コーヒーに気を取られている私に、先生は言葉を濁して別の話を

振ると、残りを一気に飲み干した。のっそりと立ち上がるその足下から、冬の間に積もった砂埃がぶわっと巻き上げられる。私はそれを避けながら、先生の白衣が汚れるのはこういうところに平気で腰掛けたりするからなんだと察した。

「今回は解答欄を間違えませんでした」

「それが普通なんだ。まさか九割台まで伸びてくるとは思っていなかったが、どうやらよほど私の補習を受けたくないと見える」

やや大げさな動作で腰の辺りの埃を払い、「これで立派に汚名返上だな」と先生は私を見下ろした。やっぱりこの位置関係がいちばん落ち着く。上から注がれる温かい声はいつも通り。ここで聞くバリトンは授業のときよりも少しだけ柔らかくて、耳に心地よい。

「それにしても藤倉は、こんなところまで立ち話をしに来たのか」

「いえ。今日は効果を報告に」

「効果？」

「これです」

そう言って、私はカバンの中から例の標本を取り出した。私が白衣のポケットに入れて、先生が標本にし、それをまた私が貰ったという複雑な境遇の紅葉だ。テストのお守りのはずがあれ以来ずっと大事にカバンに入れて持ち歩いているのは、薦ちゃんにさえも内緒にしている。

「何のことかと思った。ご利益、というわけか。まだ寒いのにわざわざ、律儀だな」

「だって、予想以上に効きましたから。先生のおかげです。どうもありがとうございます」

「……私に、か？」

先生は面食らったように聞き返したが、私が頷き、改めてお礼を述べるといつものようにやや口元を左右に引いた。

「元は藤倉が私にくれたものだろうに。……お守りや私なんかの力ではなくて、藤倉の努力が実ったんだ。来年度もこの調子で頑張るなさい」

彼は、そこで一つくしゃみをする、「カレンダー上では春なんだが」と小さくこぼした。

寒さが身に凍みるのも当然で、よく見ると白衣の下から少しだけ覗く胸元は放課になってから崩したのだろう、ネクタイがやや緩めてあった。いかにも理系教師っぽい外見や雰囲気から生真面目でかつちりしているのかと思えば、案外ルーズなところも見え隠れするのが可笑しい。

もちろん寒いのはそれだけが理由ではない。ここに来て数分間に日差しは重い雲に遮られ、体感温度はかなり下がってきていた。先生はカップを持っていない左手で白衣の前を合わせると、風をシャットアウトするかのよう腕を組んだ。私もそれに倣って、部活で使った道具の詰まったカバンをしっかりと抱きかかえる。

「春といえば、藤倉はツバキの花期に生まれたからツバキなんだろう?」

「あ、ええ、はい」

先生はそこで思わぬ方向に話題を変えた。

全くの不意打ちに即答できず面白いほど声がうわずったままだ。焦りながらそつと表情を伺うと、彼はいつもと変わらない無機質さでこちらを見下ろしていた。思えば、先生は大学で生物学を専攻していたのだった。彼にとってツバキは単なる植物の名前であって、ものを見分けるために付ける目印のようなものだろう。

それでも——春といえば、という程度で振った話で深い意味なんかないと分かっているけど、先生の口から出た三文字に冷えた身体がじんわり温かくほぐれていく。私は先生に悟られないようにささやかな幸せを噛み締めつつ、渴いた口の中を湿らせると、できるだけ普通に冷静にと努めながら何の変哲もない答えを押し出した。

「そうです。私の誕生日は今年なんですけど、私が生まれた年はその頃もかなり雪が残っていたらしくて。だから、『春を呼ぶ花』っていう意味で付けたって聞きました」

「確かに、春が待ち遠しいこの時期にはぴったりだ。いい名前だな」
「はい。私もそう思いますし、好きなんですけど。……ただ、椿の花はちょっとゴージャスすぎて、まだ私には似合わない気がします」
「そうか？」

「ちよつと負けてしまっているかな、と」

「さあ。……どうかな」

先生はため息とともに目を伏せると長考に入ってしまった。きっと私の何気ない一言に対する考えをじっくり整理しているはずで、こうなるとどんなに長い間でもまとまるまでは無言になるのがいつもの彼だ。諦めて先生を待つことには決めたものの、果たして私以外の人にこの気持ちはどれくらい伝わるのだろうか。

荷物を抱えたまま足下をぼんやり眺めていると、突然の低音とともに寒さが少し和らいだ。顔を上げると先生がいつの間にか風上に立っていた。もしかしたら、壁になってくれているのだろうか。

「藤倉は、椿のようになりたいのか？」

「憧れます」

気に入っている名だからこそ、余計に実態とのギャップに落胆することもある。憧れと答えたのは、『なりたい自分』はまだまだ手の届かないところにいると思うからだった。今の私は小さくて弱い。

葉はつやつやと光り、花は豪華で大きく、散る時は潔く落ちる。

そういう華やかで強そうな雰囲気は私に似合わない、と常日ごろから考えていた。また反面、そうありたいとも願っている。先生に釣り合うような生徒になりたい、椿のような女性になれたなら先生の隣に並んでもきつとおかしくない。ただ、私が高校生のうちにその夢が実現するのかどうか、先はまったく見えなかった。

「憧れ、か。きれいな花だからな。……これから話すのはあくまでも私の考えだ。藤倉がそれは違うと思うなら、聞き流してくれて構わない」

先生は冷たい風に顔をしかめながらそう前置きをして、深呼吸をするように音を立てて大きく息を吸い込むと私の目をまっすぐ捉えた。真摯な視線に吸い込まれるように、私も先生をじっと見つめて言葉を待つ。

「藤倉椿が藤倉椿であることは、似合う似合わないの問題ではなく紛れもない事実で、君はご両親が名前に思いを込めたそのときからずっと椿なんだ。ただ、所詮——と言うと多少語弊があるが、名前は名前ではない。その中身は君が決めるものだ。まわりくどくなってしまうが、要するに私は椿の花に憧れる君、たとえばこの場所に來て悩んだり悲しんだりしている、ここにいる藤倉こそが椿だと言いたかったんだ」

そこまですをノンブレスで言い切ると組んでいた腕をほどき、先生は少しだけ目を細めてみせた。

「藤倉にはゆっくりだと感じられるかもしれないが、今の歩みでも確実に目標に近づいている。だからまだ、負けたなどと判断するのは早いんじゃないか。……藤倉は、まだ急がなくてもどんな可能性でも掴める力があると思う。自信を持って、自分のペースで椿になりなさい」

今度は植物のツバキではなく私の名前を呼んでくれたような気がして、落ち着きかけた心拍数は再び跳ね上がったものの、一方ではひどく安らかな気持ちに包まれていた。みっともないところをたくさん見せてしまっているのに、もがいている私をそれでいいんだと受け入れてくれている。先生はずっと見守ってくれていたんだ——もちろんその眼差しは一生徒に向けられたものに他ならないけれど、今の私には充分すぎるほどだった。

私は先生からたくさんのもをもらい、彼のおかげで『藤倉椿らしく』動き始めることができた。高校に入ったのだって、部活でヘコんでもすぐ立ち直ったのだって、生物の成績が上がったのだって、先生がいてくれたからだ。

「ありがとうございます。のんびり前向きに頑張ってみます」

「藤倉がそう思うなら、な。しかし……名前のことを私が言っても説得力に欠けるか」

再び降りる、長い沈黙。また何か考え込んでいるのかな、と見上げると、一瞬前までとは別人のように厳しい表情の先生がいた。メガネが冷たく光り、まるで重い扉のように私の視線を遮る。何かが先生と私の世界を区切っているのをおぼろげながら感じ、それを何とか砕こうと呼びかけた。

「先生？」

「色に乏しく冷たい、氷の結晶。……私は雪だからな」

冗談にしてはいやに凜然とした顔で呟いた先生に、私は絶句した。出会った頃の先生はいつもこんな調子だった。私がこういうタイプの人に出会ったことがなかったのもあって、怖そうな人だという印象はしばらく消えなかった。しかし先生と一緒に過ごしてきて、それは『若柳理雪』のごく一部だったと知った。そもそも、感情を揺らさない人間はきつとそんな台詞は言わない。気持ちいをストレートに表に出さないだけで、決して色が無いわけでも、氷でもない。目の前の先生はクールを通り越して冷酷にさえ見えるけれど、気を付けて見れば唇は拗ねたようにほんの少しだけ尖っている。

何か声をかけたくて言葉を探しながら、私はゆっくりと口を開いた。

「先生。……私は、親身になって丁寧に私の話を聞いてくれる暖かさや優しさが『若柳理雪』らしいと思ってます。『理雪』はとても素敵な名前で、似合う似合わないじゃないかもしれませんが、先生には雪っていう字がすごく似合っていると思います。でも、冷たくなんかなくて、いろんな色もちゃんとあって。私は先生の言葉で、いつも元気にしてもらってます。だから、そんなこと言わないでください。……先生は自分のことを雪のように冷たい人間だと考えているかもしれませんが、私はそうは思っていませんから」

ただゆき、と口に出したのはこれが初めてだった。雪の理、なん

て美しい名前——そしてたぶん、先生の教え子でいる限りはもう呼ぶことのない名前だ。そう考えた途端みるみる目頭が熱くなってきた、顔を見られないように風下を向いた。私なりに素直に思っていることをぶつけたのだから後悔はしていない。でも、生意気なこと余計なこと——気休めの慰めや同情だと思われていたら。

先生は白衣がはためくのも気にせず、無言のまま立っている。気まずさがじわじわと苦しくなり、私はあつという間に音を上げた。

「……私、今日はもう帰りますね。励ましていただいて、ありがとうございました」

できるだけ明るく言って一礼し、扉へ向かう。踏み出す足は予想外に重くて、歩いても歩いても校舎は近づいてこなかった。

あと数歩、扉の向こう側に入ってしまったえばどんな顔をしたって先生には見られなくて済むから、もう少しだけの我慢。そんな矢先、私の身体を鋭い破裂音が打った。

「藤倉！」

それに続いて追ってくる低い声が、建物にぶつかって反響する。衣擦れが耳に触れて恐る恐る振り向く。先生は私のすぐ後ろまで近づいて来ていて、さっきまで彼が立っていた非常階段の辺りにはマグカップの破片が散らばっていた。状況がよく分からないまま、私はやつとのことです「先生、カップが」とだけ、口籠もるように答えた。

「ああ、落としてしまった。……それはどうでもいいんだ」

先生は俯いたままメガネを押し上げ、すぐに意を決したように顔を上げた。

「さっきの椿の話は嘘なんかじゃないから、誤解しないで欲しい。

……決して、無視していたわけではない。昔からこんなひねくれた性格だったからな、優しいとか、そういうことをあまり言われ慣れていないんだ」

「大丈夫です」

「いつも、すまない」

まじまじと見つめられて、慌てて濡れた頬を撫でて俯く。驚いたからかすでに涙の生産は止まっていたものの、まさに目一杯溜めていた分はごまかしきれなかった。最近、ことに白衣の一件以来、私の涙腺は決壊しやすくなっているけれど、それは先生のせいではない。

「もう、泣きませんから」

もし彼がそれらに胸を痛めていたんだとしたら。先生の前で誓ったからには、もう後戻りはしない。これ以上困らせたくはないから、この涙っぱさからは卒業しなくては。

「藤倉らしいな」といつも通りの先生の声が降ってきて、視界の上の方で大きな手がゆっくりと動くのが目に留まった。その手は私の髪にそつと触れ、思ったより温かくてごつごつした感触が何度か前後する。誰かに頭を撫でられるなんてしばらく経験がなかった。私の頭を、先生が――心地よさや嬉しさよりも恥ずかしさが先行して身体を強ばらせていると、先生は終わりの合図のようにポンと手を弾ませた。

涙の乾いた私が見上げたところには、彼の瞳の温度はすっかり元に戻っていた。

「新学期は担任も替わるだろうが、生徒に気を使わせるような頼りない教師でもよければ進路相談にでも来なさい。そうだな、誕生日はコーヒーでもご馳走するから、気が向いたら準備室に来るといい……いい豆を仕入れておくぞ」

「はい！ 行きます、絶対」

夕日を背負って、先生は照れくさそうに微笑んだ。まだまだぎこちないけれど、その表情には誰が見ても笑顔だと分かる穏やかさがある。さっきまで私を感じていた壁は消え去り、皮肉っぽい言葉にも刺々しさや自嘲は微塵もない。

先生に積もった雪は少しずつ、確かに溶け始めている。色々なことが怒濤のように押し寄せた今日だったけれど、その瞬間に立ち合

えたことを思うだけで幸せになれる。理雪と口に出せたことにだつて、今は感謝すらしていた。

「ああ。……さて、後片付けだ」

先生は思い出したように階段の辺りまで戻ると、白衣をたくし上げてしゃがみ込み、マグカップのかけらを拾い出した。私も手伝おうと駆け寄りながら、先生につられて綻んでいた。

可愛い顔して……

俺は、助手席で平和そうな寝息を立てている藤倉を眺めながら、自分の汗ばんだ手のひらをきつく握った。夜八時、普段なら部活動さえ終わっているような時刻に俺の車の中で女生徒と二人きり、おまけに、彼女が着ているのは俺の服だ。

どうしてこんな事態になっているのかを説明しようとすれば、話は少し長くなる。

外はまさに、惨憺たるありさま。

台風による悪天候のために今日は三校時までで休校になった。もっとも、交通機関は朝からマヒしていて登校すらできなかった生徒も多く、教室には空席が目立っていた。朝は動いていた市バスも下校の頃にはまともに動いておらず、帰りがけには学校前の屋根付きのバス停で生徒たちがひしめき合っていた。

駅に着いたら着いたで、改札口には『強風のため全線運休』の張り紙が掲示され、復旧を待つ溢れんばかりの客でこった返している。そんな喧噪の中、待合いロビーで見覚えのある生徒が立ちつくしていたのだった。

「藤倉」

不安だったのだろう。呼びかけた声が俺だと分かった、ガラス越しに打ちつける雨を眺めていた藤倉は安堵の笑みを浮かべてこちらを見た。

「先生！」

「もう二時を回っているぞ。生徒はとっくに帰っているはずだろう？」

「学校に自転車を置いて歩いて来て、雨宿りを。先生は、どうしてここに？」

「ちよつと野暮用があつたんで、寄り道していたんだ。それより、どうした。ずいぶん壮絶な格好だが、大丈夫なのか」

横殴りの暴風雨の中、よくここまで来られたものだ——とはいえ無事ではないらしく、藤倉がかなり消耗しているのは一目で分かった。髪からは水が滴り落ち、彼女の顔の輪郭に沿ってぺったりと貼り付いている。それが気になるのか、藤倉は慌てたように髪を整えながら答えた。

「……実は、困ってました」

聞けば、藤倉専用の合い鍵をテーブルの上に置いたまま登校してしまい、それに気づかずには後から出勤した母親に閉め出されてしまったとのこと。鍵を持っているのはその母親だけだが、職場に行くバスや電車は当然ながら運休で、途方に暮れていたという。

「お母さんの帰りは遅いのか？ お父さんはどうした？」

「母は夜勤なので職場に泊まりです。父は単身赴任中なので……とりあえずここで時間を潰して、服が乾いたらタクシーでも拾って母の職場に行ってみようと思っていました」

藤倉は自分に言い聞かせるかのように強い口調で水浸しのカバンを持ち上げる。足下の床には小さな水たまりができていた。かわいそうに、明るい紺色のはずの制服のスカートは飽和状態にまで雨を吸い込んで墨色に変わっている。ブラウスは髪の毛同様びったりと身体に張り付き、普段よりもさらに小さい印象に——そこでやっと、慌てて目を反らす。とりあえず、俺は横を向いたまま自分の上着を脱いで差し出した。

「羽織りなさい」

「え？ でも、濡れちゃいますよ」

「いいと言っているだろう」

「……ありがとうございます」

遠慮がちに上着を受け取った藤倉は、しかし慌てて濡れた制服を

隠した。

「タクシーはまともに動いていないぞ。制服だって、どう考えても乾かないだろう?」

やっと顔を見て話ができるようになりいつものように見下ろすと、首が折れるのではないかと思うほど曲げ、細い顎を突き出すように俺を見上げている彼女と目が合った。不安と安堵が入り交じった丸い瞳、今日はいつもより一回り小さく見える身体——どうも、この小動物のような生徒を前にすると調子が狂う。

助けてやりたくても校外で女生徒と二人きりになることにはためらいがあつたのは事実。しかし、彼女のこの姿を見て放っておけるわけもない。

「藤倉さえ良ければ、車で送ろう」

「いいえ。そんな、悪いです!」

藤倉は過剰反応ではないかと思うほどに首を振り、すぐに辞退した。

「いえ、あの、先生だってこんな日は早く家に帰りたいんじゃないかと思つて」

「外がこの様子では俺だつてどうせすぐには帰れないから、気にしなくていい」

「びしょ濡れなんですよ。車、汚しちゃいます」

「あとで乾かせばいいんだ。……もう断る理由はないだろう」

「……そう、ですね」

まるでボケとツツコミのようなテンポのやりとり、彼女は思わず苦笑する。俺もつられて口元を引くと、「で、お母さんの職場というのは」とやっと本題に切り込んだ。

藤倉は市街地からやや外れた場所にある大きな病院の名前を告げ、看護師なんです、と付け足した。そこなら俺のアパートは通り道になるから、飲み物くらいは出してやれる。ただ、田舎だけに迂回路が少ないので、道路事情に若干の不安はあつたが。

「こんな日に夜勤とは、仕事とはいえ大変だな」

「でも、いくら天気が悪くたって、病氣の人が減るわけじゃありませんから仕方ないです。……本当に、ご迷惑じゃないですか？」
答える代わりに、俺は彼女の手から存分に水を吸ったバッグを取った。わずかに触れた手は想像以上に小さくて冷たい。

藤倉はカバンを持っていた手を所在なさそうに動かしていたが、やがてこちらに向かって深々と頭を下げると小走りで俺の後へと従った。

風雨が弱まる気配はなく、それどころか朝よりもやや勢いを強めつつあった。風で電線が切れたのか、信号機が停電していたところで渋滞。路上はどこから飛ばされてきたゴミや木の枝が散らばり、ところによっては道路が冠水してしまつて通行止め。

信号待ちの車内には、車に打ち付ける雨の音だけが響いていた。密室での居心地の悪さからか、藤倉は外ばかりを眺めていてほとんど会話がない。バチバチという雨音が充満するのを防ぐかのように俺は努めて楽しげに――俺のできる限りの明るさをもつて話しかけた。

「……それにしても、似合わないな」

似合わない、というのは今現在藤倉が着ている俺の服のことだ。途中、タオルと当座の着替えの調達を目的に、藤倉を半ば強制的に連れて俺のアパートに寄った。部屋へと入るまでは無駄な抵抗をしていた彼女だったが、背に腹は代えられないといったところだろうか、やがて諦めて俺に従った。藤倉の身仕度が調う間に淹れたコーヒーで一服すると、先を急ぐためにあわただしく車に乗り込み、今に至っている。

できる限り丈の短いものを選んだにも関わらず、小さな藤倉は完全に服に『包まれて』いる状態だった。ハーフパンツをぴったりの長さで履いている状態というのは、恐らく今後の人生の中では見る

ことがないだろう。そう思うと、どうにもおかしさが込み上げてくる。笑いを噛み殺しながら横目で隣を見ると、藤倉が口を尖らせているのが目に入った。

「笑わないで下さい。……先生の足が、長すぎるんです」

笑うな——以前の俺に対しては考えられなかったそんな突っ込みにも、最近では慣れつつある。どうやら、会話の導入には成功したようだった。

「足が長いかどうかは別としても、サイズが合うはずがないんだ。笑って悪かったな。……まあ、諦めなさい。風邪でもひかれたら俺の授業にも出られなくなるしな」

「いえ、そんなに気にしていませんよ。確かに、ちょっと面白い光景だと思いますし」

藤倉はそう言いながら自分の出で立ちを再確認し、ハーフパンツの裾をつまんで困ったように首を傾げた後に、自らぷつと吹き出した。そんな他愛もないやり取りで車の中は暖まり、変な緊張感も薄らいでくる。

ちょうどそこで信号が青に変わり、路面を覆う雨水を割りながら車を発進させたものの、すぐに渋滞に掴まる。どんな話題を振ろうかと迷ったところで、今度は藤倉が話しかけてきた。

「先生、さっきは黙っていてすいません」

「気にするな。疲れているなら、俺のことなんか気にせず少し休むといい」

「いいえ、そんなことはないんです。……ただ、雨の日はちょっと苦手なので、つい無口になってしまいました」

「苦手？」

「はい。雨の日……というよりは、雷がダメなんです」

何気なく話しているように見えた藤倉の声が、わずかに曇ったのが分かった。

「小さい頃、留守番をしていたときに近所に雷が落ちて。詳しくは覚えてないんですが、ほんとうに怖かったってことだけは忘れ

られません」

「では、こんな日に家に一人きりというのも心細いな。……あまり、思い出したくない話だったんだろう？　悪かったな」

「そんなことないです。前は少し寂しかったりしたこともありましてたけど、今は平気ですよ。それに、その——今日は一人じゃないですから、怖くないです」

藤倉は言ってから照れたのか、慌てて外に視線を投げた。俺も予想外の言葉に気恥ずかしくなり、車内には再び沈黙が訪れる。

何か言おうとしながら、俺は嵐の中で雨をいやというほど浴び、雷の恐怖に耐えながら傘を支える藤倉の姿を思い浮かべていた。そして、藤倉がさっき駅で声を掛けたときに見せた、安心しきった表情も。

おそらく雷が怖いとか留守番が寂しかったとか、そんな弱音は両親にさえ伝えていないだろう。

彼女はいろいろと我慢して溜め込むタイプらしく、例の防火扉の向こうは唯一と言ってもいいくらいのがス抜き場のようだった。藤倉が何かをこらえる表情は幾度か見たことがある。俺自身がその原因であることもしばしばだが、そのほとんどはあの場所での出来事だ。今日の俺は、少しでも罪滅ぼしができているのだろうか。

「家に着くころには雷も止むさ。……お役に立てて光栄だ。責任持つて送り届けるから安心しなさい」

彼女は憂いを追い出すように微笑むと「はい」と答えて俺を見上げた。座った状態だというのに、この身長差もとい座高の差は何だろう。彼女が言うように足が長いかどうかは怪しいが、俺の服を彼女が着こなせるわけがないと改めて納得する。

そんなことを考えていると、藤倉は何か思いついたらしく「あと小さく呟いた。

「そう言えば先生、話は変わるんですけど。……いつもは『私』ですよ？　今日は『俺』なので、びっくりしました」

思い返してみると、駅で藤倉に会って以来『俺』で通していた。

いつもならしつかりと公私を分けるようにしているのだが、今日は相手が藤倉だからといい意味で気を抜いていたかもしれない。

「普段はな。一応使い分けているんだ。学校では私、プライベートでは俺」

「じゃあ、表が私で裏が俺ですか？」

「そんなところだな。放課後だから裏で許してくれ」

「裏の先生も、表と同じく優しい先生ですね」

俺にとっては放課後の自分が表なのだが、生徒の立場からすれば若柳先生が表、そうでない俺は裏らしい。

「そんなことないさ。……藤倉は表裏がなさそうでいいな」

「それ、誉めてくださってるんですね？」

彼女はやや疑わしそくに確認を取ったが、俺が「もちろん」と答えると屈託なく笑った。

先生が雪のように冷たい人間だなんて思っていない——藤倉の言葉は今でも鮮明に思い出せた。藤倉はいつでもまっすぐに俺に向かい合ってくれる。その素直な感情表現は俺には羨ましく、尊敬すべきものでもある。

しかし、俺はずるい大人で、藤倉には見えていない『良くない』部分だってたくさん持っているのだ。

無事に鍵を受け取った帰り道は、行きと違って予想以上にスムーズに進んでいた。雨は降り続いてたが幾分小降りになったし、先ほどは消えていた信号も復活している。ただ、雨足が弱まるにつれて雷が鳴り始めたのが気がかりだった。それと共に隣の藤倉から言葉が消えていき、ついには無言になってしまっている。

「藤倉、雷は大丈夫か？」

たまらず尋ねたが、いくら待っても返事はない。不審に思って信号待ちの間に助手席を見ると、疲れが出たのか、藤倉はがくりと頭

を垂れて静かな寝息を立てていた。

「……寝た、か」

登校から今の今までずっと気を張っていたのだ、疲れもするだろう。藤倉家の詳しい場所を聞くためにはいずれ起こさなくてはならないが、今くらいは休ませてやろうと、俺はとりあえず自分のアパートを目指すことにした。

ところが、アパートの駐車場に入ってもなお、彼女は眠ったままだった。

（……可愛い顔して寝るもんだな）

初めて会ったときのあどけなさがまだ残る寝顔。それを見守る俺の心の中でじわじわと何かが溶け出し、いつぱいになって溢れる。近頃、たびたびほとばしる感覚だった。

俺は何気なく手を伸ばし、すっかり乾いた彼女の髪の毛、そして頬にそつと触れた。柔らかく俺の指を押し戻す感触に、溢れ出した何かは暖かさとなって広がっていく。このままずっと触れていたい——そんなことを考え、そこで慌てて手を引っ込めた。

（何やってるんだ、俺は）

今、自分のしたことへの驚きと自己嫌悪、まだ手に残る藤倉の柔らかさ、暖かさ。いろいろなものがない交ぜになった感情を持て余して、俺はハンドルに突っ伏した。しばらくそのままの格好で冷静になろうとしてみたが、徒労だということはすぐに分かった。いくら待っても溢れ出したものは湧き出し続けて止まりそうもない。

そろそろ九時を回る。とにかく、今は彼女を家まで送ろう。

「藤倉、起きなさい」

俺の呼びかけに、彼女の眉がちょっとだけ動く。うろたえていて正直それどころではないのに、声が普段の通りなのが我ながらおかしい。

「そろそろ帰るぞ」

「……ん」

二、三度瞬いて、藤倉がやっと目を覚ました。顔を上げるとぼんやりと正面を眺め、軽く頭を振ると右を向く。そこで、彼女の顔を覗き込んでいた俺と目が合った。

寝ぼけ気味の藤倉は一瞬事態が把握できずにいたらしかったが、俺に気付いたとたんにぱっと目を見開いて声にならない声を上げると、ちよつと前の誰かのようにダッシュボードに顔を伏せてしまった。

「おはよう、藤倉」

「油断してました。……恥ずかしいです。結構寝てましたよね？」

「もつと寝かせてやりたいのはやまやまなんだが、あまり遅くなるのな。……そうだ。その物入れ、開いてみてくれ。中に俺の名刺が入っているはずだ」

「名刺？」

仕事で使っている名刺の予備を入れっぱなしにしていたのを思い出したのだった。藤倉はやつとゆるゆると顔を上げると、俺の言うとおりに車に据え付けの小物入れを開けて名刺を一枚取り出す。

「雷、不得意なんだろう？ 心細くなったら連絡しなさい」

「あ、携帯番号！ いいんですか？」

「例えば今日のような事態で、俺が通りがからなければどうするつもりだったんだ？ 教えておくから、困ったときには遠慮せずにかけてくれ」

藤倉は俺がうなずくのをしっかりと見届けると、まだかなり湿っている通学カバンからやたらと物の詰まったビニール袋を取り出し、さらにその中から携帯電話を探し出す。どうやら、荷物が濡れないようにカバンの中身をビニール袋に入れていたらしい。準備が良いかと思えば鍵を忘れたり、しっかりとっているのかおっちょこちょいなのか、いまいち掴めない。

藤倉は俺の心中など知る由もなく無邪気に電話のボタンを押していた。もつとも、今の俺の心境を看破されてしまうとかなり困ってしまうが。

やがて一仕事終えたらしく、名刺と電話をカバンにしまった彼女は人懐っこい笑顔を見せた。

「さっそく登録しました。……なんだか心強いですね」

「そうか？ ……さあ、いいかげん出るぞ。ナビをよろしく頼む」

俺は踏み出してしまった一歩を悟られぬように、いつも通りを装って車を出した。

彼女を自宅まで送ってからアパートへ戻ると、携帯電話のイルミネーションがメールの着信を伝えていた。新着、一件。見覚えのない番号に、俺は急いで受信トレイを確認する。

メールのタイトルは『先生、藤倉です』だったが、名乗らずとも文面だけで差出人が藤倉だと分かる。俺は、一字一字を確認するかのように、ゆっくりと画面をスクロールさせていった。

お言葉に甘えて初めてメールをします。

緊張します…。

今日はご迷惑をおかけしましたが、本当に助かりました。

ありがとうございます。

雷は遠くに行つたみたいなので、私はもう大丈夫です。

それよりも、先生は無事にお家に着きましたか？

雨は小降りになりましたが、少し心配です。

お借りした服は、あとでこっそり準備室にお返ししに行きますね。

それでは、お休みなさい。

何度も彼女のメールを読み返して考えたが、返信は当たり障りのない内容に落ち着いた。送信ボタンを押した後も携帯電話を握ったまま、俺はぼんやりとディスプレイを見つめ続けた。

はじまりは、あの秋の日だった。

藤倉と出会ったのは『教師は感情を動かさなくても仕事に支障はない』と悟った矢先で、俺は無表情、無感動に日々を送っていた。もともとそんなに付き合いの良くない人間だから、そんな生活にも特に不便さや不自然さは感じなかった。

しかし初めて藤倉と話した日、俺の中のルールはひっくり返った。以来、藤倉に先生は優しいと言われればそうありたいと思うし、彼女の瞳に涙が浮かんでいるのを見ればマグカップを取り落とすほどに胸が痛くなる。冷えた心に差した温かくてほんのりと灯る光は、幾度追いつくと頑張っても、見て見ぬふりで逃げようとしても頭から離れない。

彼女に触れた左手から、厚い雪はまた溶けていく。この想いは唐突に零れ出したわけではなく、これまでずっと考えるのを避けてきただけで、募ったものに名前を付けるのは簡単なことだった。

俺の中には彼女がいる。俺は、藤倉に惹かれているのだ。

白々しいにも程がある

秋も深まって紅葉が綺麗に染まるころ、今年も文化祭の季節がやってきた。通称『橙高祭』は、いよいよ明日・あさつて。部室で舞台の準備を終えると、薫ちゃんと別れた私はいつものように防火扉の向こうへと足を運んだ。

「先生」

「ああ、君か」

私の声に振り向いた先生は、肌寒いくらいの空気の中、白衣とワイシャツを肘まで捲り上げていた。夕方の日差しのせいか、いつもより優しい先生の眼差しに出会う。

「腕、寒くないんですか」

「寒くないわけではないが、汚してしまつてな。……明日の準備をしていて水槽の中身を被つてしまったんだ」

「水槽？」

「カエルとイモリとドジョウが入っていて——」

「あの、詳しい説明はいいです」

そういえば、先生は生物部の顧問だった。ナマモノ達の羅列に慌てて話を遮ると、先生は「苦手だったか？」と目を細めた。同じ文化部仲間の晴れ舞台、前日になって中止なんてことがあったらいたたまれない。気になってその先を尋ねる。

「それで、生き物と水槽は無事だったんですか？」

「何とかな。さっきまで部員達と回収作業に追われていたよ」

回収作業、と聞いて背筋が寒くなったが、明日からの展示には影響がないという。先生と生物部員達がどたばたしながら生き物を追いかけている姿が目に見え、私は思わず微笑んだ。

「じゃあ、明日が楽しみです」

「いや。……去年、真面目に展示監督をしていたらひどい目にあつたから」

「『今入部すれば、若柳先生があなたを橙高祭にエスコート!』…
…でしたっけ」

「そんなくだらないこと、早く忘れなさい。今年は見世物になるのはごめんだな」

『去年のひどい目』というのは、先生の女子人気をダシにして部員募集をした結果、生物室に入りきらないほどの人がごった返していたいへんなことになったのを指している。生徒の中では橙高祭の新たな伝説として語り継がれているのだけれど、先生がそんなことを知っているはずもなく、当の本人は去年もこの場所で『私は動物園の動物か?』とぼやいていた。

苦虫を噛みつぶしたような顔で、若柳先生は先生らしからぬ決意表明とともに遠い目をする。

「同じ過ちはしない。どこかで絶対に抜けるつもりだ」

「サボりですか?」

「未来への退却と言ってくれ」

「それなら、ぜひうちの部を見に来てください。明日の午後と、あさつての午後です。今年は吹奏楽部と合同で、生演奏つきなんですよ」

私は、ここぞとばかり演劇部の売り込みを始めた。去年はそのゴタゴタで先生に舞台を見てもらえなかったので、今年こそはと考えていたのだ。

「演目は?」

「ウエスト・サイド・ストーリーです。私、歌も歌います。蔦さんと一緒に」

「ふうん」

「私の歌は——まあ、面白いと思います。あ、でも、吹奏楽の音楽は文句なしに素敵ですよ」

関心があるのかないのか分からない先生にたたみかけるように、小出しにネタを披露する。歌、と言ったところで先生の眉が少しだけ動いたのを、私は見逃さなかった。

ウエスト・サイド・ストーリーはロミオとジュリエットを下敷きにした悲恋の物語だ。私は主人公の一人、マリアの役をもらったものの、一般のお客さんが入るあさつての舞台では三年生の先輩に譲った。それはもう一人の主人公・トニーを男装で演じる蔦ちゃんも同様で、彼女も明日行われる生徒へ向けた公演のみの出演だ。

「ミュージカルか。それは少し興味がある」

「ダブルキャストなので、私と蔦さんが出るのは明日だけなんですけど」

「分かったよ。……では、明日は少しでもサボって観劇といくか」

「良かった。ますます気合いが入ります！」

「正直だな。……意外と、ギャラリーがいた方が燃えるタチなのか？」

よほど目を輝かせてしまったのか、彼は私の顔を見るとこらえきれないと言った様子で破顔した。

最近、先生の喜怒哀楽もだいぶ分かり易くなってきたように思う。それは、私が先生の表情を読むのがうまくなってきたわけではなくて、先生自身が出す色が以前よりもはっきりしてきたからだ。

不器用ながらもまっすぐに飛んでくる思いを受け止めるのには多少コツがいるけれど、私はそのキャッチボールが楽しくて仕方がない。まさか、『見に来るのが先生だからです』と言うわけにもいかな

い。何かフォローを入れようとしたが、すぐに思い直して貴重な笑顔を目に焼き付けようとしばらく黙る。すると今度は先生が、私に聞こえないくらいの小さな声で何か呟いた。

「え？」

「いや。……さあ、そろそろ下校時刻だぞ。明日に備えて、早く帰って休みなさい」

言葉を濁し、先生は立ち上がると校舎の中に入るよう促した。

先生に防火扉を開けてもらって建物内に戻る。先生がマグカップより重い物を持っている姿は想像できないのだけれど、間近で見ると意外にも筋肉質な男の人らしい腕だった。

「頑張ります。……それでは、また明日」
別れ際、生物準備室の前で軽く会釈をすると、私は実験棟を後にした。今日はちゃんと眠れるのだろうか。明日はセリフや歌詞が飛ばないだろうか。先生が見てくれるというだけで、そんな悩みなど吹き飛ばせるほどの力が湧いてきていた。

次の日の夕方。

演劇部と吹奏楽部のウエスト・サイド・ストーリーが文化部発表のトリを無事に勤め上げ、橙高祭初日のメインイベント『宵祭』の時間がやってきた。夕焼けの空が徐々に藍色に変わりつつあるころ、生徒も先生もみな体育館に籠もり、実行委員会主催の様々なアトラクションを見物するはずの夜。

部室に荷物を運び、先ほどまでの舞台の後片付けを終えてすぐに、私はその熱気を避けるように一人実験棟へと向かった。

防火扉の外へ出ると、先生がいつものようにコーヒーを飲んでいた。非常階段に腰掛け、手にはビールを持っている。いつかここでマグカップを割ってから、ずっと新しいものを買っていないいらしかった。

「先生、サボってますね？　今頃はきつと『ミスティク橙南』やってますよ」

「女装コンテストか」

「うちの部から衣装を借りていった人もいました」

「見に行ったらどうだ？　……実は、今年は私にもオファーが来たんだ。全力で断ったがな」

「え！　先生が出るなら見ます」

「やめてくれ」

「来年はぜひ出てください、先生でも着られる衣装を準備しておきますから。……先生、足が長いからチャイナドレスとか似合うと思

いますよ」

「いい加減にしないで。……君こそどうした。宵祭には出ないのか」
「ええと……あまり興味がなくて」

先生はメガネのブリッジを押し上げると、私を見て眉間に皺を寄せる。

「強制参加ではないからな。準備が残っている生徒は出ていないし、私も人のことは言えないから戻れとは言わないが」

「すみません」

「まあ、いいさ。……さつきは押しかけてすまなかったな。邪魔になるかと思っただが、宵祭には初めから出ないつもりだったから早めに言っておこうと思った」

発表が終わった直後、先生はわざわざ私と薦ちゃんが控えていた舞台袖までねぎらいの言葉を掛けに来てくれた。私がその背中を目で追っていると、先生はやがて宵祭の準備が始まった体育館をひっそりと後にしたのだった。それを見て、きつとここ、扉の向こうにいるだろうという確信を持って先生に会いに来たのだ。

「邪魔だなんてとんでもないです。みんな、驚いていたけど喜んでましたよ。……わざわざありがとうございました」

「それならいいんだ。楽しめたよ。藤倉の歌もなかなか上手かった。……ところで」

窮屈そうに膝を抱えたまま座り続けていた先生は、ピーカーを空にすると立ち上がった。もう戻るつもりなのだろうか。

「白々しいぞ、不良生徒。見たところ、着の身着のままだな。何か、急ぎの用があるんじゃないのか」

私はいえ、先生を追って急いでいたためにさっきまでの舞台衣装——真っ白いワンピースに制服の上着を羽織った格好という、なんともアンバランスな服装だった。それを見とがめて、先生はため息混じりで苦笑いした。

この場所からは、今にも夕闇に沈もうという体育館——宵祭の会場が見える。体育館を出る先生の後ろ姿がなぜか寂しそうに見えて、

いてもたってもいられずここまで来た。一年に一度の賑やかな日を抜け出して、いったいどういう気持ちで一人コーヒーを飲んでいたのだろう。

「私、先生を追いかけてきたんです。体育館から出るのが見えたので」

「どうして？」

「お渡ししたいものがあつて。……演劇部には掟があるんです。舞台の後、一番に声を掛けてくれたお客さんにはお礼に小道具をひとつ差し上げるっていう」

本当は掟なんかよりも私個人が先生にもらつて欲しいという気持ちのほうが強いんだけど、それが先生を探しに来た建て前だった。小道具をはぎ取られない役者は、部員内での評価が下がる。受け取ってもらえないときには押しつけるくらいの勇気がないと、舞台度胸を認められない。

私は、制服のポケットからさつき舞台で着けていた小道具——ガラスビーズをあしらったワイヤーリングをそと取り出す。明日の舞台のことを考えて先輩の演技に支障が出ないものを探したらこれくらいしか見当たらなかった。しかし、かさ張らないしいかにも安っぽいので、先生も受け取るのに抵抗がないだろう。

「これ、良かつたらもらってください」

「生徒たちが主役の祭だ。私が受け取っていいものではないだろう？」

「そんなことないです」

「今の私は、高校生のような気持ちで君たちと文化祭を楽しむということはできない。そんな私が譲ってもらっても、君たちの素晴らしい舞台に失礼だ」

「私は、他のみんなも私も先生も同じ時間について、文化祭と一緒にしてるって思っていました。……こだわらなくてもいいんじゃないですか。私は先生が来てくれて嬉しかったから、これをもらって欲しいと思って来たんです。それじゃ、ダメですか？」

目の前に立ちはだかる壁を少しでも低くしようと、私は全力で食いつ下がつた。先生の視界に入るように指輪を高く掲げて、せいっぱい背伸びをする。すでに日が落ちた外はいつもと違って暗く、そうでもない先生が顔がよく見えなかったのだ。

「私、本当はあと八年早く生まれて——いえ、七年でも六年でもいいんですけど、先生と一緒に文化祭をしてみたかったです。……でも、私が今こうして先生と一緒に過ごしている燈高祭は、そんな想像よりももっともっと楽しいです。今年のお祭と一緒に楽しんだ証拠に、受け取ってくださいませんか」

やり取りの中で、この指輪を受け取ってもらえれば先生との心の距離が少し縮まる、そんな気がしていた。できる限り先生を見上げ、私は思っていたことを素直に伝える。思わず、先生が好きだから、と言ってしまうようになるのを喉の奥に留めるのに必死だった。場面が違えば告白のようにも取れる言葉だったことに後から気付いて、私はそのまま俯いた。

「……私も似たようなものだ」

しばらくして、先生が静かに呟いた。何が似たようなものなのだろう——疑問に思った私が顔を上げると、一旦は立ち上がった先生は再び階段に座り直し、私に隣の空いた場所を示した。ジェスチャーに従って私が腰掛けると、彼は体育館の方に視線をやったまま話を切り出す。

「昨日、私がおか言いかけてやめたのを覚えているか？」

「あ、はい。私が聞き取れなかったことですね」

「こういうのも悪くないな、と言ったんだ」

さっきの沈黙は言葉を選んでいた時間だったらしく、先生は多少照れくさそうに、しかし蕩々と話を続ける。

「展示物を前日になって慌てて準備したり、打ち上げの相談をしたり、周りの進行状況を聞いたり、いろいろな根回しに駆け回る実行委員を見かけたり——ここに来てみれば、君が居残って必死にセリフを覚えていたり。今年は、そういうことを見守るのが面倒だと思

わなくなった。……高校生に戻りたいわけではなく、今の君たちと同じ橙高祭を楽しみたいと思った。これだけ頑張ったら、さぞ楽しいだろう、と。でもまあ、それは無理な相談だろう」

似たようなもの。

私は先生と同じ世代として文化祭を体験したかったし、先生も教え子たちと同じ文化祭を同じ立場で共有したかった——そういうことのようなだった。いい意味で子供じみた先生の一面を垣間見た気がした。やや屈折した表現ではあるが、柔らかい顔つきを見ると彼なりに準備期間を楽しんだらしい。

当たり前だけれど、学校生活を生徒の立場で送ってみたいと思っても、生徒は『若柳先生』として扱っし、先生としての役割分担だっしつかりと決められている。それをきっちり理解しているはずの先生がどうして拗ねたように膝を抱えているのか、なんだか不思議だった。

「だから、ここで少し遠くから向こうを見ていたんだ。……しかし、そうだな。君と話していて少し前向きになろうという気になった。

こうして宵祭をサボるのも楽しみ方の一つか、とかな」

「先生、そんなこと言ってるの実行委員に怒られますよ」

「今こうしている時間も橙高祭なんだろう？」

普段よりフランクな雰囲気は、文化祭というイベントのせいなんだろうか。先生はメガネを直しながら私の言葉を勝手に引用すると今日初めて私の方をしっかりと見据え、すっきりした表情で「さっきの小道具、いただくよ」と口元を緩めた。

「本当ですか？」

「ああ。藤倉が今年の文化祭を頑張った証拠、預かるう」

私はずつと握りっぱなしですっかり暖まってしまったリングを、先生の手のひらに乗せた。先生はそれをそつと白衣の胸ポケットに入れると、確認するようにポンポンと上から叩いた。ポケットに浮き出た丸い形が、暗がりでもはっきり分かる。

「確かにもらったぞ。これで、藤倉も女優として認められるわけだ」

「ありがとうございます」

「サボリの証拠でもあるがな」

「それは先生も一緒です」

「なかなか言うじゃないか」

先生は困ったように顔をしかめ、話を終わらせようとしたのかすつと立ち上がった。

「今日のご苦労さま。君はどうする。宵祭に戻るのか？」

「そうですね。……今から行っても乗り遅れちゃいますし、今日は着替えたら帰ろうかと——」

「では、ほら」

先生は、続いて立ち上がろうとした私に何気なく手を差し伸べてくれた。

そういえばさっきの舞台、主人公の二人がお互いの気持ちを確かめ合ったのは、非常階段の下だったつけ。階段の下から手を伸ばすトニー、その手を取るマリア。私と先生も、もしかしたら万に一つの確率くらいで——そんな筋書きを頭から振り払う。

「コーヒーは喉に悪いかな、『女優さん』？」

「いえ！喜んでいただきます」

先生の手、掴んでいいのかな。

一瞬浮かんだ迷いは嬉しさでかき消し、私はその大きな手を取って立ち上がった。今日は欲張りすぎず、先生との距離が少し近くなった、それだけで充分だと思おう。私にもっと勇気が溜まったら、そして想いが募って溢れそうになったら、その先を考えよう——。

空のゴミに祈る。このまま世界を沈めてくれ

「流星群、ですか。……外で空を見るんですね？」

いつものように進路指導がてら茶飲み話をしていると、藤倉が目を丸くして身を乗り出してきた。

今日は観測好適日——新月で、星空を眺めるのにはもってこいの夜だ。大学の友人と星を見に行くと言うと、藤倉はいちばんに「寒くないんですか？」と尋ねたのだった。

「望遠鏡を使うから、車の中では無理なんだ。厚着をして行uksi、寒くなったら車の中に入って暖まる」

「それなら安心ですね。……天気も良さそうですし、楽しそうです」

藤倉は少しだけ口を尖らせた。彼女の家は市街地のだ真ん中だったが、今日の流星群は肉眼でも見えるほどの光度と規模のはずだから、うまくいけば藤倉家からも観測できる。俺は、羨ましそうな顔の彼女に口添えをしてやった。

「周りに明るいものがなければ、街中でも望遠鏡なしで見えると思うぞ」

「本当ですか？　じゃあ、夜になったら私もちよつと外に出てみます。今日は一人ですし」

ということは、母親は夜勤なのだろう。一人の夜も星を眺めて過ごすなら短く感じるかもしれない。

「それはいいことだが、君こそちゃんと着込んで見なさい。それと、常識的な時間で帰るようにな」

「はい、分かっています。……流れ星がたくさんだとお願いのしがいがありますね。夜までに考えないと」

「流星群にかけた願いがすべて叶うなら苦労しない。藤倉なら、神頼みよりも自分で頑張った方が早いような気がするが」

彼女は眉根を寄せて少し考え込むと、「そうでしょうか」と呟く。「君なら、な。まあ、もちろん私も人のことを言えたものではなく

願掛けしたいことだらけだが」

ひいき目ではなく、藤倉はやればやるだけ伸びる生徒だということとは担任として保証できる。生物だけが抜きんでいた成績は他教科も徐々に上がってきているし、それでいて部活にも手を抜いていない。そんな彼女が星に願うことは、いったい何なのだろう。

「お互い、たくさん見えるといいな」

そう言うと、藤倉はにっこりと笑ってうなずいた。

塩出文人は現役大学院生だが、二浪の末の大学合格だったので俺よりも二つ年上の元同級生だ。同じ学科、同じ講座と来て、研究室は分かれてしまったものの現在の俺の一番の友人である。

「月が出てないからよく見えるな」

隣で、その文人が嬉しそうに望遠鏡をのぞいていた。天体観測は大学に入ってから始めた趣味で、もともとは彼の趣味に付き合わされたのが始まりだった。社会人になってからはなかなか行く機会に恵まれなかったが、今日は文人の誘いで久々に郊外の高原まで足を運んだのだ。

「……なあ、なのに何で俺は男二人でこんなロマンチックな場所に来てるんだ」

「俺を誘ったのはお前だぞ、文人」

「そりゃそうだけど。でも、できればこういうところは女の子と来たいだろ」

「言ってる。……と、悪い」

タイミング悪く、ちょうどそこで俺の携帯電話が鳴った。

先生、こんばんは。夜分にすみません。

今、家の窓から空を見えますが、やっぱり灯りがまぶしくてよく分かりません。

そちらでは流れ星、きれいに見えていますか？

先生は外にいらつしやると思いますが、風邪を引かないように観測してくださいね。

藤倉だった。文面からは落胆の色がにじみ出ている。

彼女の街から空はどのように見えているのだろうか。できることなら俺の目の前の景色を分けてやりたいが、無理なものは仕方がない。自分のいるところからは流星群がともはつきり見えること、期末テストは願掛けに頼らずに頑張ること、温かい飲み物で暖を取りながら観測していること。それらを手短に返信して電話をポケットにしまうと、文人がニヤニヤしながら俺を見ていた。

「何だい、嬉しそうに。彼女？　俺のことは気にせずここに呼べ、呼べ」

「違うよ」

「じゃあ今のは？　あ、教え子？　もしかして女子？」

「それは――」

俺の教え子で、同時に心から愛でたい存在であり、一方では憧れ。そんなことが頭をよぎって一瞬ひるんだ俺に、文人はさらに尋ねる。黙ったりなどせずに正直に答えれば良かったのだが、口籠もった時点で負けは見えていた。悪友は俺の沈黙で確証を得たらしく、自信たっぷりに言う。

「答えは『ちよつと気になる女生徒』」

「うるさいな」

「なあ。もしかして、ほんとに本気で好きなの？」

文人を眺めたまま考え込んで無言になった俺に、彼は何かを感じ取ったらしい。ふざけすぎたと思ったのか、文人は慰めるように俺の肩を叩いた。

「からかってごめん。お前、よく笑うようになったのはその子のおかげか」

「彼女以外の人間にそれを指摘されたのは初めてだ。自分でも分かっているつもりではあるんだが、そんなに違うものなのか」

「自覚ないのか。お前、変わったぞ」

「いや。……俺自身が一番戸惑っているんだ」

「それそれ。その顔だよ。丸くなったって言うか、柔らかくなったって言うか、そんな感じ」

彼は星のことなどそっちのけで俺の顔を観察すると、「きつと、いい子なんだな」と笑った。

「ああ、自慢の生徒だ。努力家で、まっすぐで」

「はいはいはいはい、ごちそうさま。……しかし、いろいろ考えちゃうと茨の道だなあ。今受け持つってことは高二？ お前に残されてるのはあと一年半だけだろ。いつそ、言っちゃえば？」

「卒業まで待てば、何の気掛かりもないだろう」

「ま、それが無難なんだろうけど、そんなに待てんの？」

「実際のところ分らない。……簡単に言えたら楽だろうが、俺は教師で彼女は生徒なんだ」

それだけでなく恋愛沙汰には強いとは言えない俺が、この先自分をどれだけひた隠しにできるのか怪しくはある。残りの一年半、例えば彼女と二人きりになったら――夏の嵐の夜にすでに前科があるからこそ、何事もなく、つまりは思いを告げずにいることができるのか甚だ疑問なのだった。

例えば世界が沈んで、この星の上に彼女と俺だけしかいなければ今すぐにでも伝えられるのに。教師だの生徒だの年の差だのという括りがなくなつて、何も気にせずに二人の人間として存在できるならどんなに楽だろうか。

（そうか。自分だけでは何ともしがたいことは、星に願いたくなるんだな）

相手があるということは、なんともどかしいのだろう。仮に伝えたところで心が通じ合うのかどうかも分からない。自分で頑張った方が早いなんて言える立場ではなかった、と一人で苦笑いしていると、文人がぼつりと呟いた。

「でも、好きなんだろ」

「ん？」

「そればかりは、どうしようもないじゃないか。教師だからって、人を好きになっちゃいけないってわけじゃないんだし。理雪がその子を好きだと、誰かが不幸になったりするか？」

いつもは軽いノリの友人が珍しく真顔で、言葉を詰まらせながら話す様子にはっとして文人を見る。

「お前、確かに角は取れたけど、よく笑うようになったら黙って悶々としてるのはかえって辛そうなんだよ。卒業待つ意志があるくらい本気で惚れてるんなら、責任とか全部自分が背負うつもりで、お前が本当に思ってるとおりにした方がいいと、俺は思う」

文人は静かにそれだけ言うと、無言で再び望遠鏡に向かい始めた。恐らく、俺に考える時間をくれたのだろう。

星に願いを掛けて楽ができたなんて虫がいいにもほどがある。

妨げになるものを乗り越えてでも藤倉を手に入れたという覚悟頭の片隅に確かに芽生え始めていたそれを、文人のおかげで今はつきりと思い知った。『俺は教師で彼女は生徒』だなんて、ずるい大人の逃げだ。橙高祭のとき、俺はまっすぐに前を向こうと藤倉に告げたではないか。

彼女と同じ時間、同じ空を見上げていたのだと思うと、愛おしさが込み上げる。それが他の何よりも優先することを今日、やっと認めることができた。

「好きなものは、好きなんだな。……ありがとう、文人」

「何言ってるんだ、恥ずかしい。お前も、たいがいまっすぐな奴だな」

俺が「お前もな」と言うと、文人はようやく彼らしく豪快に笑った。こうしてたまに見せる少しだけ先輩らしい面に、俺は昔から助けられてきた。そして、今回も。

しばらく経って、俺の携帯が再び鳴った。予感があったが、バックライトに照らされながらメールを確認すると、差出人は『藤倉椿

（携帯）』だった。

先生、こんばんは。遅くにござ迷惑かとは思いましたが、報告だけでも思いました。

近くの公園まで出て来て、ちょうど今、流れ星が見えました！でも、先生のおっしゃったとおり願掛けはやめて自分の力で頑張ってみようと思います。

周りはみんな恋人同士の人たちばかりでいづらいです…。

もう帰りますから、心配しないでください。

それでは、おじやましました。お休みなさい。

前のメールから二時間ほどが経過しているが、ずっと空を見ていたのだろうか。

まさかとは思うが、きつとそうに違いなかった。この底冷えする寒空の下、何かを願おうか願うまいか迷いに迷って、ようやく決意できたからこそメールを打ったのだろう。藤倉はそういう性格だと俺はよく知っている。自分で自分の願いを叶えることができる芯の通った女性に成長したのだ、と。

俺は手袋を外すと、急いで藤倉に返信を打った。

こちらはまだまだ起きているから、気にしないでいい
無事に見られて良かったな

私も星を見ていて願いを掛けなくなる気持ちは分かったよ

しかし、その決断も藤倉らしくていいと思う

叶えるために頑張るなら応援しよう

君も風邪を引かないように、それと夜道はくれぐれも気を付けて帰るんだぞ

それでは、お休み

メールの送信を見届けると、俺は横で一部始終を静観していた文

人に一つ頼み事をした。

「なあ、文人。明日、暇だったらちょっと付き合ってくれないか。買い物に行きたい」

「ああ、いいよ。……なんとなく何が欲しいのか分かるような気がするけど、俺そついうの選ぶセンスないぞ」

友人は苦笑しながらも快く引き受けてくれた。

来年は、この空を彼女と一緒に見たい。少しでも、ともに過ごす時間を長くしたい。彼女が悩んだ末に何かを決断したように、俺も望みは自分の力でつかみ取るのだ。

お返しのほうが立派だったりする

振り絞ったなけなしの勇気を糧に、私は二階の渡り廊下を進んでいた。窓から外を覗き込むと、授業の間に積もった新雪の上を、寄り添って帰途につくカップルが見えた。いつもよりなんとなく男女の二人連れが多いのは気のせいだろうか。

（みんな、うまくいった人たちなのかな）

今日は、バレンタインデーだ。

立ち止まってカバンを開けると、白と水色の不織布の包みが当たり前のように入っていた。そして携帯電話の『雪』フォルダから受信メールを呼び出し、それを見てまた歩き出す。『叶えるために頑張るなら応援しよう』という一文を、朝から何度確認しただろう。

頑張れと心の中で呟いて、再び一步一步先生の元へと近づく。プレゼントを渡した後のことを考えると怖じ気づいてしまうから、今は目の前だけを見て歩こう。けれど、受け取ってもらった後、まだ勇気が残っていたら——先生に、伝えたいことがある。

「残念だが、それは貰えない」

しかし、生物準備室の廊下でその言葉を聞いた私の心は途端に凍り付いた。反射的に、身を隠すように壁に寄りかかって息をひそめる。どうやら、先生と女生徒の会話らしかった。

「わざわざここまで来てくれたのはありがたいんだが、基本的に生徒からの贈り物は断っているんだ」

「本命なんです！ 頑張って作ったんですから、受け取ってください」

「その気持ちはちゃんと受け取った。それで許してくれないか？」

「先生、酷い！ もらってくれるだけで、食べてもらえなくてもいいんです。捨てて構いませんから」

「本命だというなら、気持ちを込めたものを捨ててもいいなんて言うもんじゃない。……もらえなくて、本当に申し訳ない。すまないな」

先生の沈んだ声のあと、悲鳴のようなブーイングと共に生物準備室から数人の女子生徒が退散する足音がした。彼女たちと顔を合わせたくなって、私はまっすぐに逃げた。目の前には、あの防火扉がある。

いつだったか、先生に『冬場は凍っていて開かない』と言われた扉は、私の必死の体当たりには負けたのかゆつくりと開いた。紅葉の下に逃げ込むように外へ出ると、いつも腰掛けていた非常階段には冷たい風で吹き溜まった粉雪が積もっている。私は手で雪を払いのけて階段に座り、身体を丸めるように膝を抱えた。

プレゼントをちゃんと渡せるのかどうか心配しながらここまで歩いてきた。けれど、先生が受け取ってくれるなんて保証はなかったのだ。それなのに私は、ひとりで浮ついてプレゼントを選んだり、心を躍らせながら実験棟を歩んだり――。

渡そう、とあれだけ固く決意をしてきたはずなのに突き返されるのが怖くて逃げた。先生の目に拒絶の色を見ることが怖い。

（私、何やってるんだろう。頑張らなきゃいけないって思ってたのに。……意気地なし。馬鹿みたい。ほんと、馬鹿）

情けなさで目頭が熱くなったけれど、先生にもう泣かないと宣言したからなんとか涙はこらえていた。私は小さくなったまま身じろぎもせず、北風に枝が揺れる音を聞いていた。

それから、どのくらい経ったのかよく覚えていない。

「藤倉？」

不意に、扉が音を立てて開いた。次いで響いたやや鼻にかかったバリトンにのろのろと顔を上げると、背の高いシルエット。間違え

ようもなく、若柳先生だった。

「やっぱり君か。扉が半開きになっていたから、まさかと思って――いや、それよりもとにかく中に入りなさい」

上履きのまま雪の上を大腿で歩いてくると正面に立ち、先生は私の両手を取って立ち上がらせようとした。しかし、冷え切った私の手はほとんど感覚がなく、身体はまったく言うことを聞いてくれない。先生に引かれるがまま、崩れ落ちるように階段に膝をつく。

「すまない、大丈夫か？ …… ずいぶん冷たいが、うまく立てないか？」

「…… なさい」

「ごめんなさいと呟こうとしても、顔の筋肉が固まってしまって口すらうまく動かない。すると、先生はため息をついて私の目の前にしゃがみ込み、次の瞬間には軽々と私を抱え上げていた。

「参ったな。…… 少し我慢してくれ。喋ると舌を噛むぞ」

冷え切った私に触れた先生の身体の暖かさが、コート越しにしつかりと伝わってくる。先生は何も聞かずに私を生物準備室まで抱きかかえて運ぶと、私の分だけコーヒーを淹れ、いつものようにビーカーで渡してくれた。

その一杯を私がゆっくりと飲み干すと、先生は「暖まったか？」とやや不機嫌そうに尋ねる。もっと怒られてしまいかと覚悟していた私は、面食らいながらも小さくうなずいた。

「まったく、あんなところにいたんじゃ凍死するぞ。いつから座っていたんだ」

「…… ちよつと前からです」

「それだけで、そんなに冷えるわけがないだろう？ まあいい。身体がほぐれるまで居ていいから、暖まったら帰りなさい」

先生の表情が苦笑いへと変わり、準備室の空気は少し和らいだ。

これまで先生からもらってきた気持ちにがコーヒーの熱に溶かされて動き出し、流れ出す。頭の中で、先日聞いたばかりの『君ならできる、自分で頑張るんだ』という先生の言葉がしっかりと響いた。

今だ。きつと、今を逃したら一生後悔する。

「先生にお渡ししたいものがあります」

一気に言つと、後に引けなくなるよう、すぐにカバンを開けた。震える膝を押さえつけてから、眉をひそめる先生の顔を見つめて包みを差し出す。自家焙煎のお店で、砂糖とミルクを入れる人にいちばんお勧めなものを、と言つて買った豆だった。

「……これ、ささやかですが、バレンタインなので。コーヒー豆なんです」

彼は戸惑いながらも受け取ると、「ありがとう。いただく」と私を見つめて頬を緩ませた。

「こ、断らないんですか」

「何がだ？」

「プレゼント、断らないんですか。他の女子からののは受け取らなかつた……ですよ」

「聞いてたのか。……まさか、君はそれを気にして外にいたのか？ だとしたら、もう一時間近くも前だぞ？」

正直なことが言えなくて、私は先生から目を逸らした。

その先には、先生がいつも仕事に使っている机。書類でいっぱいの上には、飲み残しのコーヒーが入ったビーカーが放置されている。彼がこの部屋に入り浸る理由は、いつでも紅葉を見ながらコーヒーが飲める、というだけなのを私は知っている。そのコーヒーを、実験で使わなくなった古いガスバーナーで淹れていることも、見かけによらず甘党でブラックでは決して飲まないことも。

もう、私の高校生活は若柳先生抜きには語れない。

「『基本的に』な。さっきの生徒たちにもそうだったが、本気の人間には、私も本気で答えないと失礼だろう」

「本気、ですか？」

「ああ」

その真意を掴みかねて聞き返したが、なぜプレゼントを受け取ってくれたのか、私には理解ができなかった。しかし、受け入れられ

たことで弾みがついた私は、心に浮かんだもう一つのことに気を取られてそれどころではなくなっていた。

優しい先生。君ならできる、諦めずに自信を持って椿に近づきなさいと、先生は言ってくれた。いつもいつも私を勇気づけて、背中を押して、勉強以外の色々なことも教えてくれた。今日だけはもう少し、その優しさに甘えてもいいだろうか。

私は舞台の前によくやるように、大きく息を吸い込んで心の澱とともに吐き出す。胸の中が空っぽになったところで、先生の名を呼んだ。

「若柳先生」

「ん？ どうし——」

「聞いて、ください」

先生の言葉を遮ったものの、心を占領しているこの気持ちをいったい何から伝えたらいいのか、どうやって切り出したらいいのか、さっぱり見当がつかなかった。しかし、分からないなら全部言えればいい、すぐにそう考え直して、私は真っ直ぐに先生の目を見た。冷たそうに見えるメガネの奥の瞳も、私がこれから告げようとしていることを感じ取ったのか、やはり真っ直ぐに私を見つめていた。

「こんなに強くひとりの人を想える力が私にもあるなんて、知らなかったんです。先生が、それを教えてくれました。……あの紅葉の下で私の話を聞いてくれたこと、すごく幸せでした。学校の中でも外でも先生の隣にいたかったです。先生の彼女になりたかったです」

先生は、私の目をじつと捉えたまま身じろぎもせず聞き澄ましてくれている。渴ききった口の中をなんとか湿らせると、続きを話した。

「入学してから……いえ、入学前から。出会ってから、ずっと思っていました。見上げないと目が合わないほど背が高いのも、私の視線に合わせて思い切り首を曲げてくれるところも、白衣をひるがえして歩く姿も、頼りがいがある大きい手も、低い声も、先生の淹れてくれるコーヒーマの暖かさとか苦さも、優しさも、全部。ほんとに、

全部——」

好きです、の一言は飲み込んだ。口に出してしまつたら先生に迷惑がかかる。校内の噂になつたりしたらいちばん困るのは先生だと分かっているから、本当に伝えたいことはどうしても言えなかった。

先生は、両手を合わせるように組んだ。私の好きな、大きな手だ。「どうして、過去形なんだ」

「……え？」

「それはもう過去なのか？ もう、私のことはどうでもいいのか」

「ち、違います！ だって、きつと、叶わないから——」

「終わらせたいのか？ 叶わないだなんて簡単に言うな。私はずっと見てきたぞ。君は今までだって壁を何度も乗り越えてきただろう？ ……今度は、私の番だな。ちよつと、待ってくれ。今、頭を整理する」

沈黙の中、先生は表情を隠すように顔の下半分を手で覆った。そして、たつぷり五分も経ったところ、ゆっくりと口を開いた。

「藤倉は、私の大切な大切な生徒だ。……誰にも誇れる、自慢の生徒だ。生徒はいつか巣立っていくもので、俺にとってはそれが当たり前のことなんだ」

しばらく待つてよく通るバリトンが紡いだのは、予想通りの言葉だった。ああ、今日ですべてが終わるんだ——そう覚悟した矢先、先生はさつきよりやや大きな声で話を再開した。

「しかし、あと一年もすれば君がこの部屋に来ることもなくなるのだと気付いて、愕然とした。そんな生活が待っているなんて、今の私には考えられない。この部屋で一人きりで夕日を見て、一人きりでコーヒーを飲む日々がまた来るだなんて、想像できないんだ。……いろいろ考えを巡らせても、どうすべきなのか答えが出なかった。でも、藤倉は言っただろう。現実の橙高祭は、同い年だったらいふ想像よりも楽しい、と。考えたところで年の差が縮まるわけではないし、君は俺がどう足掻いたって俺の教え子であることに変わりはない。ただ、君と一緒にいられることが幸せだというのだけは分

かった」

「ど、どうしたんですか、先生」

「それは、お互い様だろう？ 俺は、俺の気持ちをそのまま話しているだけだ。本気には本気で答えると言ったじゃないか」

うるたえる私に、先生は目を細めて首を傾げる。見たことがないくらいに優しい微笑みだった。

事態は私の思わぬ方向に転がり始めていたけれど、少しだけこの状況に慣れてきた私は、先生が途中から自分のことを『俺』といっているのに気付いた。それは、先生の放課後の顔。これが先生の本気、本心だとするのなら――。

「君が現れて、どんどん成長するのを見守っているうちに、俺も変わった。君のそばにいと、固まった俺のすべてが暖かく溶けていくのを感じる。俺は、藤倉のおかげで笑えているんだ。……もう、わかるだろう？ 君は言わなかったが、私は言うからな」

先生の言葉で半ば思考が停止していた私の頭の上に、心地よい重み加わった。これは、今まで何度か撫でてもらったことがある先生の手。その度に照れながらも、私は幸せ者だと思ったものだった。次いで、ギツ、と金属がきしむ音がして、先生が椅子から立ち上がって私の前に片膝を付いた。床に白衣の裾がふわりと広がり、先生と私の間の距離がぐっと近くなる。その視線は私よりも下で、目の前に先生の顔があった。相変わらず鋭い、けれどこの上なく温かい瞳に捉えられた私は、ただ固まったまま次を待った。

大きな手はゆっくりと私の頭を撫で、そろそろと降りてくると頬で止まる。

「まだ、冷たいな」

先生はしゃがんだまま、なめらかな動きで私の耳元にすつと顔を近づけた。

「好きだ、藤倉」

思わず目を閉じた私に、小声で囁くように告げる。

「君がもっと素晴らしく咲き誇るころには、もういい年をしたおっ

さんになっっているかもしれない。けれど、それでも君を一番近くで見守っていたというのは、勝手だろうか」

「……これ、ほんとですよ？」

目の前のことが本当に起こっていることなのか、まるで現実味が感じられなかった。傾いた夕日からの光がスポットライトのように当たる。地に足が付いていない、まるで突然舞台の上に連れ出されたような頼りなさだ。

そんな中、先生はからかうように「もう一度、言うか？」と頭を撫でる。その手の重みと熱さで、私はやっと納得して答えることができた。

「私は、先生がいいんです。……私が椿になれるのは、先生の隣でしかあり得ません」

「……じゃあ、俺にちゃんと聞かせて。迷惑だなんて思わないから」いつもの先生とは全く違う口調だった。クールで凛々しく毅然とした先生ではない、柔らかくて包み込むような男の人の声。二年以上もかかってやっと見つけた、これがきつと、『若柳理雪』だ。

「私は、若柳理雪先生が、好きです。きつとこれからだって、先生のことがずっと大好きです」

「ありがとう。……君のおかげで、雪が溶けた」

先生は今更、少し恥ずかしそうに私から視線を外した。それを見た私も、耳まで真っ赤にしながら慌てて俯く。

「……我ながら、大人げないと思う。いざ藤倉を前にして相愛だと分かってしまったら我慢がきかなくてな」

先生はそう言うと、スチールの仕事机の引き出しを開けた。その奥からきれいに包装された四角い箱が取り出される。私に包みを手渡すと、椅子に座り直した先生は天井を仰ぐようにしてため息をついた。

「しかし、本当は、君の誕生日まで待とうと思っていたんだ。こんなものまで用意して、な」

「これは？」

開けるように促され、私は細心の注意を払って包みを開けていった。やがて中から顔を出したのは、滑らかな手触りの真っ白なケースだった。これは、よく見かけるような――。

「指輪……ですか」

「誕生日に渡すつもりだった。藤倉に先を越されたな」

先生らしい、細身でシンプルなリング。それを先生が、私の手を取って指に通してくれた。

「ぴったり、です。……ありがとうございます」

「さて、俺が君の指輪のサイズを知っているのはなぜだと思う？」

「……あ！ 橙高祭、ですね！」

「ああ。もらっておいで良かったよ」

橙高祭の舞台が終わってから、先生に押しつけるようにして渡した小道具だ。まさかそんな使われ方をすると夢にも思っていなかった私は、目を見開いて先生を見上げた。

お返しにはあまりに大きい気持ちと贈り物に、胸が一杯になって何も言えなくなる。落ち着くまでしばらく待って、私は先生に改めて礼を述べた。

「お返しの方が、立派すぎます。……でも、ありがとうございます、先生。大事にしますから」

「むしろどんな身につけて、悪い虫が付かないようにしてくれ。しかし、藤倉はよく分かっている」

彼は意地悪そうにニヤリと笑うと、「俺にはこれが最高の贈り物だから」と私のプレゼントを掲げた。

「俺は意地が悪いし、顔は怖いし、稼ぎも決してよくはない。取り柄と言えば背が高いことくらいだ。きつと苦労する」

先生は私の心を読んだように、「冗談めかしてそんなことを言う。思わず吹き出した私の頭を、彼はまた撫でた。

「さて。……次の土曜は模試もないし、どこか出かけるか？ ただしおおっぴらに出歩くわけにはいけないから、行き先は少し遠くなる。それでもいいなら」

「いいですよ！ どこにでも行きます！」

「年頃の女性がそんなこと気軽に言うもんじゃないぞ。……実は、ずっと前からこうして誘ってみたかったんだ。では、行き先はこのコーヒーを飲みながら考えるか」

そう照れくさそうに笑う先生の顔は、橙色の西日を浴びていつもよりもさらに柔らかく見えた。

外の寒さとは裏腹に、私たちに注ぐ暖かい日差し。もうすぐ春が来るのだと、これからの季節に私は思いを馳せた。

きつと、隣にはいつも先生がいる。これからは、お互いもっともっとたくさんの顔を見つけていくことになるだろう。若葉の萌黄色の鮮やかさも、秋の深紅の絨毯も、今度巡ってくるときには二人で見ることになるだろう。

先生と生徒ではなく、恋人同士として。

出来ればミルク多めで（前書き）

この話で「雪椿」は完結です。

次話からは続編に当たる「雪椿 返り咲き」になります。
そちらも、よろしければご覧下さい。

出来ればミルク多めで

「おめでとう」

バレンタインデーから一月あまり。三月のある朝、俺は生物準備室を訪れた藤倉に言った。

始業まで、まだ一時間ほどある。

朝一番だからなのか、準備室が薄暗いからなのか、彼女の顔はいつもとよりなんとなく白く見えた。生物準備室には西日は差すものの朝の光はほとんど入ってこないし、暗室を擁しているために遮光カーテンが引かれている。その不気味なまでの陰気さが実験棟周辺に人が寄りつかない理由なのだろう。根気よくここまで通ってくるのは、藤倉くらいものだ。

それでも、この頃は遮光カーテンの隙間から漏れる日差しに柔らかさが増している。季節が動くこうとしているのだろう。

「年の差が八つに戻りました」

「一つ、縮まったな。……授業が始まる前に、指輪は外しておくように」

もう『ただの生徒』ではないことを確認するかのように指さすと、彼女はこの前から持ち込んでいる小さなカップを両手で持ったまま照れ笑いをした。その指も白い。

俺の誕生日は十二月。俺にとっては八つも九つも大差ないのだが、藤倉にとつては非常に重要な問題らしい。彼女は俺の顔を見るたびに早く誕生日が来ないかなあ、と言っていたものだ。

「薦なんかはパーティーでも開きそうなもんだが」

「よくお分かりですね。実は、今日は帰りにファミレス——あ、校則違反ですか」

「いや、今日は見逃して薦に譲ろう。俺は週末に君を借りるからなるほど、それで朝からここまで来たというわけだ」

「ありがとうございます。……帰りだとゴタゴタしちゃうと思った

ので、朝一番でお祝いしてもらおうかな、と」

「悪いが、実はプレゼントなんかはまだ準備していなかったんだ。

……ないわけではないが、後にしておこう。すまないな」

「いえ、おめでとうって言ってもらえたからいいんです！ 図々しくて、ごめんなさい」

藤倉はあまり悪いとは思っていない様子で朗らかに笑った。つられて頬を緩め、言葉を濁したことを気付かれていないのにこっそり胸をなで下ろす。

「去年は、誕生日の前にここで名前の話をしましたよね。そういえば、先生がマグカップを割っちゃって」

「ああ、俺が最後に君を泣かせたときだな」

当時は何に対してカップを落とすほどショックを受けたのか理解できず、藤倉の涙のせいだと気付いたのは後からだ。あれ以来、鈍く無神経だった自分自身を戒めるために敢えてビールでコーヒを飲んでいる。思えば、あれから一年も経った。そろそろ、新しいものを買ってもいいかもしれない。

俺の物思いを吹き飛ばそうとしたのか、藤倉は「でも最近、簡単には泣きませんよ」と明るく言い、得意げに胸を張った。さらに、ああ、と何か思いついたように口を大きく開ける。

「ん？ どうかしたのか」

「カップのお話が出たのではありませんが、言っちゃいます。

……私、先生に秘密にしていたことがあるんです。一つ近づいたついで——と言ってはなんですが、一年に一度のお願いということで、聞いてもらえますか？」

齧歯目の小動物は神妙な面持ちで姿勢を正すと、俺を見て首を傾げる。この丸い目には勝てたことがない。俺が促すのを確認し、藤倉は落ち着きなく親指でマグカップをさすりながら口を開いた。

「できれば、ミルクと砂糖を……先生と同じくらい多めにしてください」

申し訳なさそうにカップを差し出した藤倉に、俺は虚をつかれて

しばし呆けた。

カップの中には、まだほとんど減っていないブラックのコーヒーがなみなみと入ったままだ。彼女には入学式に再び出会ったその日からブラックを出し続けていたが、よく思い返してみると妙に飲み終わるのが遅かった。一月前、あれだけ切羽詰まった様子で俺に思いを訴えた勇気をもつてすれば、苦いコーヒーが飲めないことを伝えるくらい造作もないだろうに。これだから藤倉に対する興味は尽きないのだ。

「実は、苦いのはあんまり得意じゃないんです」

黙っている俺が怒ったとでも思ったのか、藤倉はまるで世界の終わりが来たかのようなどんよりとした顔でそう言った。とりあえず出されるままにマグカップを受け取ると、「今までずっと我慢していたのか？」と尋ねてみる。

「我慢というほど嫌いではなかったので、慣れるかなと思ってブラツクで飲んでいたんですが――」

「で、二年間飲み続けたがダメだったわけだな。君も甘党だったとは、仲間が増えて嬉しい限りだ」

脱力感とおかしさで眉を寄せつつ、藤倉のカップにブラウンシュガーを二杯とポーシヨンのクリームを入れるときれいな琥珀色になった。甘い香りがほんのりと漂う。俺と同じ分量というところくらいだが、彼女のお気には召すだろうか。

「あ、これくらいの色なら大丈夫です」

一転、何の屈託もなく嬉しそうにコーヒーを飲み出した藤倉に俺はついに吹きだした。彼女からのぬるい批難の眼差しを浴びながら、俺は必死に笑いを堪えて尋ねる。

「どうして、好きだと告白するよりもそれが後になるんだ？」

「また笑いすぎです、先生。……コーヒーより何より優先させることがあったのでそれどころじゃなかったんですよ。今だからこ言えるんです」

何よりも先んじたこと――つまり、バレンタイン以降胸のつかえ

が取れたので言う気になったということらしい。近頃は、笑いすぎと言われることにもようやく慣れてきた。もつとも、藤倉以外の人にこの顔を見せたことはまだないはずだが。

「あの、先生も何かないですか？ 私に苦情とか」

「苦情？ 苦情はとくにないな」

「お願いとか、希望とか、とにかく何かないですか。このままじゃ不公平です」

顔を真っ赤にして必死に話を逸らそうとする藤倉を眺めているうちに、いつもの暖かさが胸に溢れてくる。こういうふとした瞬間にもしずつ雪解けは進んでいるのだ。柔らかくなった心からある考えが生まれ出て、俺は精一杯優しく微笑んで仕掛けた。

「お願いか。……ではお言葉に甘えて、予定は繰り上げた」

「予定？ 繰り上げ？」

俺がゆつくりとメガネを外すと、彼女は「レンズ越しじゃないほうが優しい感じがしますね」と無邪気に言った。ということは、メガネ装備時の外見はあまりフレンドリーには見えないということだろう。自覚はしているが、相手が彼女だからなのか、正直に面と向かって言われたからなのか腹も立たない。

「君は最近、遠慮がなくなってきたな。……メガネは身体の一部なんだ。無いと生活できない」

『優しくない目』を細めると、ぼやけていた藤倉の顔が少しだけはつきり見えてくる。近眼はこういうときに不便なのだ。やっと俺の目の焦点が合ったところで、彼女は不思議そうに言う。

「あれ。じゃあ、今はどうして外したんです？」

「どうしてだと思う？」

どうやら、藤倉には分かってもらえなかったらしい。言いながら彼女の顎に手を当てると途端にぱつと顔を紅潮させ、あさつての方向を見たまま「あの、もしかして——」と弱々しく呟く。その視線の先に顔を寄せ、俺は囁いた。

「もしかして、だ。……お願い」

「それは——その言い方も、ずるいです」

「不良教師を甘く見たな。女性がそんなことを気軽に言うなど言っ
たらう？ 尋ねた時点で、君の負けだ」

「ひどい先生ですね。……でも、負けでいいです」

やがて、はにかんだ真つ赤な顔で笑い、藤倉はカップを机の上に
置くと目を閉じた。にわかには緊張し始めたのか、かたかたと震える
歯と、急速に上がる体温が触れたところから分かる。そんな彼女を
まるで包んで隠すように身体を引き寄せ、俺はそつと口づけた。

「サプライズなプレゼント、でした」

余韻が残るまま、予鈴まであと十五分。先に言葉を発したのは藤
倉の方だった。そつと手で自分の唇に触れ、嬉しいのか照れている
のか、いずれにしても穏やかな声でぽつりと呟く。

「……でもいいんですか、学校のなかで」

「不良だからな。……しかし、改めて言われると弱る。実は、そん
なに余裕はないんだ」

自分の顔の熱さを意識し、さすがに恥ずかしいので藤倉を制す。
なんとも不甲斐ない不良教師だった。何か気の利いた話を振れば
よいのだろうが、俺にそんなスキルはない。すると彼女は両手を合
わせてパシンと鳴らし、いたずらっぽい瞳で俺を見つめた。

「身長差は座つていれば気にならないです。疑問がひとつ、解決し
ました」

「なんだ、それは」

「詳しくは、来年の誕生日まで秘密です。だから、そのときも一緒
にいてくださいね？」

藤倉は祈るように、合わせた手をしっかりと組んで尋ねた。

彼女の次の誕生日は卒業式の後だから、ここではない場所で祝う
ことになる。藤倉が暗に言っているのはそういうこと——つまり、

来年自分が生徒ではなくなってもこうして二人でいたい、ということ。かつて、学校の中でも外でも先生の隣にいたいと彼女は言った。持ちかけられた可愛らしい企みを、俺は自分ができる最高の笑顔で受ける。

「来年と言わず、いつまでもな」

言い終えて藤倉を見ると、俺と同じ顔をしていた。例えるなら花が咲いたような、晴れやかで温かい笑顔。

先生と生徒の肩書きがやがて家族に変わっても、いつまでも一緒に歩んで行けたらいい。雪はいつか溶け、椿はやがて散るけれど、どんなに季節が変わってもいつまでも二人で。

俺は思いを込めて、もう一度言う。

「いつまでも一緒だと誓おう」

【「雪椿」おわり　　「雪椿 返り咲き」につづく】

【雪椿 返り咲き】影絵遊び（前書き）

「雪椿」続編、「雪椿 返り咲き」の第一話です。
よろしければ、ご覧下さい。

「雪椿 返り咲き」影絵遊び

早春と呼ばれる時期はとうに過ぎたと思っていたのに、防火扉の外は『春は名のみ』という歌がびつたり冷たい風が吹いていた。見上げれば、紅葉の木の向こうに透ける空は綺麗な夕焼けで、真ん中に一筋、風で乱された飛行機雲が残っている。

俺の手には、夕焼けに負けず劣らず鮮やかなオレンジ色のマグカップ。最後に残った一口はもう冷えて生温くなってしまっていたが、飲み干してから改めてカップを見直す。『先生にはオレンジが似合う』と言い張られて押し切られたような格好で買ったものだが、使い勝手もデザインも今ではすっかり気に入っていた。

水色から茜色へと変わりゆく空のグラデーションは、独り占めするにはもったいない。

そう思ったところで、金属がきしむ音が耳に入った。聞き慣れたこの音だが、新年度になってから鳴らされるのは初めてだ。

「先生、こんにちは。夕焼け鑑賞中ですか？ ……わあ、影も背が高いですね」

すっかり空になったカップを手振り返った俺の足下から影が伸びて、訪問者のところまで届く。重い扉を両手で押し開け、眩しうに目を細めるのは、藤倉椿——カップを見立てた人物であり、私の教え子であり、そして俺の彼女——に間違いなかった。

「どうした？ こっちに来なさい」

俺が、顔を半分のぞかせたまま周りの様子をうかがう藤倉に声を掛けると、彼女は安心したのか開いた扉の隙間からすり抜けるように外へ出てきた。他人に見つからないようにとの配慮だろうが、かえってそれが怪しさを醸し出している。まあ、どっちにしても今は誰もいないのだが。

「新しい参考書を買ったんですが、答えを見てもさっぱり分からなくて質問にきました」

今日は、生物の問題集を持参しているらしい——と言ってしまつと普段はしっかりした理由がないかのようだが、俺の所に来るときの彼女は何かしら相談事を持ってきている。その頻度も前とほとんど変わりはない。会話の中身が多少『恋人』のそれに近くなったことを除けば、俺が職権を濫用しているわけでも、藤倉が甘えすぎているというわけでもないのだった。

そろそろ志望大学を絞り込み始める時期だ。今年一年は、これまでもここに来る機会が増えるかもしれない。それは、校外ではなかなか一緒の時間が取れない二人にとって嬉しくもある。

藤倉は俺のもとまでやって来ると、手にしていた本を付箋を頼りに開いてみせた。どうやら本当に悩み抜いたのだらう、俺を見上げ彼女の眉は『もう降参だ』と訴えている。

「問五がわからないんです」

「貸してみなさい」

俺は、空のマグカップを彼女に持たせると、まだ折りぐせのついていない真新しい参考書を受け取る。赤と青のペンで入れられた丸っこい小さな字の注釈は、いつの間にか覚えてしまった彼女の筆跡だった。

おや、と思わず口に出して、一旦本を閉じて表紙に目を落とすと、俺はメガネをずり上げながら言う。

「ああ、これなら私も持っている」

「先生も、参考書買うんですか？」

藤倉は相変わらずの小動物のような表情で首を傾げた。

「評判のいい参考書や、入試の定番と言われるものは大抵持っているんだ。……この他にも何冊かはめくったんだが、ざっと見たところこれが私の板書に最も近いまとめ方で、練習問題も適度な難易度だ。藤倉は見る目がある」

打ち合わせもしなかったのに、まるで示し合わせたように気が合ったのが面白くて、俺は少したけ満足げに言った。何冊かの中でこれがいちばん俺の授業内容に似ていたのだが、きつと藤倉も同じこ

を思い、この本を手にとったのだろう。

一方、本気だか冗談だか判断しにくい言葉に面食らったのか、藤倉は「今、私、誉められたんですか？」と、やはり目をくるくるさせている。こんなことを言う彼女に怒るかもしれないが、まん丸い目でパチパチと瞬きをしながら俺を見上げる仕草は、尾を振っている犬を連想させた。しかも、きつと垂れ耳の子犬だ。

「誉めたつもりだぞ」

「でしたら、これにして良かったです。読み比べ、結構悩んだんですけど、その甲斐がありました」

「ああ。あとはちゃんと理解することだ。……さて、と。君は相変わらずこのあたりの問題が苦手と見える」

心の中で『よしよし』と毛並みを撫でつつ、一旦仕切り直すと再び付箋のページを開く。隣でそれを覗き込んでいる子犬、もとい藤倉の姿を確認し、俺は問題を指で辿りながら説明を始めた。

彼女が詰まった問題の要点を一通り話しているさなか、藤倉がそっと腕を宙に伸ばしたのが見えた。彼女の胸の高さあたりで、開いた手のひらがゆらゆらと動く。俺の話を聞いているのかいないのか——おそらくは聞いていないのだろう——すでに視線は参考書の上にはなかった。

はじめはさっぱり理解不能だったその行動。しかし、藤倉の目を辿ると何を思いついたのかはすぐに分かった。

オレンジに染まった地面には、ぼやけた輪郭ながらも二人分の長い影が落ちている。その彼女の手の影と、参考書を支える俺の手の影とが、まるで本当に触れ合っているかのように重なった。何食わぬ顔で解説を続けながら藤倉の表情を盗み見ると、ささやかな笑みが浮かんでいる。

やがて藤倉は、半端に空中へと差し出した手を何ごともなかったかのようにこっさり元に戻した。

「次に、イモリの目の水晶体は表皮から誘導されて」

俺も、平静を装いながら模範解答例を示し続けるが、頭の中はそれどころではない。

彼女の悪戯を『かわいらしい影絵遊び』とは言い切れない自分に気付いて、ぎくりとした。考えてみれば、想いが通じてから一月あまり、彼女とともに手を繋いだことなどなかった。もしかして、ずっと、言い出したくても言えなかったのだろうか。俺はこの幸福に浸りきってしまったって、藤倉をしっかり見ていなかったのではないのか。俺自身、その辺りを汲み取る能力が他人よりも低いのは承知しているから、もっと頑張らなくてはいけなかったのかもしれないと自らを振り返る。

俺は、再び足下を眺めた。さっき、藤倉は俺を『影も背が高い』と言ったが、一方の彼女は影になっても可愛らしいサイズだ。

似合わないのを承知でセンチメンタルに過ぎる表現をするならば、シルエットになってしまえばただの二人。そこには年の差も立場の違いもなく、藤倉にとっては気持ち的自由に、素直に行動に移すことができる場なのだ。

「……角膜が誘導されないから、完全な目にはならない。以上で、説明終了だ」

恐らく彼女は右から左へ聞き流しているだろう説明を、俺も上空でただ垂れ流し終える。

「良く、分かりました。ありがとうございます」

藤倉はいつの間にか後ろに組んでいた両手を慌てて差し出すと、参考書を受け取った。神妙な面持ちで頭を下げる彼女に、俺は笑いを噛み殺しながら厳しい顔を作ると、すかさず返す。

「集中力に欠けるな。途中から聞いていなかっただろう」

「……そんなこと、は」

そう深く突っ込んで尋ねたつもりはなかったが、藤倉は耳まで赤くして俺のネクタイの結び目あたりに視線を漂わせる。普段なら、首が折れるのではないかとこちらが心配するほどに見上げるはずの

彼女が、俺と目を合わせようとはしない。その様子は明らかに不自然で、さきほどの影絵遊びを見ていなくても、きつと何かがおかしいと気付いただろう。

そう。

よく見れば解ることなのだ。

要は、幸せに浮かれていた俺の観察力不足で、彼女の望みに気がついてやらなかったという、ただそれだけの話。ならば、今からだって俺からもつとしっかり触れていけばいい。

叱られたと思ったのか徐々に後ずさりし出した藤倉に、俺は素知らぬふりで怪訝そうな顔をする。「どうした」と聞き返した。

「べ、別に、何でもない……です」

「それなら、そんなに逃げる必要はないだろう」

「先生が迫って来るから、下がってるんです」

動揺しきった彼女は、俺のネクタイに目線を固定したまま、さらにじりじりと後ろへ退いて行く。そのまま行くと、紅葉の木にぶつかるコース取りだ。

下がり続ける藤倉とは逆に、俺は離れた分を取り戻そうと一歩、また一歩前へと出ていく。当然、リーチが長い俺の方が距離を稼ぎ、ふと見ると二つの影法師は今やすっかり重なっていた。からかってみたくなり、地面を指差してみる。

「影、見てみなさい」

一瞬だけ影に目をやったかと思うと、すべてを察した彼女は抱えた参考書をで顔を隠すようにしながら悲鳴に近い声を上げた。

「も、もしかして見てたんですか、先生！」

「しつかりと、な」

「やだ……」

藤倉はもう逃げ場はないと観念したのか、ついに紅葉の幹に背中を預け、今にも消え入りそうなボリウムで独りごちた。もはや涙目になりかけている彼女の顔は、夕日に照らされてますます紅い。そんな表情を見られるのも自分だけだという妙な満足はあったもの

の、今日はちょっといじめすぎた。これではまるで小学生だと、さすがに罪悪感に襲われて俺は目を細める。

「すまない。……度が過ぎたな」

藤倉は俺の追求が緩むと、深呼吸をしたり、火照った顔に手を当てたりとクールダウンを始めていたが、たっぷり数分をかけて何とか復活を果たし、今度はちゃんと俺を見上げた。潤みがまだ退ききっていない瞳で、彼女は恐る恐る俺に尋ねる。

「恥ずかしいです。……先生、呆れてますか？」

「いや。呆れる必要などないだろう。……君が、心からそうしたかったのなら」

よかった、と吐息混じりの声がした。

「君が気に病むことなど何もない。考えてやれなかったのは、こちらだからな。……今度からは、とにかく口に出しなさい。年上だから、教師だからと遠慮をしないこと。節度の範囲内で、出来る限り叶えるから」

「は、はい」

微妙に畏まってしまったように見える藤倉を見て、反省する。言い方が硬い。そして、無駄に偉そうだ。まずは俺のほうから、変わっていかなくては。

できるだけ不自然にならないように気を付けながら、俺は彼女の目の前に手を差し出した。

「影が重なったって、温かくないだろう？」

「え？」

「俺と触れ合うことが君の幸せだというのなら、素直に言ってくれ。いくらでも応えるから。……さあ、校舎までの間だけだが、手を」「はい！」

藤倉はぱつと綻んで、まるで子供のように無防備に手を宙に差し上げた。その手をしっかりと受け止めると、向こうからもきゅっと握り返される感触がある。ただそれだけで、彼女がどんなにこの瞬間を待ち望んでいたのが、俺には分かってしまった。

「先生の手、大きい」

感動したように、彼女はぽつりと漏らした。俺も彼女に倣って、何も言わずに指に力を込める。きつと、藤倉にはそれで充分伝わっただろう。

初めて意識してちゃんと掴んだ藤倉の手は、こちらまでとろけてしまいそうな柔らかさで存在を大いに主張していた。繋いだところから、彼女の胸の内が俺に染み渡ってくるような不思議な感覚。手を繋ぐという行為がこんなにも満ち足りた気持ちを持って運んでくるなんて、俺は今まで知らなかった。触れてみないと知り得ないことが、この世にはまだまだあるのだ。

「温かいからでしょうか。何だか、安心しますね」

「これは、癖になるかもな」

「駄目ですよ、見つかったら——」

「言わなかったか。私は、不良教師なんだ」

藤倉は困り切った表情で、それでもまた俺の手を握り返してきた。冷たい風が逆に彼女の温かさを強調してくれて、何とも言えずくすぐったい気分になる。その心持ちには、ここが校内だという事実——スリルのようなものも少なからず影響しているように思う。まさに、不良教師の面目躍如といったところだ。

踏み出すごとに、一、二、三と、藤倉が小さな声で歩数をカウントしているのが聞こえる。それに合わせてできるだけゆっくり歩いてみたが、残念ながらそう広くはないこの場所。たった十数歩ほどで校舎の入り口、いつもの防火扉に到着だ。

「もう終点ですね。……わがまま聞いてくださって、ありがとうございました」

残念そうに言いながらも、俺を見る藤倉の顔はにっこりと笑顔だった。その晴れやかな表情に、俺の心が膨らむ。今にも失われようとしている温もりをもっと味わいたくて、やや名残惜しそうに手をほどこうとする藤倉に、俺は囁いた。

「さっきの問題、もう一度解説し直そう。準備室に来なさい」

——今日だけ、職権濫用は許してもらおう。

【雪椿 返り咲き】黒猫のワルツ

橙南高校の体育祭は、学年やクラスに関係なく学校全体を四つの色に組分けするのが特徴だ。一年生のときにくじ引きで自分の色が決まると、在学中は三年間ずっとその隊で頑張ることになる。縦割りで集められる赤北^{せきほく}、白東^{はくとう}、黄南^{おうなん}、そして紫西^{しせい}という四隊が、優勝旗を目指して天下分け目の決戦を繰り広げるのだ。

運動があまり得意ではない私にとってはなかなか辛い行事なのだけれど、それも三回目、今年で最後と思えば耐えられる——というわけでもなかった。やっぱり周りの足を引っ張ってしまふのは辛いし、一生懸命走っても順位が付けられるとへこんでしまう。

てるてる坊主を逆さに下げたりしてささやかに雨乞いをしたものの、当日は恨めしいほどの快晴だった。

教室では、体操着に着替え、四隊それぞれの色のハチマキを締めたクラスメイトたちが歓談していた。楽しそうなかで一人だけ暗い顔をするのも憚られ、私も紫色のハチマキを巻く。あいまいな笑顔を浮かべてみんなと話を合わせていると、若柳先生がホームルームのために教室に入ってきた。

「おはよう。……絶好の体育祭日和になった。みんなの日頃の行いが良いと、証明されたな」

そう言った先生は、鮮やかな紫Tシャツに、黒に近い紫のジャージを履き、その上から白衣を羽織るといふ服装だった。シャツの左胸は、白く『西』と染め抜かれている。

先生たちも四つの隊のどれかに割り当てられて、教科対抗リレーや騎馬戦に駆り出されるのだけれど、若柳先生は間違いなく紫——私と同じ隊だろう。白衣にスーツがユニフォームの先生が、上下紫だなんて体育祭以外ではきつと見られない。そう思うと、貴重な一日になりそうだった。

周りのみんなも驚き、むしろ面白いと思っただけ、男子からさっさと質問が飛ぶ。

「せんせ、そのかつこって紫西隊？」

「それ以外の何に見える」

苦虫を噛みつぶしたような表情の先生に、クラスはどつと湧いた。「紫西隊の隊長にこれを渡されたので、逆らえずに着てきた。似合わないで悪いな」

すかさず、女子からは「似合うよー！」という黄色い声が飛ぶ。

さすがの先生も、困り切った様子で微笑を浮かべていて何だかほほえましい。ざわつきが収まるのを待って、先生は出席を取った後、お決まりの諸注意でホームルームを締めた。

「怪我をしないように気を付けること。それから、サボって帰らないこと。注意は以上だ。……最後の体育祭、存分に楽しみなさい」

みんながグラウンドに移動し、最後まで教室に残っていた私に、先生は「一緒だな」と呟いて目を細めた。それだけで、憂鬱さもかなり飛んでいったのだから、私も現金なものだ。

しかし、面と向かって紫色の先生を見るといついつい笑いが込み上げてきてしまう。

「……笑わないでくれ」

口元を押さえた私に、先生は拗ねたようにそう言った。

『教科対抗リレーに参加する選手は、本部前に集合してください』

午後の部最初のプログラム、応援合戦が終了したところ。

同じく紫西隊の薫ちゃんと待ち時間を過ごしていた私は、アナウンスに顔を上げた。彼女と一緒に過ごすことで、毎年、私の気分も大分晴れている。一年の時、別々の隊になった私たちに、友だちが紫のくじを譲ってくれたのだった。

それはさておき——薫ちゃんは、なぜかニヤニヤしながら私に尋

ねた。

「リレー、若も出るの？」

「聞いてないけど、選択権は無いんじゃないかな」

「理科は若が一番年下だもんなあ。そういやさっきその辺でちらっと見かけたけど、全身紫じゃなかった？」

それを聞き、別れ際の先生の表情を思い出した私は吹き出しそうになるのを堪える。薦ちゃんが、きよろきよろと紫西隊の陣地を見回した。先生を捜しているらしいけれど、さっきのアナウンスからすればすでにリレーの準備で移動済みかもしれない。

背伸びをしてリレーの待機場所を眺めると、紫色をまとった、わりにがっしりとした体躯が目に入った。そのTシャツの背には、白い『西』の文字。間違いなく先生だろう。指差して、あれじゃないかな、と報告すると、彼女は堪えることなく大笑いした。

「わ、ほんとに紫ジャージ」

むらジャー、と彼女は繰り返し、「椿的に、あれはあり？ なし？」と続けた。見慣れていないせいもあるけれど、紫ジャージが気になってまともに会話もできないのでは無しと言わざるを得なかった。もちろん失礼は百も承知だ。でも、実際耐えられないのだから仕方がない。

「うーん。……なし、かな」

「ダメかあ。でも、私もあれはなしだと思う」

薦ちゃんはまだ笑いを引きずったまま、お腹を抱えている。遠くに見える先生は不敬な生徒二人のことなどつゆ知らず、ストレッチを始めていた。

『それでは、教科対抗リレーの選手はそれぞれの待機場所に移動してください』

再びのアナウンスに促され、本部前から先生たちがグラウンドに散って行く。若柳先生の背中を目で追っていくと、彼は第四走者、すなわち最終走者のスタート位置に留まった。

理科は、物理・化学・生物・地学の四科目をひとまとめにしたチ

ームでの出場。年配の先生が多いから若いというだけで選手候補だろうとは予想していたが、アンカーにでもさせられたらプレッシャーあるだろうな、と勝手に若柳先生に同情していた私の悪い予感、当たってしまったらしい。それは、薦ちゃんも同じのようだった。「やっぱりアンカーなんだ、かわいそ。……どれどれ、お手並み拝見」

彼女は「行くよ！」と私に声を掛け、手を引っ張る。

「え、ちよつと、何？」

「ゴール前に移動。そしたら若が見えるでしょ」

薦ちゃんにされるがまま、私はトラックの真ん前、紫西隊陣地の最前列へと連れ出されようとしていたのだった。すでに、第一走者の先生たちがバトンを手にスタートの合図を待っているところ。

私たちが見通しのいい観戦場所を見つけたちょうどそのとき、空砲が甲高く鳴り響いてレースが始まった。後ろの生徒たちの邪魔にならないように、慌ててしゃがむ。

一人が走る距離は、二百メートル。展開は早い。銃声に驚いている間に、バトンは第二走者へと渡っていく。文句なくトップなのは体育科で、毎年首位はほぼ確定だから面白味に欠ける。ギャラリィが楽しむのは、二位以下の争いなのだ。先生の属する理科は、第三走者まで六チーム中三位でバトンを繋いできた。次は、いよいよ――。

第三走者にバトンが渡ったところで、私は若柳先生だけを見ることに決めた。

「走る前から見とれてたら大変だよ？」

「……そんなことない」

「むらジャーだもんなあ」

薦ちゃんと他愛ないやり取りをしながらも、私は彼から目が離せずにはいた。彼女にはああ言っただけで、本当は見とれているなんてものじゃない。先生の姿以外に、視線の定まるところは無い。目が吸い寄せられる。呼吸すら浅くなるくらいの集中力で、私は凝視と

言えるほどに見つめていた。

足首を回したり、肩を動かしたりしていた先生も、いよいよレゾーンにスタンバイする。いつもの白衣姿ではきつと見る機会がない精悍な表情。右手を後ろへと伸ばし、半身になって斜め後ろを睨み付ける姿はしなやかで隙がない。

やがて、最後のバトンの引き継ぎが行われる。前傾姿勢で助走をしながら、若柳先生は叩き付けられるように渡されたバトンを握りしめ、一気に加速する。そのままカーブに差しかけると、不意に、長い尾がバランスを取るように揺れたのが見えたような気がした。

——とてつもなく格好いい。

飛び抜けて速いというわけではなくて、むしろ手を抜いているかのようなゆったりした走り。身体の軸を斜めに保ち、幅の広いストライドで筋肉が躍動する——それは例えるなら、黒猫が軽快に駆けているような優雅さだった。朝、笑いが止まらなかった濃紫の服も、今となつては先生を引き立てるものでしかなかった。

いよいよ、ゴールに向けて、先生が最後のストレートに入ってきた。徐々に、すぐ前を走る選手との距離が縮まっている。その差はほんの数メートル。残りの百メートルで、果たして順位を上げられるだろうか。

「先生！ 頑張れ！ …… 抜いちゃえ！」

私は立ち上がり、目の前のゴールへと走り来る先生に叫ぶように声援を送る。それが聞こえたのかどうかは分からないけれど、スピードがぐつと速まった。回転数が増えるにつれ、猫っぽい余裕や端正さはかき消え、荒い走りで先生の足がグラウンドを蹴る。普段の鋭さとはまた違う獣のような光のある目に、私はぞくりとした。

「若、早いじゃん！ 足長いからかな！」

隣で、蔦ちゃんが大声を出す。我に返ってみれば、若柳先生はちょうど前の走者と横一線に並んだところだった。しかし、追い抜いたか抜いていないのか本当に微妙なまま、二人は肩がぶつかり合うような状態でもつれるようにゴールへとなだれ込む。

『ただ今のレース、僅差ですが理科チームが二位！　そして惜しくも三位、数学科！』

間を置いてアナウンスされた審判員の判定は、若柳先生の勝ち、だった。

体育祭が無事終わり、制服に着替えた私が教室に戻ると先生がいた。蔦ちゃん曰く『むらジャー』姿のままだ。今は、その紫も『西』の文字も、おかしいとは微塵も思わない。ただ、ドキリとはする。リレーの準備中に、先生は着やせするタイプなのだと気付いたこともその動揺に拍車をかけている。

先生と目が合う。極力顔色を変えないように気をつけながら、私は話しかけた。

「どうしたんですか。何か、お仕事中ですか？」

「消灯と施錠の確認だ。今日はたぶん誰もやらないだろうと思ったからな。案の定、だったが」

無愛想に言くと、先生は付けていた消灯チェック表を教卓の中へと戻した。本来なら生徒の仕事なのだけれど、お祭りの日だということを見越してフォローに来たのだろう。先生は面倒くさがりにも見えるが、こういうところは非常にまめなのだ。

「リレー、お疲れさまでした」

「ほんとうに疲れた。まあ、あの順位なら誇っていいだろう」

「先生、本気で走ってましたよね」

「どこかの誰かさんが、抜けと叫んでいたからな」

「え、聞こえてたんですか？」

わりと耳に入るものなんだ、と下を向いた先生。その表情は少しだけ得意げだ。

「素敵でした、猫みたいで。……例え紫色でも」

途中から猛獣みたいで、それもかつこよくて、などとは恥ずかし

くて言えない。『むらジャー』が、照れ隠しで口をついて出た。

先生は、あんな男っぽい——いつもだって充分男らしいから、いくぶん語弊があるけれど——男臭い顔もする。今年の体育祭はそれが分かっただけで、私が徒競走でビリになったことを差し引いてもなお、お釣りがくるほど得をした気分だった。思い出すと無言になつてしまいそうで、焦りつつ言葉を続けようとすると、先生の逆襲を受けた。

「そういえば、君も頑張っていたな」

「……ビリでした」

痛いところを突かれて、私は頬を膨らましながらそれに答える。確かに、全力で走った。全力でビリだったのだから恥じるところはないはずだ。でも、足が遅いからって先生に嫌われるとは思わなかったけれど、やっぱり格好のいいものではない。あの様子はできれば見られたくはなかった。

落ち込む私の肩に、大きな手が乗った。はつとして見上げると、平素の涼しげな眼差しが待っている。

「でも、諦めてはいなかっただろう。それは分かった」

ぼんぽんぽん、と三度肩を叩き、先生は言った。

「お疲れさま。……体育祭、三年分だ」

その言葉をもらえただけで、何か報われたような気分になった。ありがとうございます、と言いかけた私に向かって、先生は更に付け加えた。

「それから、私が猫だというのなら藤倉は犬だな。今、尻尾を振っていたのが見えたぞ」

そう言うのと、先生は口元にほんのわずかに笑みを浮かべて、教室を立ち去った。きっと私にしか読み取れない、先生の感情の発露だ。リレーのときの先生はみんなが見たかもしれない。あのワールドさが素敵だと憧れた人も私だけではないかもしれない。でも、さっきの表情はきつと私だけのもの。私が独り占めした笑顔だ。

後に残された私はぼうつとしながら、そんなことを考えていた。

【雪椿 返り咲き】厄介な鳥

夕日が差し込むいつもの場所。背後の防火扉がガチャガチャ鳴っているのに気づき、俺は振り返った。が、音の主は一向に現れず、扉からは相変わらず金属音が聞こえてくる。どうも、うまく開けられずに苦労しているようだ。

こんなところに来る人物なんて、清掃当番か物好きな女生徒くらいのものだ。多少不審に思いながらも、きつと後者だろうと予想した俺は防火扉をこちら側から開け放つと同時に、声をかけてみる。

「誰か、いるのか？」

すると、誰かが弾丸のように外へと飛び出してきた。

「きゃっ！」

軽くはない振動が俺を襲う。しかし、体当たりされたといっても、小柄な生徒にぶつかられたくらいは何ともない。難なく受け止め、いったん抱きかかえた彼女を扉の前に立たせてやる。顔が真っ赤なのは夕焼けのせいだけではないだろう。

「やはり藤倉か。元気だな」

藤倉は大慌てで俺から離れると深々と頭を下げた。

「ごめんなさい！ あ、ちよつと片手が塞がってて、体で開けようと思って。こんなに軽く開くとは考えてなくて。……すみませんでした」

「大変そうだったから気を利かせたつもりだったんだが、まさか飛んでくるとは。逆に余計なことをしたようで、すまない」

聞けば、自由な左手だけでは重い扉をどうにもできずに、結局は肩を使って押し開けようとした。だが、思い切り体重をかけた途端に俺が扉を開けてしまったため、勢い良く激突した——ということらしい。

抱き止めた藤倉の柔らかさがまだ腕に残る。俺はそれを振り払うように問いかけた。

「手が塞がってというところ、ケガでもしたのか？」

「いえ、これなんです」

藤倉はそう言うと、右手に持っていた小さな箱を俺に差し出した。教室に常備してあるチョークの箱である。受け取ってみると中身は空ではなく、軽いながらも手応えがあった。どうもチョークではないものが入れられているようだ。

「傾けないように持って、そーっと開けてください」

彼女の指示通り細心の注意を払いつつ謎の小箱の蓋を開けると、中には破いたティッシュペーパーが敷き詰められており、その中央には毛玉のようなものが鎮座している。俺が毛玉を指でつついてみると、チュツと弱々しく鳴いた。その声と見覚えのある茶色い羽の色は、日本一身近な野鳥のもの。

「スズメ、だな」

「はい。ケガしてるんです。こことか、あと、ここも」

促されてよく観察してみる。

毛玉もといスズメの背には、確かに乾いた血の跡がある。引っかけ傷の跡は、十中八九、猫の爪によるものだろう。獲物にされそうだったところをなんとか逃げのびたという様子だ。

普段見かけるのよりも少し薄く、くすんだ色合いからすると、巣立ったばかりの雛かもしれない。愛らしいはずの小鳥は、元気がない上に、汚れたり羽が抜けたりしてどうにもみすばらしい姿になってしまっていた。俺でさえ眉をひそめるほどの惨状なのに、藤倉はよく頑張っただけでここまで連れてきたものだ。

「帰ろうと思ったら自転車置き場の隅っこにうずくまっていたんです。目が合ったような気がして、思わず拾ってしまいました。教室にチョークの箱があったのを思い出して、中身を全部開けて……先生なら、お世話の仕方とか分かるかな、と思ひまして」

とはいえ、箱を覗き込む彼女も沈痛な面持ち。まるで小鳥の痛みを全て肩代わりしているかのような悲壮な顔で、ここまでのいきさを説明してくれた。教室に行けば、黒板の粉受けにはチョークが

山のように置かれているのだろう。少々笑える光景ではあるが、彼女の必死さは充分に伝わってくる。

「それで、ここに連れてきたという訳か。飼う気なのか？」

「傷が治るまで、面倒を見たいんです」

本来なら、野生で生きているものを安易に人の手で保護することは『不自然』で、あまり勧められたものではない。それに、生物教師だからといって俺が生き物の飼育方法にまで詳しいとは限らない。メダカやカエル、ラット、ウサギくらいなら実験動物として世話をしたことがあるが、残念ながら野鳥となると範疇^{はんちゆう}外だ。

猫に狙われ、傷を負って衰弱し、冷たいコンクリートの上にぐったりと倒れ込んでいる小さな鳥。恐らく他の生徒は避けて通るか、見ぬふりをしたはずの血と泥で汚れてしまったスズメに、迷わず手を伸ばす彼女の姿が目には浮かぶ。それを思うと、俺の心は温かく膨らんでいくのだった。

「もちろん元気になったら逃がします。野鳥って、確か飼っちゃいけないんですもんね。……だって、いまさら見捨てられないんです」

藤倉は考え込んでいる俺が否定的だと見たのか、困り果てた顔つきで涙目になった。

彼女のすぐるような目に出会ってしまうととても他を当たれとも言えない。頼られるのが嬉しいのは事実であるし、そもそも藤倉のお願い、しかも泣き落としを俺が断れるわけもないのだ。自分の単純さに苦笑しながら、俺はスズメの箱の蓋を元通りに閉める。

「残念ながら私は鳥の飼う方には詳しくないんだが、生物部の蔵書に参考になる本があるかもしれない。一緒に探してみるか？」

「はい！」

「まず、とりあえずは傷の応急処置と栄養補給をするのがいいと思う。……私は実験室でブドウ糖液を作って待っているから、藤倉は保健室で事情を話して消毒薬と脱脂綿をもらってきなさい。薄めれば、鳥にも使えるだろうからな」

「ありがとうございます！」

今度はパツと言う音が聞こえてきそうなほどの笑顔に変わる。まったく、忙しいものだ。

期待に満ちた眼差しで俺を見上げる彼女に向けて、俺は精一杯努力して笑顔らしい笑顔を作る。

「礼には及ばない。……君のそういうところが、私はいいと思っている」

途端に、なぜか目を丸くして微動だにしなくなった藤倉のために、俺は先に立って防火扉を開けてやった。

数日後の早朝。

藤倉は小さな段ボール箱を手になつた場所に現れた。今日は、快復したスズメの放鳥式——といったは大げさだが、要は飛べるようになったので逃がしてやろうというイベントだ。

「寂しいけど、良かったです」

言葉通りの複雑な表情を浮かべ、彼女は段ボール箱に目を落とす。もちろん、中には例のスズメが入られている。絶えず、箱の中から力サカサと怪しげな音が聞こえるところからすると、治療のきいもあつたというところだろうか。

拾つたその日は看病と心配とで眠れなかつたらしく、次の日の生物の時間は居眠りをしていた藤倉。放課後、それを指摘すると真っ赤になつて平謝りに謝つていた。はじめのうちは、警戒からなのか餌を食べないと言つて、飲み水に溶かすブドウ糖（本来は生物科所有の試薬なのだが、大目に見てもらいたいものだ）を分けてもらいに生物準備室に来たりもしていた。週末も自宅から出ずに、ずっとスズメの隣にいたという。その献身的な看護には頭が下がる。

そんな日々も今日で終わりだ。ここしばらくの彼女をねぎらつて、朝早くて誰もいないのをいいことに俺は頭を撫でてやる。

「よく頑張った」

柔らかい髪は朝の陽射しを浴びて温まっていて、体温の低い俺には心地よい。三度ほど手を行き来させたところで、藤倉は俺を見上げると照れくさそうに笑い、「死なせなくなかったですから」と肩の荷が下りたかのように言った。そして、紅葉の木の根本にしゃがみこみ、段ボール箱をそつと置く。

「じゃあ、開けます」

蓋を仮留めしていたガムテープに手を掛け、俺を見上げると、緊張の面持ちで彼女は言った。変に気負った様子なのがなんだか微笑ましい。

「自分のタイミングでいいぞ」

俺の同意よりも、彼女の気持ちの方が大事であるはずだ。藤倉は頷くとしばし箱を見つめていたが、やがて再び開けにかかった。今度はためらいなく、ビツと音がしてテープが剥がされ、蓋が開けられる。

スズメは急に流れ込んできた外気に驚いて体を震わせた。朝の光に一瞬ひるんだようにも見える。

「飛んでつていいんだ——あ！」

藤倉が声を掛けたときには、スズメはすでに体勢を立て直して白い空へと飛び去っていったところだった。一目散といったその様子は、ここまで長らく面倒見てきた藤倉にとっては呆気ないものだったらしい。立ち上がった彼女は口をちよつとだけ開けたまま、声を出すのも忘れてスズメを目で追っていたが、その姿もあつという間に見えなくなってしまった。

俺は、すっかり行動が停止したきりの藤倉の肩を叩く。

「……無事、巣立ったな」

「そうみたいです。……でも、ちよつとくらい振り返ってくれてもいいのになって思っていました」

そう言つて、藤倉はやつと口を閉じた。しかし唇を尖らせて空を見上げ、未だ名残惜しそうにスズメの行方を探している。

「良かったじゃないか、元気そうで」

「それは嬉しいんです、けど」

「野鳥にとつては、警戒心が薄れることは致命的なんだ。人間を避けない野鳥はただの愛玩動物になってしまう。きっと、あれでいいんだろう」

「はい。……うん、そうですね。それに、ずっと飼い続ける方がかわいそうですよね」

そこでようやく、藤倉は肩の力が抜けたらしかった。やっと彼女の笑顔を見ることができて、俺もつられて頬が緩んでしまう。自分が納得して初めて、報われた、といった表情になるのは、責任感の強さからくるものか。大役を果たした藤倉は、まだ温もりが残るだろう段ボール箱を穏やかな瞳で見つめていた。

屈託無い彼女の様子にほっとしながらも、俺は別の巣立ちに気を取られていた。

ここで昔、泣いていた藤倉を励ましたことがあった。確か、二年前の夏。藤倉の成長に驚かされ、また、その眩しい未来に思いを馳せた夜だった。

あのとき見えたものよりも、さらに大きく広げた翼でしつかりと羽ばたく藤倉が俺の目の前に立っていた。彼女はあと数ヶ月もすればこの高校から巣立ってしまうのだと、今さらながらに思い知る。

もしできるなら、攫って閉じこめて、ずっと手元に置いておきたい。しかし、飛び立とうとする鳥を無理に拘束してしまえば、俺がそうあって欲しいという藤倉ではなくなるだろう。俺が見ていたいのは、旅立ちの日に備えて懸命に翼を動かす藤倉であり、いつの日か大空を翔けるであろう藤倉の姿なのだ。

飛んで行かせるのは惜しいが、自分の元に縛り付けたくはない――心がそんな矛盾に支配され、何とも落ち着かない。

不意に、体が前にのめった。見れば、藤倉は気分上々といった晴

れやかな顔で俺の白衣の両裾を引いている。

「ん？ どうした？」

「まだ時間ありますし、お祝いにコーヒーで乾杯しませんか」

「そうだな。……せっかくだから、新しい豆を出そうか」

藤倉は、香りが楽しみです、と自分の提案に満足そうに笑いながら、空になった段ボール箱を畳んで抱えると校舎の方へ向かい、歩き出していた。弾んだ声に誘われるままに、俺も慌ててその後を追う。

この鳥は、今はまだ俺の懐にいてくれる。

やがて旅立つ彼女の隣をいつまでも守っていくためには、俺はど
うするべきなのか。おぼろげだった絵が、しっかりと浮かび上がり
始めたような気がしていた。

「雪槽 返り咲き」「墨の汚れて落ちにくいんだよね」

「先生、その白衣、もう着ないのならもらってもいいですか？」

私は、実験台に横たえられた先生の抜け殻を指さした。先生色――長年かけて渋い灰色に染め上げられていた白衣の背は、とあるアキシデントに見舞われて、周囲よりもさらに一段濃いグレーに色を変えている。

「これを？ もう、汚れて駄目になったものだぞ？」

いったいどうするんだ、と先生は首を傾げた。驚いたと言うよりは、やや呆れたという感情が乗った声。先生には使い道がないものかもしれない。でも、私にとっては彼の過去が詰まったタイムカプセルで、私と出会う前の先生を想うにはもってこいの舞台衣装だ。

「こんな機会、何年かに一度ですから、記念にもらって――そうです、家でごっそり着ます」

「着る？」

先生は焦ったようにメガネを直すと、なぜか語尾を濁して何も無い斜め上を見つめる。

「まあ、別に構わないが――何というか、君は本当に欲張りだな」

金曜の放課後。生物実験室の掃除が終わり、今週分の消灯や施錠のチェック表を若柳先生に提出する役に私が名乗りを上げると、クラスメイトの男子は「若に凍死させられるなよ」と笑って帰って行った。

一人居残って表に記入しながら、私は考える。

若柳先生の評価というのは、未だに『完璧主義で感情がなく、ときに冷酷』といった感じらしい。女子だったら若干反応も違ってい

たのかもしれないけれど、いずれにしても『あのクールっぽいところが格好いい』と言うだろうと思うので、基本的には男子と大差ない。

そう言えば入学当初、若柳先生はその名前にちなんで吹雪だとかブリザードだとか呼ばれていた。あの頃すでに、先生はみんなが考えてるような人じゃないと反論したい気持ちを抑えながら友人達の会話を聞いていたのを思い出す。今となっては、本当の先生のこととはみんなにはずっと内緒にしておこうと考えてしまっただけだし。

そんな思考の寄り道をしながらなので進みは遅かったものの、チェックが終わった。

ちょうどその時、勢いよく実験室のドアが開く音がして、私は反射的に顔を上げる。驚いたことに、件の若柳先生が息を切らせて駆け込んできたところだった。

「あ、先生。今、これを持って行こうと思っ——」

「藤倉、ちょうどいいところに。手伝ってくれないか。一刻を争う」さらに驚いたことに、彼は珍しくずいぶんうろたえた様子で私に助けを求めたのだった。どうかしたんですかという私の問いに、先生は抱えていたものを示すと、「墨汁をこぼしたんだ」と苦々しく言った。

先生が持ち込んだできたのは、見事に黒く染まった白衣だった。

指示を出されるままに試薬とビーカーを揃えつつ、何が起きたのか尋ねてみると、先生は簡潔に説明してくれた。

来週行われる、生物部の研究発表会の準備をしていたこと。プリントの調子が悪く、仕方なく筆と墨でイベント用の看板を作っていたこと。そして、作業の邪魔になると脱いで畳んでおいた白衣の上に、墨の入った容器を落としてしまったこと。

染みがひどい背中を上にして実験台に広げられた白衣に、私は顔

をしめた。まるで若柳先生の標本のようで直視できない。

「もう無理かもしれないが、悪あがきはしておきたい」

そう言ってタオルを薬品に浸すと、先生はすっかり染み付いた墨汁との戦いに身を投じた。

先生の大きな身体を包むこのサイズを手に入れるのはなかなか骨が折れるといつか聞いたことがあるから、できるなら復活させたいという気持ちは分からなくもない。でも、それにしただってひどい状況だ。墨の汚れはアルコールで落ちると何かで読んだのだそうだけれど、どう見ても先生に勝ち目がないように思う。もともとグレーに変色していたのだから、これを機会にきっぱり諦めるという選択肢はないのだろうか。

薬品は手が荒れるからと言われてしまったので、試薬を量る以上のことはさせてもらえない。私を労ってくれているのは嬉しいけれど、役に立てないのは悔しい。手持ちぶさたになった私は、苦悶する先生の姿を盗み見た。

不謹慎を承知でいえば、先生の必死な顔を見つめるのは楽しかった。眉間に皺を寄せ、口を尖らせながら広げた白衣をガーゼでこする作業に没頭する先生。その様子も、さっき実験室に飛び込んできたときの慌てた顔も、めったに見ることができないレアな表情だ。そんなものを見せつけられてしまつては、凍死させられるどころか胸が熱くなって仕方がない。

先生、ほんとうは全然完璧なんかじゃない。さっきの男子との会話を、私はひとり、心の中で否定する。先生だつてごく普通の人間で、私たちと、いや私とこんなにも似ているのだと。そしてその部分は、私以外のどの生徒にも見せない素顔だ。

気配を感じたのか、ふと顔を上げた先生は私の視線に気付くと、「何だ？ 楽しそうに」と手を止めた。

「先生も、慌てたりするんですね。……あ——ごめんなさい」

見とれていましたとも言えずにごまかそうと口をついて出たのはあまりに正直すぎる感想で、我ながら失礼だと言つたそばから反省

する。

「君は私をいつたいなんだと思っっているんだ。……私だって失敗することもある」

彼はげんなりした様子でため息を吐いた。怒っているというよりは拗ねているといった雰囲気、ちよつと安心する。

「たまにしかない失敗なら、しっかり見ておきます」

「勝手にしなさい」

わずかに苦笑いのかけらを見せると、先生は再び墨落としに戻る。白衣の背中は全面的に墨色に染まっていた。持ってきた当初よりはだいぶ薄くなつたけれど、それでもこれを着て校内を歩いてても大丈夫というところまではいかない。しかし私に、一生懸命な先生を否定することはできるはずもなかった。彼を応援するには、今は気を紛らわすための話し相手になるのが一番のような気がする。

「墨の汚れって、頑固なんですね。……そうそう、私、歯磨き粉とかご飯粒でも落ちるって聞いたことがありますよ」

「君は、知恵袋のようなな」

「え？」

知恵袋、とは。十七歳の女子高生を捕まえて、おばあちゃん扱いなんてひどい。手を動かしつつ相槌を打つ先生がなんだか楽しそうなのは、きっと先生もそう思ったからだろう。でも、それなら先生はおばあちゃんのような私の彼氏だ。そう考えたら、不満で膨らんだ私の頬もややしばむ。

先生は微妙な顔の私を敢えて放っておいて、先を続けた。

「しかし、ご飯を調達できるような場所がない」

「学食も閉まつちゃってますもんね。残念です」

「むしろ、閉まっていることに感謝をした方がいいぞ。もし学食が開いていたら、藤倉にライス大盛りを持ち帰りに行かせていた」

「それは嫌です」

「だからこそ頼むんだろう」

どうも、近ごろの彼は私に意地悪を言っ困らせるのが趣味のよ

うだ。先生は手を止めると、口元をゆがめて私を見た。笑いをこらえているらしい。

学食から実験室まで、どんぶりいっぱいのご飯を手にする自分の姿を想像すると確におかしくて、脱力した私の方が先生より先に頬を緩めてしまう。なんだか負けたような気になって隣の先生を見ると、彼はおもむろにメガネのブリッジを指でずり上げた。笑いは辛うじて押し込められている。

「人選を間違えた」

「どういうことですか？」

「君と話していると、こんなことなんてどうでもよくなってしまう」肩をすくめた先生の口から出たのは、なんと敗北宣言だった。

結局、お喋りが楽しいということだろう。知恵袋やらライス大盛りやら言われっぱなしではちょっとだけ悔しかったけれど、これで二人とも負け、おあいこになったような気がする。ニヤニヤしていたら私の緩みきった顔を眺め、先生はついに吹き出した。

「何か、言いたそうだな」

私は慌てて首を振った。先生はまだ不審そうに「そうか？」と尋ねていたが、私が白状しないと分かると、やがて単調な作業で疲れた手をストレッチしつつ天井を仰いだ。

「しかし、大学からのいろいろが詰まったものだったんだが、いいかげん潮時か。諦めて、新しいのを買うかな」

先生は白衣の両肩のあたりを掴んで蛍光灯の光に透かすと、まるで旅立つ友人を見送るような目をしながら呟く。おそらく、先生との付き合いは私の倍以上にもなる白衣だ。思い入れもひとしおなのだろう。

学生時代のことはあまり聞いたことがない——というか、私は今の先生を追いかけてばかりで、これまでは昔のことを尋ねる機会なんてなかった。今なら聞くのにはちょうどいいかもしれないけれど、もしかしたら知られたくない過去だってあるかもしれない。それに、この柔らかな先生の表情を知っている人たちは他にもたくさんいる

だろう。先生がそういう人だとは決して思わないが、昔の彼女の話なんかがちなりとでも出てきたとして、私は果たしてそれに耐えられるだろうか。

さんざん迷ったあげく、それでも好奇心と探求心が勝って、私はこわごわ質問してみた。

「……あの、先生の学生時代ってどんな思い出があるのか、聞いてもいいですか？」

「何で、そんなに遠慮しているんだ」

やや目を見張り、先生は逆に尋ね返す。私は、思ったままを答えた。

「いえ。聞かれたくないこととか、私の方が聞くのが怖いこともあるかもしれないって思いました」

「そんなに期待されるほど面白いものではないがな。君に聞かれたくないことは、私には一つもないぞ。……例えば私の過去に何かあったとしても、それもすべて私の一部だ。君には私の全部を受け入れてもらえると思じているし、受け入れてもらいたいんだが、どうだ？」

先生は、何の気負いもなしにさらりとそう言っただけ。そんなに自信たっぷりにとんだと問われれば、頷かずにはいられない。一方の先生だって、私が首を横に振るなどとはひとかけらも思っていないはずだ。だから、私を見下ろして微笑みを浮かべるような余裕さえある。

私がぐるぐると考え込んでいたことが、彼の一言で粉碎されて崩れ落ちてしまう。先生の言葉は、いつもそうだ。先生が信じてくれている、信頼されている。それなら私もすべてを聞いて、すべてを包み込む努力をしよう。

諦めて白衣を実験台に安置した先生に、腹をくくった私はちょっとだけ胸を張った。

「聞きたいです。先生のことは何でも、例えば面白くなくても」

「言っじゃないか」

私の返事を引き出そうとするかのような彼の口調につられてつい出てしまった言葉に、すかさずつつこみが入る。そういう意味じゃなくて、としどろもどろに言い訳する私の額を、先生はドアをノックするような手つきで、コン、と軽く叩いた。

「……落ち着いてからもう一度、言ってみなさい」

そして、相変わらずの涼しげな瞳で私の顔を覗き込んで待つ。

私は、目の前の若柳理雪という人間の全部を知りたい。先生の今も過去も私の心にしまいたいと、切実にそう思う。私と出会う前の二十数年も、そして、できることならこれからの先生もずっと。それが途方もない夢のように思える私は、どうしようもなく子供だ。けれど、それでもいつか、そんな日が来ると漠然と確信している自分もいる。

ようやく覚悟を決めて私が見上げると、先生はやや首をかしげた。「なんだか百面相でも見ているようだったな。……追試の準備はできたのか」

私が考え込んでいた間、ずっと観察されていたようだった。頬がかつと熱くなって少しひるんだけれど、負けずに言い返す。

「はい。先生の全部、受け入れます」

「貪欲なんだな」

「自分で思ってたより、欲張りだったみたいです」

驚いたように少し目を見開いて、先生は頷いた。

「……明日、新しい白衣を探しに行く。付き合ってくれるなら、その道すがら話そう」

「はい、ぜひ！」

思いがけず、明日の土曜日はドライブだ。掃除当番で、ほんとうに良かった。

彼の視線の先には、広げて置かれたままの白衣。先生の過去が凝縮されて、そこにあった。今なら言える——勢いにまかせて、私は聞いてみた。

「先生、その白衣、もう着ないのならもらってもいいですか？」

【雪椿 返り咲き】夜にお待ちしてます

「先生！」

呼び鈴に手を伸ばし、鳴らすよりも前。まるで玄関を見張っていたかのようにドアが開き、藤倉が現れた。飛びつかんばかりの勢いで顔を出した彼女は、なんとか踏みとどまると両手をぼん、と合わせた。

「あの……お仕事は、終わっただんですよね。早めに切り上げたとか、そういうことは」

「心配しなくていい」

俺がそう言うと、彼女は初めて笑顔を見せた。かと思うと急に身体力を抜き、ドアにもたれるように崩れ落ちる。慌てて手を貸そうとするとそれを断って立ち上がり、俺を安心させるためだろう、につこり笑ってこちらを見上げた。

「……気が抜けました」

俺がいけない間の緊張の具合が痛いほどよく分かる、一連の仕草だった。ここに着くまでの間に多少自虐的になっていた俺も、その様子にいくらか救われる。雷が怖いという藤倉は、どんなにか心細かっただろう。いつかのように、無言で窓の外を眺めて耐えていたのか、それとも、俺の到着を心待ちにしてくれていたのだろうか。

「驚かせないでくれ。……雷は大丈夫だったか」

「ええと、まあ、はい」

「煮え切らないな」

「メールをいただいてからは、別の意味で落ち着かなくなってますた」

照れ隠しなのか、藤倉は俯いて自分の足下を見た。知り合った頃と比べるとずいぶん伸びた髪が、彼女の表情を隠してしまう。そういえば、明かりが漏れる廊下の奥からは微かに紅茶の香りが漂ってくる。いつもがコーヒー党の俺には、それがことのほか新鮮だった。

「先生のおっしゃったとおり冷たい飲み物を淹れたりしていたんです。アイステイーです。せっかくですから上がって一杯いかがですか？」

彼女らしくない早口に、俺は違和感を感じる。まるで台本をそのまま読み上げたように用意され尽くされた台詞。きつと心の中で何度も唱えていたのだろうと分かる。いったいどれほどの勇気を伴った言葉だったろう。舞台の上ならばもっと自然に振る舞えるのだろうにと微笑ましくも思った。

それは、実に魅惑的な誘いだった。

外は雷雨だ。しかし、例え彼女が雷鳴に怯えていても、それをやり過ぎために俺を待っていてくれていたのだとしても、雷というキーワードで自分の衝動的な行動を正当化しているようにしか思えない。メールのやり取りの中で、彼女がたった一言でも『来て欲しい』と言っただろうか？

『そんなに浅ましい人間だったのか』

どこかにいる冷静な自分——独りのはずの女生徒の家へとやってきた男性教師を、冷ややかに見つめている——の声が聞こえてくる。気付けば、雷などというのはただの口実と成り果てていた。

わずかな逡巡の後、結局俺はもう一人の自分に負けた。

「いや、ここでいい」

今更に、立場を思い出していた。

「さすがに、中までお邪魔するわけにはいかないだろう。……ここでもいいんだ」

繰り返したのは、自分自身を納得させるためだった。それがかえって彼女の全力に応えなかったことを身にしみて知らされる結果となり、目を伏せる。

藤倉は特に不審がることもせず「わかりました」と微笑んで明かりの方へと消えた。何故か大急ぎで戻ってきたと思ったら、タオルと座布団、それに菓子皿を抱えていて俺を驚かせた。

「髪が濡れていると、いつもの先生じゃない気がして。風邪を引か

ないように、ちゃんと拭いてくださいね」

「ありがたく使わせてもらう」

やはりいつもとは違って見えたのかと少し慌てたが、それよりも藤倉の心遣いに冷えていた胸が熱くなった。

しばらくの間、奥の部屋の方からは忙しそうな音が絶えず聞こえていた。それが止むと、トレイにグラスを二つ乗せ、藤倉が現れた。「もちろんティーサーバーとか紅茶用のポットなんてうちにはなくて、茶葉もはじめはティーバッグしか探せなくて、どうしようかと思いました」

アイスティーは年単位ぶりに飲んだかもしれない。藤倉は普段通りのふわりとした笑顔で、身振り手振りを交えながら苦心を語ってくれた。家にたまたまあった茶葉で淹れたのでいまいちかも、と彼女は謙遜していたが、今の俺には爽やかな色と香りは嬉しい。

しばらく取るに足りない会話が続きたくないので、藤倉はためらいがちに口を開いた。

「……本当は、ご迷惑だったんじゃないですか」

「何がだ？」

「こうしてわざわざ来てもらったこと、です」

柄にもなく上げそうになった声を、俺は短く息を吸って耐える。

藤倉は、飲み物の入ったグラスに目を落とした。まばたきが多くなり、それで告げたいことを頭の中でまとめているところなのだと分かった。多分、俺がよくする癖を真似たものだと思うのだが、面と向かって聞いてみたことはない。そういう姿を見守る時間が、今の俺にはとても大切になっていた。

顔を上げた藤倉は、意を決したかのようにきっぱりと言葉を紡ぐ。「個人的な理由でこんな遅くに先生を呼び出すようなことになってしまつて、少し後悔していました。それも、落ち着かなかった原因の一つだったんです。先生が気にしてらっしゃるのも、きっとそういうことですよね？」

この子は。

——この女性には、どうして分かってしまうのか。

すっかり言い当てられていた。きつと、眼鏡の奥の瞳が見開かれたことにも、彼女は気付いていただろう。雨を理由にして夜の藤倉に会おうとし、それを必死で隠し通そうとしていた俺よりも、藤倉の方がよほど相手のことを想い、考えていたようだった。

言い終えてなお優しい彼女の表情を目にした途端、俺のくだらない感情などはすっかりどこかへ飛び去ってしまっていた。悪いことに、俺の全神経はその場を取り繕うことだけに集中したのだ。そんなとき、心はどうしても『理雪』から『若柳先生』に傾いてしまう。『……君が気に病むことはない』

「でも、先生は——」

「頼ってくれて当然なんだ。俺は、それで嬉しい」

彼女の言葉を遮って、俺は微笑んだ——つもりだった。上手く笑えていたようで、藤倉も「ありがとうございます」とはにかなでくれる。

これで良かったのだろうか。一抹の不安は、再びのとりとめない会話に流されていった。

眉一つ動かさずにアイスティーを取りに行った藤倉は、大人だった。

『でも』と何か言いかけた一瞬、彼女は深く傷ついたような、悲しげな瞳を見せた。後になってみると妙に気になる。

——彼女を傷つけるために行ったのではなかったはずなのに。

放課後の実験室で、『聞かれたくないことは一つもない』などと威勢のいいことを言ったのはついこの前のことだった。藤倉も、受け入れると応えてくれた。

それなのに、俺自身が藤倉の顔を見たかっただけなのだとどうして言えなかったのか。そんなに『きれいな教師の自分』でいたいのか。

か。子供じみた部分こそ、大切な人にさらけ出すべきだったのではないのか。

「この恥知らずめ」

俺はそう呟きながら車へと走る。雨はまだ止まない。

何かに怒っているかのような空のな荒れ模様に、俺は自らがどやされているような気がしてため息を吐いた。

【雪椿 返り咲き】その目は闇に濡れていた

「残念だが時間切れだ、藤倉」

「あ、本当ですね。あつという間でした」

日曜の夕方、家や学校から一時間半ほど離れた海に、私たちはいた。水族館でイルカのショーを見たり、強い海風に煽られながら、寒い寒いと文句を言いつつ海岸を散歩したり。しかし、楽しいときはもうおしまいだと時計が告げている。

私は、先生の顔から視線を外して、夕焼けの色に染まりつつある海を見納めた。日はかなり傾いたが、今日は太陽が沈み切るまで見届けることはできない。先生といわれた一日が終わるのは寂しいけど、仕方がない。せめてこの景色をしっかりと覚えておいて、次こうして会える日までの栄養にしないと。

私がそう言うと、先生は「明日、学校で会うんだぞ」と眉間に皺を寄せたが、それきり黙りこむと海を見つめていた。ちらりと盗み見た横顔にはオレンジ色の夕日が映り込み、何となくもの悲しそうだった。

「そろそろ、戻りましょうか」

「……そう、だな」

珍しく、先生は齒切れ悪く答えた。

美しい夕日が売りの海岸とはいっても、晩秋、しかもこんなに寒い日に見に来ようという人は少ないらしい。お昼過ぎに停めたときにはかなりのスペースが埋まっていた駐車場だったけれど、今では先生の車のみが取り残されてしまっていた。先生に似合う、いわゆる『外遊び』向けの大きな車は、寂しげにぼつんと私たちを待って佇んでいた。

車に乗り込むと、先生はかじかんだ手を温めようと暖房を入れた。私も自分の温度を上げるために冷えた頬と手を擦り合わせる。

先生と一緒に、日が沈むのを見たかった。以前ほどは気にしないようにしているつもりでも、こういうときは『生徒』の肩書きが恨めしい。

「ずっと今日が続けばいいのにつて思っちゃいました」

「……それは、無理な注文だな」

しかし、先生のいつもよりさらに低い声で、私はすぐに自分の失言に気付いた。そもそも、この時間で切り上げなければいけないのは私の門限のせいなのだ。もし私が大人だったら——なんて考えても、どうしようもないこと。

先生が、メガネを外す。クロスを取り出して拭きながら、「気持ち分かるんだが」と、いつものトーンに戻って彼は続けた。

「例えば藤倉以外の女生徒でも、教え子が門限を破るまで男と一緒にいたと聞いたら、いい気はしないだろうしな」

「時間を限らせちゃってるのは、私のせいなんですもんね。……仕方ないんですした」

「仕方ない、か。それで割り切れないから、困る——」

手を止めてレンズを夕日に透かしたまま、先生はそう吐き出すように言うのと固まった。語尾ははっきりしないまま、エアコンの音に溶けた。私に向けていたのか、先生自身が自分に言い聞かせていたのか、どちらとも取れる。

きつと呆れられたんだろうな、と、私は落ち込む。

気持ちを切り替えよう。今日、こうしていられるだけで幸せなのだ。私をここに連れて来てくれた先生を、これ以上困らせたくはなかった。申し訳なくて、先生に改めて話しかけようと運転席を見ると、メガネをかけていない先生と目が合う。

先生は、眩しそうに目を細めた。橙の光に照らされる中、裸の瞳だけが先生らしくもなく歪み、闇色が滲んでいる。

「あの、今日はありがと——」

「藤倉」

私の言葉を遮り、少し薄めの唇が一言だけ紡ぐ。その言葉が終わ

るやいなや、バン、と鈍い振動がして目の前が真っ暗になった。

何が起きたのか分からなかったが、気付けば運転席から先生の身体が乗り出してきて、助手席の私に覆い被さっていた。すっかり面喰らって目をしばたく私のすぐ前に、先生の顔。頭の上、助手席のヘッドレストに、麻のジャケットの腕が見えた。さっきの揺れは、ここに腕を叩き付けた音だったのか。

「先生」

その声にはつとしたように、先生はのろろと運転席へと戻る。

「ごめん、な」

彼はハンドルに肘を寄せ、大きな手で自分の額を支えた。少し堅めの先生の髪が、骨張った指で乱れてぐしゃっと鳴る。

思えば、夕日を眺めていたころから先生の様子は変だった。いつも、多少照れくさそうに私を導いてくれるはずの先生が、今日は硬い表情だったり、ぼんやりしていたり。彼はずつと何かを思い悩んでいたのに、私は尋ねることが出来なかった。

先生は、怯えたような目で言葉に詰まりながら呟いた。

「乱暴だった、だろう。……怖くは、なかったか」

「大丈夫ですよ。それに、先生なら」

多少強引でびっくりはしたけれど、抱きしめられた以上の何かをされたわけではないし、怖くはない。例え怖いと思っただとしても、相手が先生なら嫌ではない。

「だいぶ前に、気安くそういうことをいうなと、言っただろう」

「気安くありません」

「では、気安くではなくても、だ。……触れたくなくてしまっんだ」

先生は、困り顔で口元を緩める。前に同じことを言われたのはバレンタインデー、私が先生に思いを告げた日だった。その頃からしばらく経ち、私の中には、さっきのように予想外のことが起きても受け止める覚悟もできている。私の覚悟なんて、大人の先生から見ればたかが知れているといったところかもしれない。でも、気安く薄っぺらく言っただけではないつもりだったから、少しだけ悲しく

なった。触れたいときには、触れてくれて構わないのに。

でも、そんなことは先生——今日は、自分を必死で抑えているように見える——の前で軽々しくは言えないような気がした。いや、今日だけではなく、夏あたりからどうもぎこちなさを感じていたのだ。

何だかうまく表現できないけれど、たまらない気持ちだった。決して先生が怖かったからではなく、初めて聞く『ごめん』の弱々しさに、次の言葉が探せなかった。先生の前では泣くまいと、ずっと我慢してきた涙がみるみるうちにせり上がり、溢れて落ちた。

言葉で伝えられないなら。

言葉の代わりに、私は身体を動かしていた。私の涙に驚いた先生が名を呼ぶよりも、もっと早く。

「ふじ——」

ガサ、と、布と布とが擦れ合う音がして、今度は私が運転席に先生を組み敷くような格好になった。ハンドルを背にした私の下に、シートに沈んだ先生の顔がある。初めての視点で、変な感じがした。彼の瞳に、私が映っていた。目を見開いている先生に、そろそろと両手を伸ばす。瞳に映りこむ顔はじわじわと大きくなっていき、やがて、そつと寄せた私の唇に先生の乾ききった唇が当たった。

さつきは余裕がなくて気付かなかったけれど、彼は海風の温度がまだ残っているかのように冷たかった。少しだけ、ざらつく髭の感触がする。先ほどの先生のように抗いがたいものではなく、恐る恐る触れ続けていただけだったけれど、合わせた唇が暖かく、柔らかくなってきたのが分かる。

静かに顔を上げると、シルバーのフレームが無い先生の顔が視界に飛び込んでくる。少しでも幼く見える表情は八歳年上の大人の先生ではなく、おかしい例えだけれど、私の『彼氏』である先生の顔。その頬は、私の零した涙で濡れていた。

倒れ込んだ状態のままで、私は静かに尋ねる。

「今の私、怖かったですか？」

「いや」

切れ長の瞳を細めて、先生は私の背中に腕を回した。そのまま、ぐいっと引き寄せられる。

「……とても、愛おしい」

もともと不自然な体勢だった私は崩れ、先生の上に完全に乗っかる形に落ちつく。意外に厚みのある胸板と、わずかに感じる肋骨の感触。私の顔が押し当てられたその胸から、ずいぶん速いテンポで脈打つ音が伝わってきた。

先生が今日一日ずっと考えていただろうことに、私は臆気ながらも思い至った。先生だってこうして触れ合えばどきどきもするし、限られた時間がもどかしくて憂鬱になったりもする。互いの立場に不安を覚えたり、もどかしさを感じたりするのは、私だけではないのだということ。そう思ったらまた鼻の奥がカツと熱くなったけれど、先生の鼓動を聞いていたら落ち着いてきて涙は引いた。まるで見透かしたように、彼は呟く。

「泣かせてしまったか」

「先生の方が泣きそうでした」

「……そうかもな」

背中先生の手に、ぐつと力が入る。五本の指のそれぞれがはつきりと感じられて、私は思わず息を吐いた。

「実はさっきまで、このまま無理やり連れ去ってしまおうかと、悪いことを思っていた。……生徒だの門限だのと口にしてなんとか納得しようとしたつもりが、考えているうちにどんどん計画が具体的になってきてしまって。どうにも抑え切れなくなって——つい、襲ってしまった」

先生は、何ごともなかったように苦笑を浮かべた。その笑いにたどり着くまで、どんな逡巡があったのかは分からない。けれど、さっきまでのたどたどしさが消えた流暢な話しぶりは普段通りで、私は安堵に胸をなで下ろす。

「嫌じゃなかったです。その、好きでいてもらってるんだ、って分

かりましたし」

「ありがとう」

そこで言葉を止め、先生は私を見つめる。

「……一線を越えなかったことは誉めてもらいたかったが、まさか」
「あの、恥ずかしいのであんまり言わないで下さい」

繰り返されると、顔から火が出そうだった。でも、これくらいしない限り、先生は闇色のままなのではないかと恐ろしくなったのが本音だった。先生が——先生と幸せになるためなら、何でもできそうな自分に驚いてすらいたけれど。

先生は、裸の瞳で真っ直ぐに私を見ていた。揺るぎない視線だった。

「いつも一緒にいらなくても、今、隣に先生がいます。私、しばらくはそれで充分だと思います。……私が子供だから——ううん、先生が大人だからって、いつも我慢ばかりさせてしまっただけなんです。先生こそ、たまにはわがままになってください。もっと、その——あ、甘えても、いいですよ。大丈夫です」

私の精一杯の宣言を聞いてしばらく、先生は珍しいことに目を丸くしていた。言ってしまったことの恥ずかしさに、私も黙り込む。

「今、割とやりたい放題だが。……では——できるなら、もう少しこのままで」

「わかりました」

しがみつくように、しっかりと先生の服の裾を掴む。相変わらず耳に届く鼓動は、いつの間にか緩く落ち着いていた。

「人攫いさんに連れ去られたいのはやまやまですが、私がこんなに乗り気じゃ無理やりにはなりませんね」

「まったくだ。計画を実行するのは、またの機会にしよう。……さて。名残惜しいが、いくら何でもこれはいろいろとまずいな」

力が込められたままだった先生の腕が緩む。その手を肩口に滑らせると、先生は私の身体を押し戻した。慌てて助手席に戻り、やや乱れていた服を直す。

一方の先生は今のどさくさで足下に飛んでいったメガネを拾い上げて、元のように掛け直した。いつの間にか、暖房はもうとつくに車内に行き渡っていて暑いくらいだ。

換気のために運転席の窓を開け、夕日の方を見やりながら、先生は「また来よう」といつもの声で言うのを振り向く。レンズの向こうの瞳には、今度はちゃんとオレンジ色が差していた。

「もちろんです」

今度は、卒業したらまた来よう。夕日が沈むのを、先生と二人で見届けたいから。

【雪椿 返り咲き】何物にも染まりえぬ心

『気が早いけどごほうびはもう決めてたりします』

『まあいい、転ばないように気をつけてな』

何度かのやり取りを終え、改めて藤倉からのメールの受信時刻を見ると、試験終了の五分後だった。不安だったのか、できの良さに張り切つてすかさず連絡してきたのか。文面を見る限りでは後者と思えたが、実際に話してみるまでは安心できない。彼女に限ってそんなことはないだろうが、もし失敗していたなら永久就職でも勧めてみようか。

「……そんなことは言えないか」

冗談にしてはたちが悪いかもしれない。心の中で呟いて頭をよぎる悪い考えを振り払い、俺は部屋の片付けを始めた。

まず、冷蔵庫を覗き込む。いつもなら無条件でコーヒーを出すところだが、朝のメールでは胃が痛いと言っていた。ならば、ミルクで薄めてカフェオレにでもしたらいいだろうか。

そういえば、誕生日に彼女からもらったプレゼントはまだ使う機会がないまましまつてある。今日は格好のお蔵だしになるかもしれない。果たして、彼女は喜んでくれるだろうか。

今日は、センター試験の二日目。藤倉は俺が卒業したのと同じ大学の、同じ学部、同じ学科を志望していた。無事に受ければ、直接の後輩ということになる。

俺はといえば卒業しても学生街を離れがたく、社会人になっても比較的大学に近い場所に部屋を借りていた。試験会場でもある大学からは徒歩十数分というところ。じきに、彼女も着くだろう。

目に見えるあたりを一通り片付け終わり、件のプレゼント——バリスタエプロンを巻いたところで呼び鈴が鳴った。

『こんにちは、藤倉です』

次いで、ドアの外から彼女の声が聞こえてくる。実際は昨日も電話で話をしているが、何だかやけに懐かしいのは気のせいではない。去年の終業式以来、勉強に専念するのだということであっていなかったのだ。かれこれ一ヶ月近く、お互いの顔を見ていないことになる。

扉をぶち壊さんばかりの勢いをなんとか抑え、平静を装ってドアを開けた俺への彼女の第一声は、「バリスタさん！」だった。

その反応は仕込んでいた身からすれば確かにありがたいが、受験生はもつと他に先に報告すべきことはないものだろうか。そう言ってみると、藤倉は慌てて付け加えた。

「試験はわりとできた気がします」

「それはこれからじっくり聞こうか。……狭いが、上がってくれ」

「邪魔します」

彼女はきつちりと靴を揃えると、俺の後についてくる。

藤倉をこの部屋に通すのは、二回目。しかも前の一回は、俺たちがまだこういう関係になる前のことであるのを考えると、初めてといてもいい。全くのゼロと言えないところは胸を張れないが、俺の自制心もたいしたものだと思いたい。

相変わらず小柄な身体に、丸い目と顔。当たり前だが、久々に見た藤倉は最後に会ったときと何ら変わらない姿で現れた。それがこんなに嬉しいなんて——それは、新たな発見だった。

「まずはお疲れさま、でいいのか」

「そうですね。結果はともかく、少し休みたいです」

「休める結果になっているといいな。……一服したら、答え合わせをするぞ。覚悟しなさい」

「はい、バリスタさん」

藤倉は俺の言葉に、相変わらず明るい調子で答えた。顔色もいい

し、よく笑う。落ち込んでいる様子も特に見られない。どうやら本当に調子よく試験を終えたようだ。そう確信し、俺は彼女に背を見せてキッチンに向かいながら、密かに頬を緩めた。

「橙南の理学部なら、これくらい取ればいけるだろう。まさか、今回はマークの位置がずれたりはしていないだろうな」

「いくら私でも――たぶん、してませんよ」

「そううるたえるな。本気で言っではないさ」

前科者である藤倉は、はあ、と大きく一息吐いた。

各大学のボーダーラインが出そろうのはもう少し後。しかし、自己採点の結果だけでそう判断しても充分なほどの得点だ。むしろ、志望校のランクを一つ上げてもいいのではと言いたくなるほどに。当たり前のことだが、藤倉は時を重ねることに頼もしくなっていく。もちろん勉強においてだけではなく、身体も心も。それをいちばん近くで見守り、ときに追いかけてようとして焦る――それはきつと、楽しいことだろう。彼女と出会ってからのこれまでが、楽しかったように。

俺の淡い思いなどつゆ知らず、彼女はいつにも増してにこにこ顔を綻ばせながら言った。

「ご褒美を希望してもいいですか」

先ほどのメールで宣言していたあれか、と俺も快くうなずく。

「そうだな。……これならご褒美三つ分くらいはあげてもいい。言ってみなさい」

「三つも考えてきませんでした」

「無理に三つ言う必要はないぞ」

「ええと、ですね」

さっきの勢いはどこへ行ったのか、口ごもる藤倉。落ちつきなくさまよう視線、マグカップを持ったままの手はせわしく動いている。何かよからぬことを考えていると気付いた俺は、テーブル越し

に顔を近づけると尋ねる。

「いったい何だ？」

藤倉は顔を上げ、やや後ずさるように身体を引いた。熱を秘めた瞳で俺を見上げる。

「……ほんとのことを言うと、寂しかったです」

「え？」

「先生もこんな気持ちなのかなって、何度も確かめようと思いました。虫のいい話ですけど、もしそうだったら嬉しいな、と。でも、私のセンターのために『会わない』ってことにしたんですし、そんなこと言えなくて。……上手く言えないけど、こんなに、その、大事というか、先生が私の中でどれだけ大きいのか、思い知りました」
聞き返すと、堰を切ったように言葉が溢れ出してくる。ちょうど一年ほど前、バレンタインの日に、彼女が俺に思いを打ち明けたときに似ている。溜めに溜めた心を吐き出すときの藤倉は、いつもこのうなのだろう。

ふと、彼女の瞳に不安げな光が射す。

「だから、今日はちゃんと先生と一緒にいるって、確かめたいので

……お願いします。名前で、呼んでください」

「名前？」

「はい。もし先生が、私が『椿』だと思ってくれているのなら」

「それは、俺が量って、決めてもいいものなのか」

藤倉は、真顔でうなずいた。

「先生だから、教えてほしいんです。私、椿でしょうか？」

それを今更、俺に尋ねるのか。

いつだったか、俺と彼女それぞれの名について話をしたことがあった。藤倉は、自分の名前に強い誇り——それは、ある意味ではコンプレックスとも言えるのだが——を持っている。平たく言えば、『理想の自分』というハードルが高すぎる。俺から見た彼女は、自分の名に負けてはいないか。それを、聞きたいのだ。

再び視線を藤倉に戻すと、彼女は痛々しいほど真っ直ぐに、俺の

言葉を待っていた。

——また、不安にさせている。離れていた数週間だけでなく、一緒にいる今も？

考え事をするのについ無言になってしまふのは、俺の悪い癖だ。

いくら考えたって、いや、そもそも考えるまでもない。今更——答えなどとうに決まっているが、口に出さなければ伝わらないか。

「分かった。覚悟はいいな」

「覚悟、ですか？ ……いえ、できてません」

どうなっちゃうのか分かりません、と彼女がやや堅めの表情で笑った。その表情に感じる、胸を締め付けられるような痛みは何だというのだろう。そして、同時に感じる今にも弾けそうな期待は、いったい何と呼ぶべきものなのだろう。

——何の覚悟なんだ、と改めて自問自答する。藤倉に言ったというよりは、まるで俺自身に言い聞かせているかのようだった。俺とて年相応の経験を積んできたつもりだから、これまで女性を名で呼んだことが無いわけではなかった。しかし、今回は何かが劇的に変わってしまった。そんな予感が心を占める。

軽く目を閉じ、大きく一息吸って、吐く。ゆっくりと目蓋を上げると、やはり祈るような面持ちで正座したままの藤倉が視界に飛び込んでくる。

俺は、唇を開いた。

「……椿」

普段、人よりも低い俺の声は、もしかしたらいつもより上ずっていたかもしれない。

「君は、椿だ。出会ったときから、そうだった。そして、今はさらに素晴らしく咲き誇っている。……それと——聞くまでもないだろう。いや、そういう言い方はないか。ちゃんと、言わなくてはな。俺だって、寂しかったさ。だから、泣かないでくれ」

「これ、勝手に出てきたんです。悲しくて泣いてるわけじゃないですよ」

はにかみながら返事をする彼女は可憐で、これまで見たどんな姿よりも幸せそうに見えた。立ち上がる手間さえもどかしく、俺は藤倉ににじり寄ると、その背中にそつと両腕を回す。すると藤倉は慌てて俯き、目尻をぬぐうと再び顔を上げて笑う。瞳が潤んではいるが、泣いているわけではないらしい。

俺の心は名を呼ぶ前と変わらない。ただ、もともと近かった距離が、さらに近づいたような気はする。もっと近づきたいと、単純にそう思った。

「君もだ。……理雪、と」
「でも」

明らかに躊躇しているのが、手に取るように分かる。

「子供じみていると笑うなら笑え。……君ばかり、ずるい」

「笑いません。……笑っているとしたら、嬉しいからです。やったあ、って思ってますから。こうなることに憧れてたけど、現実になるわけないっていじけたりもしました。諦めなくて、ほんとに良かった」

そう言いつつ、藤倉はくすりと笑みを漏らす。俺はといえば、言ってしまったことはいえ恥ずかしさで急速に余裕が無くなりつつあった。赤くなっているであろう顔を見られるのもばつが悪く、彼女を抱きしめている腕に力を込めてごまかす。

やがて、彼女はいたずらっぽく言った。

「じゃあ、先生がもう一度私を呼んでくれたら」

「椿」

間髪入れず、返す。

「……理雪、さん」

遠慮がちに押し出された声に、俺の中の『何かへの期待』は途端に膨れあがった。我が侘なもので、早くもう一度呼んで欲しくなる。何度も何度も、その唇から紡がれたいと痛切に思う。

「先生の名前を呼べる日が本当に来たなんて、嘘みたいです」

「今日からは『理雪さん』だ」

しまった、という顔の藤倉に、俺は感謝を込めて告げた。

「椿が、そう望み続けてくれたからだ。ありがとう」

飽きもせずひとしきり名を呼び合つと、心地よい沈黙に浸る。

まるで、会えなかった時間を埋めるかのように。

明日になれば俺も生徒たちとの自己採点と進路指導の嵐に、そして彼女はさらなる壁との闘いに巻き込まれることは分かっている。だから、今日だけは――。

バサリ、と派手な音がして我に返る。テーブルを見ると、今日の主役のはずだったセンターの問題用紙が、俺たちの身体に引っかかって床へと落下していた。俺はそこで、『たちの悪い冗談』を再び思い出す。

「先生？」

「いや、何でもない」

藤倉が、不思議そうに俺の顔を覗き込んでいた。

『永久就職』は今の藤倉には必要ないものになってしまった。が、もし今後、二次試験が芳しくなかったら――勧めてみるべきだろうか。

俺はそんなことを本気で考える可愛らしい自分に気付き、思わず頭を抱えそうになった。

「雪椿 返り咲き」意地が悪いなんてもんじゃない

橙南高校は世間でいうところの進学校で、大学への進学率がわりに高い。三年生は、一月から基本的には大学受験に向けた自主学習の期間に入り、登校が強制されなくなる。要するに、『学校へは来ても来なくてもいいから勉強しろ』という方針なのだ。

ここ数日でいよいよ冬本番の寒さが訪れ、なじみの防火扉の外は一面雪景色になり、毎年のことながら若柳先生によって立入禁止が言い渡された。思い出すのも恥ずかしい——私は前の冬、そのことで先生に迷惑を掛けてしまったので、今年はおとなしくそれに従っている。

他人事のようだけれど、センター試験も終わって、いよいよ本格的に受験シーズンに突入。そろそろ、学校で三年生を探すのは困難になってきた——そんな頃。

『……で、この問題の考え方が分からないんですが』

いつものように引き戸をノックしようとしたところで、私は思わず構えた手を止めた。部屋の中から、若柳先生ではない声が聞こえたのだ。今までだって先客がいたことはたびたびあって、その日は仕方なく会うのを諦めたり、時間を潰してから再訪問したりすることもあった。

しかし、今日はそのどれとも似つかない事態が展開しそうな予感がひしひしとしている。何せ、中から漏れていた声は私の親友、蔦真結子のものだったから。

蔦ちゃんは私と先生の間の事情を知っているから、私が入っていても構わないかなとちょっとだけ考えたけれど、彼女も同じく国公立大受験組だ。蔦ちゃんが一人で若柳先生に質問しにくるなんてことは初めてのように思うし、そこまでしても気になる疑問なら今のうちに解決しておきたいだろう。そう気を回して、私は廊下で彼

女の用事が終わるのを待つことにしたのだった。

私の判断は正しかったのだ——そこまでは。

そのまま壁にもたれて立っていた私に、薫ちゃんの声が届く。

『……まだお聞きしたいことがあるんですけど』

これは立ち聞きをしてしまった言い訳にしかないのだけれど、彼女は演劇部の看板女優として日々稽古を積んできただけあって、見事に通る声の持ち主だ。地声も他の女子よりは大きく、つまり、廊下にいる私にも彼女の声は聞こえてくる。

『——』

先生が、何か答えた。先生もよく響くいい声をしているのだけれど、低いだけに廊下では聞き取りづらい。きっと、先生のいつもの受け答えなら『なんだ、言ってみなさい』といったところだろうか。

『先生は、この後もずっと、あの子を幸せにしてくれますか？』

『——？』

『椿のことです。……分かってますよね』

——何聞いてるの、薫ちゃん。

突然の話題に、私は思わずその場にしゃがみ込んだ。さっきまでは、確かに生物の問題について議論をしていたはずだ。まさか、いきなり自分のことに移るなんて。

『私、来週からは来ないんで。でも椿は先生に会いに、きっとまだ学校に来ると思います。先生はそんな人じゃないって思ってますけど、私のいない間に椿が泣くようなことがあったら我慢できないし』

私は目を見開いたまま、冷たい廊下に座り込んでいた。しかし乱入するわけにもいかず、とはいえここでそつと去るという選択肢も取れずに、私は結局その場で続きを聞く。もはや、自分が逃げ出したいのか、先生の答えを聞きたいのかよく分からなかった。

彼女は、私がここに来ることを知っていて、わざとタイミング良くそんな質問を繰り出したのか。それとも、何の作為もなく、私がつまたまちょうどいい時間に来てしまったのか。

もちろん、二人の会話は私になどお構いなしに流れていく。

『先生があの子を大事に思い続けてくれるなら、椿はきつとずっと幸せでいられると思うんですよ』

『——』

『勝手な言い分だっというのは分かってますけど、私はあの子が幸せでいて欲しいんです。最近の椿は、卒業の話をすると不安そうになる 때가 あつて』

薦ちゃんの声がわずかに震えていることに、私は気付いた。付き合いが深い私にしか分からないことだと思うが、これは彼女が怒りを我慢しているときか、泣かないように耐えているときか——そのどちらかの癖だ。そして今日はおそらく、後者。

彼女には隠せなかったんだ、と私は唇を噛んだ。

確かに、卒業するのが怖いという気持ちはあった。そんなことでは揺らがない絆だと思っではいても、先生と毎日とは会えなくなることや、教師と生徒という大きな繋がりが切れてしまうことはすでに分かっている。

加えて、まだ先が見えない入試、これまでの生活との別れ、新しい生活の始まり、そのすべてに明るさと不透明さの両方が同居していて、白黒付かないまま日々が過ぎていく。ちょうど、高校入試を控え、先生と初めて会ったあの頃のような気分似ていた。

『……だから——私には答えなくてもいいけど、あの子を安心させてあげてくれませんか』

『——』

身体はすっかり床の温度に馴染んでしまつて、冷え切っていた。私が立ち上がったせいで動いた廊下の空気を暖かく感じて、初めてそれに気付く。

この先は、聞いてはいけないような気がした。きつと薦ちゃんも、私には聞かれたくないはずだと思う。それに、私が答えを得たいと願うのなら、私自身が先生に直接尋ねるべきことなのだから。

私は、三十分ほど図書室で時間を潰してから再び先生の元を訪れた。戻ってきたときには薫ちゃんはずでにおらず、先生はいつもと変わらない様子で机に向かっていた。

「藤倉か」

先生は片眉をやや上げてそう言うと、私に椅子を勧めてくれた。

学校では『藤倉』『先生』。そういうルールを作り、私たちは律儀にそれを守っていた。名前を呼ぼうと思えばいつでも呼べる——そういう余裕が生まれたからだろうと思う。そうでなければ、暇さえあれば名前を口にしていたくらいなのだから。

何も知らない先生は、「さっきまで薫が来ていたが」と私を見る。「一緒ではなかったのか」

「いいえ。……私はさっきまで図書室にいたので。会いませんでしたよ」

「そうか」

嘘はついていないけれど、少しだけ胸が痛んだ。途中までながら、話は聞いていたのだ。

眉間の皺を隠すように、先生は中指でメガネのブリッジを押し上げる。顔から手が離れたあとも、その眉は相変わらず寄せられたままだった。

「薫は、俺に対しては意地が——いや、意地が悪いなんてもんじゃない。あれは」

先生はどうやらよほど手ひどく薫ちゃんにやられたらしく、ため息を吐いた。しかし、仕草に反して表情は明るい。

「……度を超した友だち思い、か」

「ほんとにいい友達だと思ってます」

「だろうな。……いろいろお説教されたよ。君の名を出されては、私には勝ち目がない」

先生は大きく肩をすくめ、なんとか苦笑い——かなり苦み成分は高いけれど——という顔でぼそりと呟いた。そのまま、言葉が途切れる。

『あの子を安心させてあげてくれませんか』

尋ねるなら、今かもしれない。

先生が私を安心させてくれていないわけでは、決してなかった。でも、彼が何と答えてくれたのかは気になっていた。これ以上知らないふりをするのは苦しいし、だからといって聞かずにもやもやし続けるのも切ない。

私ってこんなにずるい人間だったんだと少しだけ開き直ったら、気が楽になってしまった。白々しくならないよう、自然に切り出してみる。

「私の名前って、どうして出たんですか」

「君を不安にさせるなと怒られた。私は野暮だから聞いてしまうが、受験か、卒業か、それとも私のことか？」

自分のことを『野暮』と言い切れる潔さと正直さは、先生ならではだろう。先生は私の思惑などには気付かない様子で、逆に尋ね返してきた。私は言葉に詰まったが、黙っていると悪い意味に取られかねないと気づき、慌てて口を開く。

「実は、よく分かりません。でも、先生のこと——先生のせいじゃありません」

「そうか？」

「それだけは、自信を持って」

大きく頷く私を、先生は柔らかく見つめている。

「受験して、卒業したら、いろいろ変わってしまうのかな、と思うことがあるんです。薦さんにはそういうところを見られているので、心配させてしまったのかもしれないです」

「私にも見せてくれて構わないんだが。……いや。私には、私にできる役割というものもあるんだろうな」

先生の声が多少羨ましげに聞こえたような気がした。先生自身もそう思ったのか、それとも違うのかは分からないけれど、笑いを逃がすように大きく息を吐き、首を振る。眉間の皺は消えていた。

「変わらないものもあるんだぞ」

「はい。……うん、そうですね」

「君は理解が早いが、すぐ納得しなくてもいい。悩むのもいい。……ただ、辛いときは俺に言うこと」

背中に乗っていたものが、ふっと軽くなる。その一言をもらったのに、先生も薦ちゃんも巻き込んでずいぶん遠回りしてしまった。

「はい」

先生は一言「よし」と言い、「では、ここからは『私』で」と前置きするとさらに続けた。

「入試の心構えは、努力すること。努力してきた自分を信じること以上だ。……だから、ここまでの道のりを信じてあと少し待つてくれ。きつと、君が安心できる毎日を贈ろう。これで、いいだろうか」途中から、『私』ではなくなっているような気がしたけれど、それでもいいや、と私は大きく頷いたのだった。

これまでの勉強にも恋にも、自信はそれなりにある。ならば、明日も、卒業してからも、幸せでないはずがない。

頬に熱がのぼるのが自分でも分かるくらいだから、多分顔は真っ赤になっているだろうと思う。恥ずかしいやら申し訳ないやらで、まともに先生を見つめ返すことができない。下を向いたまま、私もごもごと礼を述べた。

「いろいろと、本当にありがとうございます。あの——今後とも、よろしくご指導ください」

「君が安心したなら、今度は薦をなんとかしてやってくれ。いじめられるのは、もうごめんだぞ」

はつとして顔を上げると、先生は再び苦い顔で頭を掻いている。案の定、ずいぶん赤いな、と突っ込まれたけれど、そういう先生もほんのり桜色だった。

家に帰ったら、薦ちゃんに電話しよう。まず謝って、それからお礼を言って——話したいことが山ほどある。長電話の決意を固めつつ、私は家路を急ぐのだった。

【雪椿 返り咲き】砂糖は無しで

椿、と呼びかけようとして彼女の不在に気づき、俺は苦笑いした。藤倉が志望していた大学の入試はすでに終わってたが、手が空いたとは言っても、三年生は卒業式まで自由登校期間。藤倉が毎日ここに来るわけではない。なのに俺は、いつの間にか彼女がいることに慣れきっていたようだ。

ふと顔を上げると、紅葉の梢は丸裸で、乳白色の空が透けて見えた。

今年は厳冬で、サクラサクの知らせが飛び交うこの時期になっても分厚いコートが手放せない。その代わりに雪は少なく、こうしていつもの場所に出て、空を見上げることができている。

吐く息が白いのにも関わらず、かじかむ手でホットコーヒーを飲む自分が滑稽で、俺はまた口元を緩めた。すでに『ホットコーヒーだったもの』は冷え切って、ぬるいという範疇からも外れ始めている。

何となくそんな気分になった――それだけの理由で、白衣の上からダウンジャケットを羽織り、寒さを堪えながら立つ。我ながら非生産的な行動だと思う。ただし、何も生み出しはしないものの、これまで生み出されたものを噛み締めることはできるようだ。

早いもので、卒業式は来週だ。藤倉は卒業し、俺は教師を続ける。先生と生徒という縛りがなくなること二人の間が密になることはあれど、悪い方に転ぶことはないだろう。

彼女が卒業を迎えるからといっても、特別に何かしようとは考えていなかった。しかし、俺自身はイベントごとが苦手だが、藤倉はそうではないはず。彼女が喜ぶことがあるのなら何でもしてやりたいと思う。今度会うときには、希望を聞いてみようか。

背後の重い扉が鳴ったのは、ちょうどそんなことを考えていたときだった。

「そのダウン、かつこいいですね。それに、暖かそう」

振り返ろうとした俺の耳に、聞き覚えのある声が飛び込んできた。声の主、藤倉は小さく「よいしょ」と言いながら防火扉を開めると俺の隣へとやってきた。彼女も相当な厚着で、まるでモコモコとした冬毛の犬のようだ。

「流行遅れの型落ちモデルだぞ。君が言うほど格好良くはないと思うが」

「そんな言い方、ひどいですよ」

藤倉は非難の言葉を口にするが、その目は笑っている。どうやら形だけの抗議のようだが、ここは素直に謝っておいた方が良さそうだ。

「すまない。誉められて嬉しくないわけではないんだが、どうも慣れなくてな」

「ほんとに素敵だと思ったんですからね。その、何て言うか、私はかつこいいと感じたときにはかつこいいって言っちゃうと思うので早く慣れましょう」

慣れが必要なのは、俺よりも彼女のように見える。耳まで真っ赤にして、藤倉はぶつぶつと呟いた。

ややあつて、気が済んだのか、藤倉は俺を見上げると不思議そうに首を傾げた。

「ただゆ——先生、どうして今日は外なんです？ 準備室に行っても誰もいなかったので、まさかと思って扉を開けたら」

「それを聞かれると困るんだが。何となく、気分転換というところかな。特に理由はないと思う」

「学期末はいろいろと忙しいんですもんね。冷たい空気とコーヒー一杯で、効率が上がると思いますね」

「そうだな。俄然やる気になってきた」

「その調子です」

につこりと笑って応援してくれる藤倉の笑顔に、俺は先程までの

考え事を思い出した。ちょうどいい機会だから、尋ねてみよう――俺は、彼女の隣にしゃがみこんで顔を覗き込む。

「卒業式、何かしてほしいことがあれば言ってくれ。できるだけ善処するから」

藤倉は、政治家みたいですね、と一瞬顔をしかめた後、紅葉の木のあたりを見つめて何事か考えていたが、やがて俺のダウンジャケットの中の白衣を指差した。

「その第二ボタン、ください」

第二ボタンだなんて、何年ぶりに聞いただろう。俺の学生時代にもそんな恒例行事があったが、今の高校生たちにまで浸透しているのだろうか。

ただし、その古い言葉は、藤倉には似合うように思えた。彼女の口から聞くと、可愛らしく微笑ましいことのように感じるから面白い。

「そんなことなら、お安いご用だが。意外と保守的だな」

「古風と言ってください」

藤倉は笑いながら、器用にも口を尖らせた。

からかったお詫びにと、俺はさらに「何か他のものも付けようかと訊いてみたが、彼女はぶんぶんと首を振る。

「一つでいいです！ 先生は人気者だから、他の女の子の分も残しておかないと。多分、お安いご用だなんて楽に守りきれはしないと思いますよ。競争率が高くて」

「そんなことはないだろう」

こんな無愛想で未熟な教師が人気者だというなら世も末だ。もし万が一そうであるならば、皆もつと真面目に授業を聞いてくれてもいいだろうに、そんな心配すら感じたことがない。

よほど顔に出ていたのか、藤倉は俺を見ると可笑しそうに答えた。「先生はここ一年くらいで、支持率急上昇なんですよ。正確には、去年の今頃くらいから。……私が言つのもなんですが」

『私が言つのも』の意味は、説明されなくても分かる。彼女と俺

との関係が変化したのは、一年前の冬、バレンタインデーでのこと。つまり、彼女と付き合いだした頃から、みんなが俺を見る目が変わったということになる。

「でも、そんな中で私を——私を選んでくれたこと、嬉しいです」
藤倉はあやうく聞き流してしまいそうなほど小さい声でそう言っただかと思うと、次の瞬間には「だから！」と仕切り直した。

「きつと、スーツも白衣もボタン売り切れちゃいますよ。着替えを準備しておいた方がいいです」

「……君の話を聞いていると、生徒たちがまるで追いはぎのように思えるな」

「追いはぎの中には私も入ってるんですか？ ……とにかく、第二ボタンは予約ですから！」

照れを振り払うように言い切り、彼女は薄曇りの空を見上げる。

俺はしゃがんだまま、しばし考えた。

周りが変わったんじゃない。一年前から変化が始まったのなら、それは俺が、藤倉に変えてもらった結果なのだろう。恐らく彼女はその事実には誰よりも敏感なのに違いない——俺本人が自覚するよりも、もつともつと。

願わくばこれからもずっと側にいて、どんどん俺を変えていつて欲しいものだが、それを藤倉に伝えるのは今日ではない。それこそ、卒業式にでも告白してみようか。彼女の驚く顔は好きだが、さて——。

「コーヒー、冷めちゃってますよ。先生は寒くないですか？」

藤倉の声で、俺は我に返った。

「俺は寒——く、なくなつたな」

立ち上がってみたが、肌を刺すような寒さは確かにあるものの、冷えるという感覚は知らぬ間にずいぶん和らいでいた。

そこで、やっと思い当たった。なんとなくななどではなく、俺はきつと、彼女がやって来るのを待っていたのだろ。まるで小さな火

が灯るような優しさで、藤倉は心を温かくしてくれるのだ。

俺の気も知らず、藤倉はつれないことを言い出した。

「では私、お仕事の邪魔になるといけないので帰ります」

「そうか？」

呼び止めようと思える俺をよそに、彼女は校舎へ続く扉へと戻ると、そこで振り向くと、情けない声で訴えてきた。

「……あの、でも、もし引き止めてくれるなら、一杯だけご馳走してくれませんか」

俺が吹き出すと、彼女は恨みがましい目で俺を仰いだ。

「先生がいなかったら、こんな寒い日に外で立ち話なんてしません」
藤倉の一言は、俺を喜ばせるのには充分だった。しかし、顔も心も緩みっぱなしでいけない。少し気を引き締めなくては、この後の仕事に響きそうだ。

「奇遇だな。私もだ。……ではご招待するから、少し暖を取ってから帰りなさい。ちなみに今日は、俺はブラックにするぞ」

「あれ、砂糖は入れないんですか？　じゃあ私もそうしようかな」

彼女の先に立って重い扉を開けてやりながら、藤倉の笑顔を盗み見て、俺はある決意を固めていた。

今日の仕事が片付いたら、ボタンよりももっと彼女に似合う何かを探しに行こう。卒業式が終わったら、ボタンと一緒に渡すのだ。

彼女は、驚くだろうか――？

【雪椿 返り咲き】甘くて苦い

卒業式は明日だというのに、気持ちにはもうすでにぽっかりと穴が空いたようだ。

飾り付けの済んだ校舎は、まるで卒業生を押し出すためだけに存在しているかのような建物に見えた。三年間ここで過ごしていたのだから愛着が湧くかと思っただのに、お別れとなるとそんな風に感じるものなのだろうか。

この時期、他の入試組の生徒に比べたら、私は暇な方だった。

前期試験は、先生が卒業したのと同じ地元の大学の理学部を受けた。将来は、得意な生物を生かせるようにと考えてのことだ。そこには初め、生物の成績を上げて先生に褒められたいという不純な動機もあつただけれど、本人には気付かれてはいない。

後期試験も同じ学部に出願したが、改めて筆記や面接試験などはない。国立大一本に絞るというのは前々から決めていたので、あとは卒業式から数日後に行われる合格発表を待つばかりの身だ。

校舎が冷たく見えるのは、私のもって行き場がない心のせいかもしれない。私は、小さく首を振ってまた歩き出した。

生物準備室を二度ノックする。はい、という低い声がしたのを確かめてから、私はドアを開けた。

「失礼します」

ドアの向こうには、これまでに数え切れないほど見ているのに見飽きない風景が、いつものように広がっている。分厚い遮光カーテンに包まれた室内。ガスバーナー、金網、三脚台という先生独自のコーヒーマグズが、蛍光灯の青白い光に照らされていた。

大きなスチールのデスクに向かっていた先生は、一つ伸びをして私の方を振り返った。それから、立ち上がるとパイプイスを一つ出し、私に勧めてくれた。

私の顔を覗き込んだ先生は、意外そうな表情を浮かべていた。

「どうした、うかない顔だな。あれだけ解ければ大丈夫と、言った
だろう」

彼が言うのは、前期試験の自己採点結果についてだ。すでに、先生と答え合わせを行っていて、ボーダーラインは余裕で超えているだろうというお墨付きをもらっている。

違います、と言うと、「まあそうだろうな」と彼は当然のように答えた。粉砕済みのコーヒー豆をフィルターに入れながら、話の続きを振る。

「では、校舎を見納めているうちにぐつときたとても？」

「いえ。……学校に用事があるわけではなかったんです。でも、家でひとりでいろいろなことを考えているうちに、じっとしていられなくなつて」

「いいか、藤倉。……そういうときは、嘘でも『先生に会いに来ました』とでも言いなさい」

さりと教師らしからぬ発言をして、先生は顔色一つ変えずにメガネを直した。シルバーのフレームが、鈍く輝く。

私は先生の突然の攻撃に恥ずかしさで赤くなりながらも、内心は大いに励まされていた。最近の先生はこんな冗談も普通に口に出すようになつて、嬉しい反面、意表を突かれて少しだけ悔しく思うことがたびたびあった。せつかく構ってもらったのだからと、私は敢えて棒読みで繰り返してみる。

「先生に会いに来ました」

「こら、復唱するな」

意地悪しすぎたと思ったのか、先生は作業の手を止めて椅子に座り直した。そして、さっきまでよりも柔らかい口調で私に尋ねる。

「……それで、本題はいつたい何だ？」

「えっと——」

そこで、私は今日、何をしに来たのだろうかと改めて考えてみる。本当のところ、心を覆う寂しさの原因は、私自身が『生徒の私』に持っている複雑な感情のせいだと、充分理解しているつもりだ。

ただ、分かるのと、心に折り合いが付けられるのとはまた別の問題で――。

先生を想うとき、生徒という肩書きが壁になって泣いたこともあった。けれど、私が生徒であつたからこそ、先生と出会うことができて、今に繋がっている。その甘さも苦みも、捨て難い思い出なのだ。

「やっぱり、先生に会いに来たみたいです」

ありつたあの感慨を込めて、当たり前のことを私は先生に告げる。
「うん」

先生は静かに頷いて、私に続きを促す。はじめは怖いと感じていた切れ長の目が、今はこんなに優しい。今日は、それだけで涙が出そうだった。

学校での先生は、私との距離が近づいても度を越えた優しさは決して見せないようにしていた。もちろん、それは周囲に私たちのことを勘づかれないよう、人目を気にしてのことだ。

私も、学校では先生に必要以上に近づかないようにしていたつもりだ。生物準備室に来るのは、授業や進路、部活のことで相談したいことがあるときだけに絞っていたし、なるべく他の生徒や教師に見られないように訪れるようにもしていた。

ここ一年間、私たち一部となっていたその骨折りも、明日で終わってしまう。彼の生徒だった私は、明日でいなくなる。

「卒業すれば、今までよりも自由に会えるのは嬉しいと思ってます。

……でも、私、まだこんなに先生の生徒でいたいと思ってるのに、卒業しなきゃいけないんです。終わってしまうのがもったいないくらい、愛しい三年間だったんですよ。明日で終わっちゃうなんて、寂しすぎます」

「うん」

「それを、先生に聞いてもらいたくて――」

にわかに視界が暗くなつたかと思うと、熱くなりかけていた私よりも低い体温が頭の上に乗った。

顔に似合わず無骨な手が、私を撫でてくれた。その手は三度、四度と頭を滑ると、下ろしたままの私の髪のを束を弄び、去って行く。「三年で、ずいぶん髪が伸びたんだな。似合う」

先生はそう言うと言を緩めた。いつの間にか、ごく自然に笑顔が出るようになっていた先生。その表情、大きな背中を目で追うようになったのは、一体いつからだだったろう。

私を見つめたままではばく黙っていた先生は、やがて考えがまとまったのか、一つ深呼吸をすると少し身を乗り出して口を開いた。「いいか。……三月いっぱい、まだ君は『高校生』だ。四月になつても、私の教え子であること、それに、大事な人であることにも、変わりはない。君と俺は、明日が終わつてもずっと続いていくんだ」先生の目は恐ろしいほどに真剣で、熱い。ゆっくりと諭すように――まるで授業で話すときのように、一つ一つ言葉が重ねられていく。

「あ、ありがとうございます。でも」
私を遮って、「分かるさ。しかし、私は困る」と先生は腕を組んだ。

「君に卒業してもらわないと、いろいろな問題がいつまでたつてもクリアできないだろう。君の思いももつともだが、私にとっては、椿が生徒だと不都合なことばかりなんだぞ」

「え？」

「君は今さら説明しなくても知っているだろうが、俺にも我慢の限界はあるんだ。そして、その限界はかなり近いぞ。四月になったら覚悟しておくように。これまでに溜まったツケの分、嫌というほど――嫌と言つても連れ回すからな。寂しいと思う余裕など、与えてやるものか。……だから、安心して卒業しなさい。以上だ」

私はすっかり気圧されてしまい、しばし呆然としていた。これほど熱っぽく心の内を吐き出す先生の姿は久しぶりだった。そして、時間が経つにつれて、今度は喜びが込み上げてくる。

「ありがとうございます。ツケをちゃんと払うには、まずは卒業し

なきや、ですよね」

「そういうことだ」

きつと、先生の言うとおりだ。

彼の目は、春を見据えている。四月になれば、先生は私にたくさんものを次々と与えてくれることだろう。密度の濃い日々が、飛ぶように過ぎていくのだろう。

そんな幸せを目前にして、私は足踏みしていいのだろうか。私も早く明日からのことを考えないと、先生に置いて行かれてしまうのではないだろうか。

試しに、合格発表よりもちよつと先のことに目をやってみる。

「そうですね。とりあえずは、ちゃんと先生の後輩になれるといいんですけど」

「充分合格圏内だ。心配ないさ——つと」

先生は何故か突然咳き込むと、いつもよりもやや高めのトーンで続けた。

「まあ、万が一のときには、永久就職という手があるしな」

それは誰がどう聞いてもプロポーズだったのに、かなりの間、私は言葉の意味を飲み込むことができずに固まっていた。それにも関わらず、先生は私を見つめ、穏やかに微笑んでいる。

我に返ったときには、卒業式や入試の結果のことなど、どこかへ吹っ飛んでしまっていた。許容範囲を超えた問題に、私はといえば、間の抜けた答えを返すだけ。

「……理雪さんのところに？ それって、結婚を前提にお付き合いするってことで、いいんですよね」

「繰り返すな、照れくさいだろう。……俺はずっと考えていたんだが。そんなに驚くことか？」

「お、驚きますよ！」

半ば悲鳴とも聞こえかねない私の声にも、彼は動じることなどな

かった。むしろ、その顔が見たかつたんだと本当に嬉しそうに笑う。
「だって、まだ先生はうちの親にも紹介してなくて！」

「家庭訪問に行っただろう？」

「それは学校行事なんだから、当たり前じゃないですか！」

つい声が大きくなってしまふ。それに比べ、それを軽々と交わす先生は余裕の表情で、私を余計に焦らせる。

今さらになつて、目の奥が熱くなり始めていた。

先生と一生一緒なら、想像もつかないほど素敵なんだろうな——私も、本当は心のどこかで、ぼんやりとした覚悟のようなものは持っていたのだと思う。ただ、先生のように、それを言葉に出す勇気ときっかけがなかった。

それにひきかえ、八つ年上のこの人は、人生を左右するような話の直後なのに、こんなにも落ち着いている。まさか、高校生活の最後の最後に、彼が大人で私が子供だということをこつとも思い知らされることになるとは——。

今、子供の私にできる精一杯は、先生の気持ちに素直に答えることだけだ。

「分かりました。……そんなことを言われたら、本気にしますよ。いいんですか」

「結構。それなら、俺も本気で応える」

先生は言い切ると、窮屈そうに背中を曲げて、顔の高さを私に揃えてくれた。今度はさつきまでとは正反対の、まるで挑みかかるような強い視線が私に降り注いでくる。

「君は昔、自分が椿になれるのは俺の隣でしかあり得ないと言ったな」

「はい」

「それを思い出して、決めたんだ。それなら俺は一生、椿の傍らで溶かされていきたい、と。俺を溶かすことができるのは、君だけだからな」

彼は、言い終えた後も私から目を逸らさなかった——少年のよう

ないたずらっぽさを乗せた瞳だった。その心はすでに凍り付いた根雪などではないということに、先生は気付いていないのだろうか。

それなら、私が彼に伝えよう。

私はいまだ同じ高さにいる先生に素早く近寄り、目を丸くした彼とそつと額を合わせた。さっき誉められた私の髪と、先生の髪とが触れて、微かに音を立てる。

「……溶かされてるのは私の方です、理雪さん」

【雪椿 返り咲き 〵おわり】

【雪椿 返り咲き】甘くて苦い（後書き）

「雪椿 返り咲き」はこの話で完結です。

ここまで二人を見守って下さって、ありがとうございました。

三年かかってやっと恋人らしくなった——でしょうか。
楽しんでいただけたなら嬉しいです。

さて、このあとは番外編がいくつかありますので、もしよろしければもう少しお付き合い下さい。

【番外編 1】メール（前書き）

この「メール」は、本編を執筆する前にサイトに載せていた、プロトタイプのような作品（とっていいの、疑問ですが）です。逆に言うと、このやりとりが「雪椿」本編のもとになっています。本編と照らし合わせながら「このメールはあのエピソードのときに送ったのかな？」などと想像していただけると嬉しいです。

「番外編 1」メール

《1・春：始業式》

2005/04/05（火） 20:01

From: 藤倉椿（携帯）

「件名」：いよいよですね

.....

私もいよいよ明日から受験生になってしまいます…。

ところで、クラス分けて先生はもうご存知なんですね。

先生は三年の担任になりました？

私のクラスの担任に、なんてことはないですか？

世の中そんなにうまく行くわけないとは思いますが、ちょっと期待…。

2005/04/05（火） 20:04

From: 若柳せんせい

「件名」：Re: いよいよですね

.....

高3なんてあつという間だぞ

三学期はほとんど無いに等しいからな

クラスと学担については明日になれば分かることだ

陰ながら、出来る限りサポートはするから一年間頑張りなさい

2005/04/06（水） 08:12

From: 藤倉椿 (携帯)

「件名」: きゃー!

クラス分け今見ました!

私、先生のクラスじゃないですか!

昨日教えてくれれば良かったのに…。

でも嬉しいです!

よろしく願います!

…お手柔らかにv

2005/04/06 (水) 08:17

From: 若柳せんせい

「件名」: Re: きゃー!

…少し落ち着きなさい、嬉しさはよく分かったから

私も嬉しくないわけではないしな

こちらこそよろしく

2005/04/06 (金) 08:18

From: 若柳せんせい

「件名」: 補足

…それと最後の一行は無理な相談だ

甘えても無駄だぞ、諦めなさい

2005/04/06 (水) 08:19

From: 藤倉椿 (携帯)

「件名」：R e：補足

そう言われると思いましたけどね…。

《2・夏：ある嵐の夜》

2005/07/01（金） 19：07

From：藤倉椿（携帯）

「件名」：怖いです

今、家の辺りが土砂降りで屋根がすごい音してます！

先生はまだお仕事中ですか？

学校も雨、ひどくないですか？

お帰りのころには雨が止んでるといいですね。

きっとこんなに降つてるとワイパーの効果ないですよ。

私、昔から雷って苦手なんです。

テレビの音量を上げてみましたが、お構いなしにゴロゴロ音が聞こえてきます。

さつきはどこかに落ちたみたいだったし…。

早く収まらないかなあ。

2005/07/01（金） 19：12

From：若柳せんせい

「件名」：R e：怖いです

こっちは小雨だが、確かに遠くから雷鳴が聞こえる

雷は自然現象だから逆らえないな

我慢して通り過ぎるのを待ちなさい

怖さは家族と話するなどして紛らわせてはどうだ

冷たいものでも飲んで気分を変えするのも効果的だと思う

現在は生物準備室でテストの採点中、明日返却だからお楽しみに
暗い中、雷光で剥製やホルマリン漬けの生物標本が浮かび上がるの

もなかなか乙だぞ

自分がマッドサイエンティストのような気になってくる

2005/07/01(金) 19:14

From: 藤倉椿(携帯)

「件名」: わざとですよね

- - - - -
お仕事おつかれさまです。

ホルマリン漬けとか、絶対怖がらせようとしてますよね。

先生ってたまにすごくおとなげないときありませんか？

そういう意味だといつでもマッドですよ！

雷は相変わらずです。もうやだ…。

誰かと話そうにも父はご存知のとおり単身赴任ですし、母は夜勤で
出かけちゃいました。

とりあえず気分転換にアイステイーを淹れてみます。

テストの結果どうでしたか？

私はちょっと自信あります。

2005/07/01(金) 19:25

From: 若柳せんせい

「件名」: Re: わざとですよね

- - - - -
すごい雨になってきた、雷も確かにひどいな
テストの結果は明日まで秘密だが、頑張ったなどだけ言っておこう
残業終わったので今から藤倉の家に寄る
アイステイは二人分淹れておいてくれ

2005/07/01(金) 19:26

From: 藤倉椿(携帯)

「件名」: 待ってます!

- - - - -
だから先生大好きなんです!

2005/07/01(金) 19:28

From: 若柳せんせい

「件名」: Re: 待ってます!

- - - - -
十分元気じゃないか
まあいい、待っていなさい

《3・秋・文化祭》

2005/10/01(土) 16:39

From: 若柳せんせい

「件名」: 助けてくれ...

- - - - -

誰だ、こんな企画を考えたやつは
女装コンテストなんて不健全なもの、文化祭にはふさわしくないだ
ろう

嫌がらせに決まってる

まさか君も私に一票入れたんじゃないだろうな

私はそんなに生徒に嫌われてるのか…

もう帰らせてくれ…

2005/10/01(土) 16:41

From: 藤倉椿(携帯)

「件名」: ファイトです!

本番まであと20分くらいですね。

実は私も先生に入れちゃいました。

ごめんなさいm(_____)m

でも、嫌いだからじゃなくて人気があるから票が入ったんですよ。

先生のファン結構多くて、私なんかいつもハラハラしてるんですか
ら…。

チャイナドレス姿早く見たいです!

きつと似合うんだろうな。

ここまできたら覚悟を決めてグランプリ目指しましょう!

頑張れ、教師代表!!

2005/10/01(土) 16:45

From: 若柳せんせい

「件名」:

やっぱりか、他人ごとだと思って

応援されても全く嬉しくないな

どっちにしても私が乗り気じゃないのなら結果的には嫌がらせだろう
しかし女物の服というのは動きにくいな…

舞台裏に来说いと言われたから、また後で

2005/10/01(土) 16:46

From: 藤倉椿(携帯)

「件名」: 出陣!

- - - - -
いつてらっしゃい!

2005/10/01(土) 17:57

From: 藤倉椿(携帯)

「件名」: 祝、かな?

- - - - -

不本意とは思いますが、みごと優勝おめでとございます!

恥じらってる様子もポイント高かったです。

ていうか、生徒が主役の学祭なのに先生がおいしいところ持って行っ
ちゃダメですよ。

先生…じゃなくて「ユキちゃん」、普通に美人でした。

なんか女の子よりかわいいのはズルいかも。

イヤでしょうけど、あとでお祝いしましょうね!

2005/10/01(土) 18:19

From: 若柳せんせい

「件名」: Re: 祝、かな?

.....
やつと着替えられた

何が祝だ、源氏名で呼ぶな
後で覚えていなさい

2005/10/01(土) 18:20

From: 藤倉椿(携帯)

「件名」: Re: Re: 祝、かな?

.....
私が優位に立てるの、こういときだけですから!

《4・冬:入試に望む》

2006/01/22(日) 07:31

From: 藤倉椿(携帯)

「件名」: 緊張しますね...

.....
今日が終われば、とりあえずは一段落です。

朝から胃が痛いのが気になりますが頑張ります。

昨日の晩ご飯のカツのせいでもたれているのかもしれない。

そういえば、恥ずかしいんですけど昨日は試験場の中で転んじやつ
たんですよ。

縁起が悪いなあ...

じゃあ、行ってきます！

2006/01/22(日) 07:33

From: 若柳せんせい

「件名」: Re: 緊張しますね…

今日は理科も受けるんだっとな

おいしいコーヒーをご馳走するから、もし帰りに寄れるのなら家に
来なさい

一緒に自己採点してみよう

君がずっと努力してきたのは私が保証する

それは転んだぐらいでどうにかなるものではないはずだ

心配せず普段どおりにできれば大丈夫、健闘を祈っている

2006/01/22(日) 07:52

From: 藤倉椿(携帯)

「件名」: 勇気出ました

バスに乗りました。

このバス、こういう日に限って遅れてくるんですよ！

それはともかく、励ましありがとうございます。

先生のメールをお守り代わりにします。

なんかいつもいつも頼ってしまってますみません…。

大学生になったらもっと大人っぽくなれるように頑張ってみます。

でもまずはセンター試験！

目標点以上取れたらごほうびって約束覚えてますよね？

2006/01/22(日) 07:55

From: 若柳せんせい

「件名」: Re: 勇気出ました

八歳も年上で頼られなかったら私の立場がないだろう

無理に背伸びしなくてもいいから、気にせずどんどん頼ってくれ
意外と余裕がありそうだな

約束はちゃんと守るぞ、だから頑張ってください

2006/01/22(日) 16:20

From: 藤倉椿(携帯)

「件名」: 終わりました!

疲れました…。

今から先生の家につかがつていいですか?

結構いい線いつてる予感がします!

ごほつびもらえるかな?

2006/01/22(日) 16:24

From: 若柳せんせい

「件名」: Re: 終わりました!

お疲れ様

そういえば胃痛は治ったのか?

コーヒーは胃に悪そうだから他のものにするか
何か希望があれば教えてくれ

ずっと待ってるからのんびり来なさい

ごほうびは出来次第だが、内容については二人でゆっくり考えよう

2006/01/22(日) 16:20

From: 藤倉椿(携帯)

「件名」: 実は

気が早いけどごほうびはもう決めてたりします。
それでは後ほど!

2006/01/22(日) 16:24

From: 若柳せんせい

「件名」: いったい何だ?

まあいい、転ばないように気をつけてな

《5・そして再び春:卒業式》

2006/03/03(金) 07:46

From: 椿(携帯)

「件名」: 今日でしまい

あっという間に卒業式になっちゃいましたね。

今日は理雪さんの姿を目に焼き付けます。

もう毎日は会えないと思うと寂しいなあ…。

なんだかもうすでに泣きそうです。

今からこの調子じゃ本番どうなっちゃうんだろう！

理雪さんも、緊張してみんなの名前を読み間違えたり噛んだりしないで下さいね。

2006/03/03（金） 07:49

From: 理雪さん

「件名」: Re: 今日でおしまい

.....

三年間無事に過ごしたからこそその卒業だ

そんなことは言わずに誇りに思いなさい

大学生になるのだから、会いたくなったら毎日でも家に来たらどうだ

まあ俺は泣かないが、涙が出る気持ちはよく分かる

ハンカチは多めに持っていくつもりだから安心して泣きなさい

そういえばご両親は式には来るのか？

2006/03/03（金） 07:51

From: 椿（携帯）

「件名」: そんなこと言われると

.....

余計に泣けちゃいます…。

ハンカチは当てにさせてもらいますね。

それと、忘れているかもしれないですけど白衣の第二ボタンは私に下さい。

ずっと前から予約してあったんですから！

今日は久々に父もこちらに帰ってきているので両親とも来ますよ。
それがどうかしたんですか？

2006/03/03(金) 07:58

From: 理雪さん

「件名」: Re: そんなこと言われると

諸々了解した

泣き顔はこしばらく見ていないから、期待してるぞ
ではまた後で、教室で

2006/03/03(金) 14:16

From: 椿(携帯)

「件名」: 今家に帰ってきました

信じられない!

朝変なこと聞くから何かする気かなとは思っていましたが...。
挨拶は挨拶だけど、いきなりあんなこと言わないで下さい...。
担任としての話だと思い込んでたから、両親とも完全に血の気が引
いてましたよ。

...すごく嬉しいですけど。

これで一応親公認の仲ですね!

三年間ありがとうございました。

そして、卒業してもよろしくお願いします。

大好きです、理雪さん!

2006/03/03(金) 14:21

From: 理雪さん

「件名」：Re：今家に帰ってきました

さすが、いい泣きっぷりだったな

ご両親にはお騒がせしましたとお伝えしてくれ

しかし、卒業式に彼氏としてご挨拶をしようというのはずっと前から決めていたんだ

結果的にはお許しをただけてほつとした

三年の間、椿には俺のほうがいりいなことを教わったな

本当にありがとう

こちらこそ末永くよろしく

2005/03/03（金） 14:22

From：椿（携帯）

「件名」：今見たら

第二ボタンを入れてもらった袋に何か入ってるんですが、これって…。

2006/03/03（金） 14:23

From：理雪さん

「件名」：気づくのが遅いぞ

それが俺の気持ちだ

サイズは合うと思う

デザインが気に入るといいんだが…

さて、今度は俺の両親に会ってもらわなくてはな

終業式が終わったあたりにでも俺の田舎に行かないか？

〔番外編 2〕夏影（前書き）

椿が高校三年、夏の小話。語り手は理雪です。

「番外編 2」夏影

終業式の校長あいさつは、県大会ベスト8をかけて試合に臨む野球部への激励と、高校生らしい過ごし方をするようにとの言わば『お約束』で締めくくられた。明日から夏休みという開放感に溢れた空気が朝から校内を満たしていて、ホームルームをしている教室の中もなんとなく弛緩した雰囲気のまま、今日のスケジュールは終了した。

午前最後の時間帯だ。気付かぬうちに季節は確実に真夏へと進みつつあり、校舎の日陰もずいぶん狭く、短くなっていることに今さらながら驚く。蒸し暑くなる兆しをひしひしと感じながら、俺はなじみの場所でぬるくなり始めた風に当たっていた。

そこへ蝉の声以外の音が聞こえてきて振り返る。ちょうど防火扉が押し開けられるところで、やがて藤倉の顔がのぞいた。

「先生、お疲れさまです」

現れた彼女は、非常階段にすんと腰を落とす。どうも生気が感じられないというか、心ここにあらずといった面持ちに、俺はたまらず「どうした？」と尋ねた。

「何がですか？」

「君の方が『お疲れ』のようだな」

少し何事かを考えると、藤倉は俺を見上げて「そんなことないですよ」と呟いた。互いが立つたまま世間話をするのが常であることを考えると、今日はいつもと少し距離がある。短い言葉にも憂いの色が浮かぶところを見ると、彼女の身に何かがあつたのは確かしい。

しかし、元気がないのなら悲しそうにしていればいいのに藤倉はそうはしない。彼女は誰かが聞いてやらないと胸の中ものを吐き出せない性分だから、心に積み上がったものに潰されるのではと心配になることがある。気付いたときには機会を見て少しずつ崩して

やることにしてはいるが、憔悴している藤倉を見るかぎりでは、今日は引き出す言葉が多そうだ。

俺は階段へと歩み寄り、より近くから話しかける。

「君は自分で思っているより分かり易いんだろうな」

「いえ、大丈夫です」

眉を八の字にして、藤倉はごまかすように微笑んだ。

「しかしな。そんな顔を見せられるのは、ある意味泣き顔よりも辛いものがあるぞ。……いや、そんなことが言いたいわけではないんだ。心配事を、聞かせてもらうわけにはいかないのか」

「先生に話せることなのか、正直言つとわかりません」

意外な答えに俺が顔をしかめると、彼女は慌てて「校則に違反しるとか、そういうことではなくて」と付け加えた。

「やっぱり、言います。……最初は、今日はここに来るのやめようと思っただけです。きつと、いい顔はできないだろうなと思っただけでも結局ここにいるということは、やっぱり聞いて欲しかったのかもしれない。甘え、ですよ」

本題に入らぬまま、藤倉は乾いた唇を舐めたり両手を何度も組み直したり、落ち着かない様子で沈黙を続ける。いったい何を言おうとしているのか見当もつかないが、切り出すのにはかなりの決意が必要らしい。

そうこうしている間に昼休み開始を知らせるチャイムが鳴り始める。本来であれば夏休みの開始を告げる鐘の音を合図にしたように、彼女は大きく息を吸った。

「ホームルームが終わって帰ろうとしたら、知らない男の子が待つてて——好きです、と言われました。その人、去年の橙高祭から私のことをいつも見てくれてたのに、私は今日まで全然気付きませんでした。付き合ってくださいって言われましたが、断ることしかできませんでした。……断られた側の方が絶対に辛いのに、私がこんなに落ち込むのも失礼だと思います。でも、私は」

藤倉はそこで言葉を切り、俺を見た。

去年の橙高祭、演劇部では彼女と薫が主役を演じた舞台が行われ、まずまずの評判を得た。男役の薫には女子のファンが少なからず増えた、薫自身が話していたのを思い出す。ヒロイン役の藤倉には男子のファンが付いたのに、と薫は苦笑していた。

考えてみれば、彼女の隣に八つも年が離れた俺がいることの方がイレギュラーなのであって、普通の高校生は学生どうしの恋愛を楽しんでいるものだろう。藤倉に思いを告げた生徒だって、俺が絡んでいるなど考えもしないはずだ。

普段から人を突き放すような言葉は決して言わない彼女だから、知らない男子とはいえ自分への好意をはね除けるのは辛かったのではない。それでも、思いを貫きたい人が藤倉にはいる。そしてそれは俺自身だと、彼女の目は告げている。

俺は眼鏡をずり上げると、その手をそのままぐつと伸ばして彼女の頭に乗せた。

「その生徒と同じように、藤倉も正直に心の内をぶつけたんだろう？」

こんなとき何と言って元気づけたらいいのか俺にはまだよく分からないし、何より下手な励ましでより彼女を傷つけてしまうのではないかという不安もある。しかし、万能の呪文などこの世には存在しないから、彼女に向ける言葉は俺自身が試行錯誤して見つけて行かなくてはならない。それが、彼女の隣を歩む自分のなすべきことだ。

藤倉は頭の上の手を一瞥した後、溜め込んでいた空気を深く吐き出してうなずく。明らかに緊張がほぐれ、強ばっていた肩が下がった彼女に、俺も心底ほっとして語りかけた。

「それなら、落ち込むのはいいが、後悔はしなくてもいいんじゃないのか。……それから、私の前だって、迷ったり悲しんだりしたっけ。それをなぐさめるのは私の特権だからな。ただ、そういうことが私は下手なんだ。なにか、君にプラスにはたらくことができればいいんだが」

しばらくの間、藤倉は俺の手と顔とを見比べていたが、やがてたどたどしくも笑みを浮かべた。

「大丈夫です。充分にプラスです。やっぱり、ここに来て良かった。……あの、手を」

さつきと同じ『大丈夫』という言葉を使ったものの、表情は先ほどとは革命的に明るく変わっている。指摘されて俺が手をどけると、藤倉は勢いを付けて立ち上がった。淀んでいた非常階段下の空気がふわりと動く。これで、やっと普段通りの距離。いつもの調子を取り戻せたのか、彼女は俺を見上げてきっぱりと言い切った。

「あの人に言ったことには悔いはありません。胸を張れます。……でも、好きだと言われたこともそれを断ったことも、大事に覚えておこうと思います」

「それでいいさ」

俺が頬を緩めると、彼女は今度こそ柔らかく笑う。数分前まで涼しかった日陰には、すっかり真上に昇った太陽がじりじりと照りつけ始めていた。痛いほどの光を避けるには、海か山に逃げるのがいいだろうか。

「では、励ましを一つ。青と緑、どちらが好きだ？」

「え？ ……どちらかというと青のほうが」

「決定だな。夏休みは海を見に行こう。しかし、受験勉強も忘れずに」

「はい！」

逃げるのも、彼女となら悪くない。憂いなく微笑む藤倉を見守りながら、俺は夏休みの計画を立て始めていた。

「番外編 3」ゴシップの実（前書き）

語り手は鳶。高2のバレンタイン、その後の小話です。
彼女は本当に椿のことが大好きです。

その想いを高校卒業後まで引きずることになりますが、それはまた後ほどのお話。

「番外編 3」ゴシップの実

「若にチヨコ投げ捨てられたっていう先輩の話？」

「そうそう。なんでも、若が先輩の手から叩き落としたって」

「えげつないね、若。見損なった」

——えげつないのはあんたの方だよ、と心の中で突っ込む。

練習が終わったとたん、部室の向こう側からやけに大声の内緒話
が私の耳に届いた。クールな振りをしていても裏では何を考えてい
るか分からないとか、女生徒を手ひどく振ったとか、いかにも生徒
が好みそうで女性週刊誌的な情報の数々が垂れ流されていく。

まな板に上っているのは『若』こと若柳理雪、生物教師。彼は生
徒間での評判はおおむね良く、かくいう私もここ一年ちよつとの間
にどちらかといえば『若支持派』に傾いている。しかし、よく思っ
ている生徒だけではないから、アンチ的な噂も飛び交ってくるのは
仕方がないと思う。ましてバレンタイン直後だから、考えたくは
ないが、思いが通じなかったものは心ない噂を流すかもしれない。
もてる人間は周囲の理不尽な悪意に晒されやすいのだ。

高校で迎えるバレンタインは二度目だが、確か昨年この時期も
同じような噂が飛び交っていた記憶がある。よく飽きないものだと
ため息を吐きながら、私は台本を鞆にしまい込んで勢いよくチャッ
クを閉めた。

今の話は当然、椿にも聞こえたはず。私は、隣で荷物をまとめて
いる親友——私を若ファンに取り込んだ張本人——の様子をちらり
と盗み見た。若ほどの背はないが女子としては大きい部類の私と、
小柄な椿。頭半分ほどの身長差で、うつむかれると軽く噛んだ唇し
が見えない。

椿が若に寄せる思いを知っているというだけの私でさえこんなに
居心地が悪いのだ。彼女の気持ちは察するに余りある。

案の定、椿はそそくさと後片付けを終えると、羽織ったコートの

ボタンも留めずに「お先に失礼します！」と部屋を出て行ってしまった。私は少しでも周りを威圧しようとわざと足音を立てながら、彼女を追って部屋を出た。

「椿！」

呼びかけに、椿は足下を見つめたまま、振り向かず立ち止まって私を待った。横に並び、「あんな無責任な話まさか本気にしないでしょ？」と尋ねる。

「信じてないよ。聞かされるのはちょっと辛いけど、あれ、嘘だしね」

椿は感情を抑えた低い声でそう答えた。オトナの対応である。

むしろ、下唇を突き出した私の方が不機嫌そうだった。以前は正面切って若をかばったりはしなかったことからすれば、何だかんだ言っても私の若びいきはどんどん進行している。ただ、部員たちへのこの怒りは、若の悪口を言ったことよりも、椿の片思い相手を彼女の目の前で悪人にしたことに向けられたものではあるのだが。

「三年生の置きみやげだよ、あのでたらめ。自由登校だからって言ったもん勝ちってのはずるいね。……そんなヤツじゃないよな、若は」

デマに違いない、と私は鼻息を荒くした。どうせあと一月半も経って、新年度が始まれば忘れられるのだろう。とはいえ、好きな人の悪口を聞かされて平気でいられる人間なんていないはず。そう思っ

て注意深く見つめていると、椿はようやく顔を上げた。
「我慢するしかないよ、みんなああいう話が好きなんだから。クールなふりっていうところ、ちょっと分かるし」

やっと見えた表情は、意外にも笑顔だった。明るく言った椿に、私は「実は優しい？」と耳打ちした。何を思い出したのかは知らないが、彼女の顔がぱつと赤らむ。

よくよく若を見ていれば、最近はいぶ丸くなり、冷たさを感じ

ることは前ほどはなくなってきた。だから、彼と茶飲み友だちである椿ほどの実感はないが、私も若のクールさは見かけのみなんじゃないかと勝手に思っている。

「熱でも出た？」

紅色がなかなか退かない頬に気づき、私はからかうように彼女の頭に手をやった。そのまま額に手のひらをずらしたところで、椿はなぜか潤んだ瞳で私を見上げた。

「……同じ」

「何が？」

椿は振り向いて廊下を見渡す。ちょうど、先ほど噂話をしていた集団が部室から出てきたところだった。彼女らはいまだに若の話題を引きずっているようで、チョコがどうか先輩がどうか賑やかに言いながら私たち二人の横をすり抜けていく。

それを見送りながら、椿は鞆から携帯電話を出すとメールを打ち始めた。どうして今メールなんかを、と私が不思議に思いつつも待っている、彼女はディスプレイをこちらに示した。見るということだろう。

「何？」

そこには、実に簡潔な報告が表示されていた。

じつはバレンタインの日、先生に告白したんだ

「ええええつ」

確かに、それは校内じゃ口には出せない。

予想外の文面に私が上げた声は、すでに無人になっていた長い廊下に響き渡った。こんなときに発声練習の成果が出てもうるさいだけだ。私は慌てて口を押さえると、驚きを目で訴えながら聞き返す。

「なに、どういうことなの！」

「ごめん。いつ言ったらいいのかわからなくて、時間ばかり経つて」

「で！ 結果は！」

噛みつかんばかりの勢いで尋ねた私に、椿は恥ずかしそうに「付き合うことになったよ」と言っ て目尻をぬぐった。『付き合う』ってことは、椿だけじゃなくて、若も彼女のことが好きってことで――。

「そのとき、今みたいに頭を撫で――」

「良かった！」

私は鞆を取り落とし、彼女を抱きしめていた。

思えば、若の刺すような鋭い眼差しが温かさを帯びたのは椿のおかげだったのだろう。穏やかな表情を見る機会が多かったのは、私の隣に彼女がいたからだ。考えてみればすぐ分かりそうなものだが、私には若の感情の機微を読み取れるほどの観察眼はなかった。

私はそつと彼女から離れると、「すごいね、愛ってのは」と呟いた。椿は、私にはどうにも似合わない台詞にぷつと吹き出す。その目にはもう光るものはない。

「ありがとう。……でも、『愛』って」

「愛だよ」

似合わないのは百も承知だったが、実際それが正直な感想だった。椿から若への思いを告げられたのは一昨年の秋で、私は当時もさっきのように彼女を抱擁していたはずだ。消え入りそうな声で『先生の彼女になりたい』と言っていた椿を放っておけなくて、支えたいと思っ たら体が勝手に動いたのだ。それが、今はどうだろう。彼女は一人でしつかりと立ち、勇気を奮い、そして愛しい人の心を掴んだ。片思い――しかも、教師と生徒という茨の道――が椿を強くしたのだろうか。

「うまくいかなかったと思ってたわけじゃないんだ。ただ、あんたがいゝろいと苦しんでたの見てたから、びつくりしてさ。……ほんと、嬉しいって絶叫したくらい嬉しい」

「私も言えて嬉しい。内緒にするの嫌だったから。……あ、もちろん私、薦ちゃんのことも大好きなんだよ」

思わず、私も吹きだしていた。椿のどこが好きかって、気を使っているわけではなく本心からこういう言葉が出るところが好きなのだ。私は困り顔の椿を放ったままでかなりの時間笑い続けていたが、やがて彼女の肩を掴んでぐらぐらと揺さぶった。

「ありがと。あんたってほんと可愛いね。あたしも椿のこと好きだわ。……今日はこれから時間ある？ みつちり聞かせて欲しいな」

「ちょっとやそつとじゃ話しきれないほどいろいろあったんだよ？」
笑われた仕返しか、椿は珍しく意地悪そうに口を尖らせる。

「大丈夫、徹夜してでも全部聞く」

そうと決まれば早く行こう、と彼女を促した。

うなずいた椿は携帯を元通り鞆に入れると、今度はちゃんとコートのボタンを留めて一歩踏み出し、歩き出す。その足取りの、なんと軽やかなことか。

若が一番、私はその次で充分だ。こんなに幸せそうな椿をずっと見ていられるのなら。

〔番外編 4〕フルコース（前書き）

本編では書きそびれてしまった修学旅行のお話のかけらです。

サイトの8周年の記念企画で、クロスオーバーものを書きました。
この虫好きの男子生徒のお話が今サイト（と、ツイッター）で書いている「虫めづる」です。

虫好き男子と普通の彼女の恋愛もの（の、はずです）。

「番外編 4」フルコース

週末は遠くの街を選んで遊びに行くのが、最近の定番になりつつある。見知った顔のない場所は初めのうちは慣れなかったものの、今では先生と一緒に新しい発見をすることが嬉しくて仕方がない。今日も、車で数十分ほどのとある街を、私と先生は並んで歩いていた。

「京都で昆虫採集、ですか？」

「ああ。珍しいのが採れたら報告する、と」

先生は「ああまで気合の入った虫好きは、久々だ」と付け加えた。相変わらずのクールな表情は崩れていないが、感心と呆れが半々といったところか。

若柳先生は、生物部の顧問をしている。部員数はそう多くないものの、個性的な生き物好きが集まったと先生は表現するが、要は『濃い』メンバーが揃ったらしい。その中の昆虫担当——先生がそう表現した——であり、修学旅行を控えた二年生が、冒頭のように言っていたというのだった。

「いいんですか？ 自由行動で虫を採るって」

「まさか本気ではないだろう。『昆虫採集』で、旅行計画が通るとも思えないが」

先生はそう言うが、去年の私の修学旅行のことを思い出すと、計画通りに回らない人たちも結構いた。教師にばれないような手は打つてあると、友達は無言でいたものだ。もっとも、私も回った場所が場所なので大きなことは言えない。

「でも計画は計画なので、ええと」

みんなこっそり計画外の行動をしていましたとはさすがに暴露しにくく、私は口ごもった。先生は察して頷いてくれた。

「言いたいことは分かるぞ。……まあいい。そういえば藤倉は去年、どこを回ったんだ？」

「あの——いろいろです」

「歯切れが悪いな」

先生は、わずかに眉を動かすと、私を見下ろした。

「言いたくない事情でもあるのか」

「いえ、そういうわけじゃ」

「そうか」

しまった、と思ったときには遅かった。話の流れ上、これでは私が修学旅行でよからぬことをしていたように見えてしまう。

しかし、一度拒んでしまったため、打ち明けるタイミングをすっかり逸してしまった。変に躊躇せずに、最初に白状してしまえば良かったのに。まさに、後悔先に立たずだ。

先生は、変わらぬ口調で続けた。

「引率をするようになってから、観光はなかなかできなくてな。今の生徒たちはどんどころを見ているのか、聞いてみようと思っただけだ。気にしないでくれ」

それでも、ちょっとだけ寂しそうに聞こえたのは、私の気のせいだっただろうか。

私は小さな決意を固めると、上を向いて、先生の顔を視界に捉えた。

「あの、先生」

「何だ」

「地主神社、八坂神社、清水寺の音羽の滝、安井金比羅宮でした。修学旅行」

なかなか言い出せなかったのは、このラインナップのせいだった。去年の今頃、私は薦ちゃんに連れられて、願掛け行脚をしていたのだ。もちろん、願いはただ一つ。

先生は、顔を隠すように眼鏡のブリッジを押し上げた。もしかしたら、笑いを堪えようとしていたのかもしれない。たっぷり一分くらい間が開いて、「縁結びのフルコースか」と一言だけ言った。

「なので、内緒にしておこうと思ったんです」

「御利益は——あつたわけか」

見上げると、先生はわずかに微笑んでいた。

「……はい！」

先生の顔を見たら嬉しくなつて、思わず笑つてしまう。いつか、神様たちにお礼を言い、また京都に行こうか。そのときは、先生も一緒に、神前で報告してもらえらるうか。

私は先生を見上げたまま、頭の中で『自由行動』の計画を練り続けていた。

【番外編 5】残照（前書き）

高校を卒業した後の、理雪と椿のお話。

本編「その目は闇に濡れていた」で訪れた海でのお話です。

理雪と椿のお話は、この短編で終わります。

お付き合いいただき、ありがとうございました。

この後は、理雪の友人・塩出と、椿の友人・蔦のスピノフ的なお話を投稿する予定です。

よろしければそちらもどうぞ。

【番外編 5】残照

四月初の土曜日。

今日は、彼女が高校を卒業してから初めてのデートだ。それは、人目を忍ぶことなく堂々と街を歩けることを意味していたが、椿がせがんだのは少し離れたところ——海だった。

前にも一度二人で来たことがある、西の海。春の匂いが混じるぬるい海風。夏には海水浴で賑わう砂浜はもちろん海開き前で、俺たち二人しかない。

俺が振り返ると、貝殻でも見つけたのだろうか、椿はしゃがみ込んで何かを拾い上げていた。春らしいパステルカラーのコートが、傾き始めた日の光で山吹色に染まっている。気づけば、太陽はすでにかなり水平線に近づいていた。

——今日はここまでか。

「……椿」

「はい！」

打てば響く、といった元気な声。それが、まるで出席を取っているかのような錯覚を起こさせた。

もう四月だ。ここは教室でも何でもなし。彼女は高校生ではない。俺も、彼女の前では教師ではない。ただの椿と理雪なのだ。

まったく、どうかしている。順を追って確認しなければいけない程度には混乱しているな、と自分のことながら思う。

帰るぞ、と口を開きかけ、そこで俺は動きを止めた。このまま声を掛けることをやめてしまえばどうだろう。俺が車を出さずにいれば、帰る手段はない。もっともずっと長く、二人でここにいられる。

——いや、駄目だ。

俺は、以前ここを訪れたとき、すでに失敗済みだったことを思い出した。妙な気持ちを起こすと、また彼女を傷つけることになる。

元担任としての矜持が、誠実でありたいと願うからか。それとも、

もつと先にある何かを回避しようとしているのか、俺には自分から分らない。しかし、やはり潔く帰るべきだ。

一向に続きを喋らない俺を待てなかったのか、椿がこちらへと駆けてくる。波が寄せるぎりぎりのところを、砂に足を取られながら彼女なりの速さで。

「こら。走ると危な——」

「理雪さん！ 見て、ください！」

椿は俺の言葉を遮って、得意げに言った。息を切らしながら、持っていた小さなガラス瓶を誇らしげにかざしてみせる。中には、白緑、青——色とりどりのかけらが詰まっていた。海に洗われて角が取れ、優しく光るガラスの破片。シーグラスだ。

につこりと笑って、椿は俺を見上げる。

「前に来たとき、たくさん落ちてるのに気付いたんです。今日は絶対集めて帰ろうと思って。……よかったら、理雪さんも一緒に——

あの、どうかしたんですか」

椿が不思議そうに俺を見つめている。あどけない顔。駆け引きなど、きつとまだ知らない。

「……そろそろ帰る時間だ。門限に間に合わなくなるぞ」

「でも、今日絶対にしたいことが、まだあるんです」

「椿」

「海に沈む夕日を見たり、それから——」

「椿！」

くすんだ輝きが砂の上に散らばる。俺の声に驚いた彼女が、瓶を取り落としたのだった。

「理雪さん？」

こちらを見上げていた椿の丸い目が、みるみるうちに涙で満たされていった。彼女は雫が溢れないように、上を向いた。ずいぶんと昔に交わした、『泣かない』という口約束を未だに守っているのだと気付いた。

こんなはずではなかったのに。どうして、いつも傷つけてしまう

のだろう。なぜ、もつとうまくやれないのだろう。自分のふがいなさに、思わず力が抜けた。

冷たさに下を向けば、波打ち際の砂の上に座り込んでいる俺の膝が見える。頭の上から、彼女の「ごめんなさい」という声が聞こえた。

「君は何も悪くない。いつも俺が泣かせるんだ」

「泣いてません！……泣きません」

椿が俺の手を取った。小さな両手で包まれたかと思うと、きゅ、と力が込められる。散らばったシーグラスの真ん中で、手を握られたままの俺は椿を見上げた。さながら、姫に許しを乞う兵士のようにだった。

「立ってください。濡れちゃいますよ」

おそらく彼女の全力で、俺の体は少しだけ引つ張り上げられる。起こされるのにまかせて立ち上がった俺の足下を、椿が手で払ってくれた。べったりと濡れた砂が、剥がれ落ちていく。

自分の手に付いた砂を落とした椿は、俯いた。ガラスの欠片に目をやりながら「すみません」と、また謝る。

「隠していたことが、あるんです。……実は、この春から門限が延びました。大学生になりましたし、相談して、少し遅くしてもらったんです」

「え？」

高校までの藤倉家の門限は、高校生なりの時間だった。俺は今日もその時刻までに帰ろうと、彼女をせかしていた訳なのだが――。

「理雪さんと一緒にいられる時間が増えたって思ったら、ほんとに嬉しくて！ だから、理雪さんが一番驚きそうな瞬間に教えようと思って、タイミングをはかっていたんです。……大失敗ですけど。変なことしないで、最初にちゃんと言えばよかった」

彼女の気持ちは痛いほど分かる。椿は高校時代から、過剰なほどと言っていいくらい、門限のことを気にしていた。裏を返せば、二人で会うたびに自分が子供であると思い知っていたわけだ。

ポーカークフェイスのできない椿のことだ。嬉しいニュースを隠すのに、朝からいったいどれくらいの努力をしていたのだろう。俺は、そんな彼女を天辺からどん底へと突き落としてしまった。

「怒ってますか？」

「怒っては、いないんだが。……驚いたよ」

そうは言っても、俺はそもそもが無表情なのだから怒っていると思われても仕方がない。俺は、いつも一つか二つ、足りないのだ。

結局、頭を掻き、そして笑うことにした。俺を見て、彼女もやつと微笑む。

「今は——そうだな、嬉しい。恐らく、君と同じくらい嬉しいと思う。……俺はむしろ、君に怒られる方だ。逆にこっちが聞きたい。どうしたら埋め合わせができる？」

「じゃあ、私が今日したかったことを三つ、叶えてください」

椿は考えることもなく、すらすらと答えた。

「一つ目は、一緒にガラスを集めてくれること。二つ目は、夕日が沈むまでここで見ることに」

「お安い御用だが。……三つ目は」

いったい何だ、と聞き返そうとした俺の目に飛び込んできたのは、精一杯背伸びをしている椿の姿だった。小さな手が俺の顔をかすめるが、何も起こらない。

「危ないな。何をする気だ？」

「め——眼鏡を預かろうと思って」

「どうして」

「じゃ、邪魔になるからです。……じゃなくて、その、前に来たときは——私から——だったのよ」

必死な声が、誰もいない浜辺に響く。椿は何故か途中をぼかしながら、やつのことでそこまで言った。

「今日はリベンジなんです。あのときの理雪さん、いえ、先生の顔、絶対忘れない」

「俺の？」

不意を突かれた俺が言葉に迷っていると、彼女が教えてくれた。

「前に、ここに来た時のことです」

「ああ」

「先生は、今にも泣きそうな、寂しそうな目をしてました。……大人になってまた来る機会があったら、絶対思い出を塗り換えてやろう、塗り替えてもらおうって、ずっと思ってたんです。この前より、壁は低くなりましたよね？」

椿は、「まだ大人じゃないですが、もう生徒じゃありません」と歯を見せて笑う。

それでようやく、俺も彼女の意図を理解した。今回は、取り乱した俺を椿が落ち着かせてくれた——多少、強引な方法で。彼女は俺に、眼鏡が邪魔になる——少なくとも彼女がそう思い込んでいる『何か』をやり直すチャンスをくれたのだ。

「そうか。……リベンジしてもいいんだな」

「いいですよ」

「では、後ほど存分にさせてもらおう」

「ぞ、んぶん？」

椿は真つ赤な顔で再び復唱した。桃色の頬を夕陽でさらに染めて、今さら照れている。いつの間にか光の位置がずいぶんと低くなっていることに、それで気付いた。

「日が沈む。……沈み切るまで見るんだろう？」

「はい。……本当。見て、すごく綺麗ですよ！」

彼女ははいだ声で海を指さした。春の空気に少しだけ霞む水平線。夕日はその向こう、すでに半分ほど隠れていたが、投げかける蜜柑色の光はなおも水面に残っている。

俺の毎日が彼女のおかげで十分すぎるほど満たされているのを、彼女は知らないだろう。上手く伝える言葉が、俺にはまだ見つからない。口が下手だから、伝えるとなるとどうしても触れてしまう。椿の体を引き寄せると、彼女は妙な声で叫んだ。

「わあっ」

「わあとは何だ。ひどい言われようだな」

「……あの、つい。恥ずかしくて、何て言ったらいいか分からなくて」

「それなら、何も言わなければいい」

椿は黙った。

海に向かい、重なって立つ。砂浜に伸びる影が一つになった。

背中から被さるように腕を回してみると、彼女の頭が、俺の顎の下辺りにちょうどよく収まっている。そういえば、彼女が俺を見上げる角度も、誰かによって計算され尽くした結果なのではないかと思うときがある。はじめから、そうなるように造られたのではないだろうかと思いたくなるほどに、魅力的だ。

「……やっぱり、無言なのも恥ずかしいので、喋りますね」

海に食われていく光に照らされながら、椿はたどたどしく話し始めた。

「私、男の人とお付き合いするのって初めてで、よく分からないことだらけで、自分でもどうしてもうまくできないんです。でも、理雪さんが一緒に歩いてくれるから心強くて。……いろんな段取りも任せきりで、リードしてもらえばかりで——きつと、理雪さんにはかりすぎく回り道をさせてしまってるんだろなって、いつも思っているんです」

彼女の肩に乗せた俺の腕に、何か柔らかいものが触れる。見下ろすと、椿が頬を寄せていた。

「私の歩幅はかなり狭いですけど、追いつくまで待っててもらえたらな、って。あまりに足が遅くて待ちくたびれたら、たまには道を教えてくれたり、背中を押してくれたりと嬉しいです。その時は、優しく押してくださいね。……追いついたときには、今度は理雪さんのペースに合わせて全速力で走りますから」

言いたいことを無事言い終えて、安心したのだろうか。力の抜けた椿の体が、柔らかくもたれかかる。

俺と椿はまだ始まったばかりで、これから先、いくらでも時間は

あるのだ。焦る理由など、どこにもない。

彼女が大人になるテンポに合わせて、俺も歩く。ゆっくりと開いていく花を一番近くで愛でる幸せは、俺だけのものなのだから。その後には、薫る花を見る喜びも待っている。

「君を大人にするのは惜しい気がしてきた」

「そんなこと言わないでください」

「俺はこう見えて、足は遅くない。悪いが、椿の全速力は――」

「知ってます。でも、頑張りますから！」

あまりに張り切りすぎる声が返ってきて、俺は吹き出してしまった。いったい何を頑張るのかも分かっていないだろうに。

「思い切り背中を押したくなるから、普段以上に頑張るのはやめてくれ。椿の自然体に、俺が合わせるから。もしも俺が遠ざかっていきそうなときは、きつと君は教えてくれるだろう？」

彼女は、こくりと小さく頷く。頭のでっぺんしか見えないが、椿がどんな顔をしているのかは想像がついた。恐らく、俺と同様に満ち足りた顔で微笑んでいるはずだ。

すっかり黄昏れて、初めての夜の海が目の前に広がっている。もう、尋ねてみてもいいだろうか。

「では、そろそろ新しい門限を発表してもらおうとするか」

「変にハードル上げないでください。……ええと、日付が変わるまでに、家に着けば」

帰りの道のりから逆算すると、時間はかなりある。

すでに、椿が挙げた今日のノルマのうち一つはクリアしていた。

これなら、彼女の――そして俺のリベンジは達成できるだろう。

「まだ光は残っているから、足下は見えるな。ガラスを拾って――これで二つか」

「はい。……あの、あとの一つ、は」

期待の中に少しの不安が入り交じる表情で、椿は俺を見上げていた。訊いてしまってから恥ずかしくなって、後悔しているらしい。

なるほど、『うまくできない』というのはこういうことか、と俺

は理解した。素直な気持ち、それに好奇心、慎ましさ。いろいろなものが、彼女の中から同時に顔を出す。何と初々しいことだろう。

ならば導いてやればいい。隣を一緒に歩いて、一つずつ。

「まず、君にひとつ、教えておく。眼鏡は、かけたままでも構わないんだ」

「え？」

俺は片手で彼女の頬を支え、顔をこちらに向けた。

「スピンオフ」 1 大きい子（前書き）

ここからの数話は理雪と椿ではなく、その友人の塩出文人と、しおで ふみひと 薦真 つた 結子のお話です。まゆこ

始まりは大学入学後、薦と椿、それに塩出の初顔合わせ。
浮かれる塩出と、もやもやを抱える薦。
語り手は塩出です。

本編とは少し毛色が違いますが、軽く読めますので、よろしければどうぞ。

「スピノフ」 1 大きい子

「塩出といいます。理雪の友人です」

理雪から『俺の教え子が何人が受かったから、よろしくな』と教えられた中には、彼の大切な人の名もあった。一言挨拶させてくれと引き合わせてもらったところ、待ち合わせた学食に来たのは、件の彼女だけではなかった。

俺の自己紹介に背筋を伸ばして、「よろしくお願いします」と答えてくれた小さい子が藤倉さん。可愛らしくて礼儀正しくて、どことなく犬っぽい。理雪から聞いたとおりのイメージだ。右手の薬指に光るのは、理雪が俺をアドバイザーに選んだものとはまた別の指輪——あいつめ、いつの間に——だった。

そして、関心なさそうに「どうも」とだけ返した大きい方が、その友達、薫さん。あの理雪に正面きって食って掛かれる度胸の持ち主だと聞いている。

彼女らが仲の良いのは理雪から断片的に漏れてきてはいたが、キャンパス内を歩くのにも、大きい子——薫さんが、まるで藤倉さんのボディーガードのようにぴったりとくっついていているようだった。ちよつと過保護にも感じるが、本人たちがそれでいいなら、俺がどう思おうと関係ないのだが。

今日の目的は藤倉さんの顔を覚えること。とりあえず目的を達成したことだし、適当に締めておこうか。

「学内のことで何か分からないことがあれば聞いて。それなりに頼りになると思いますんでね」

「はい。よろしく願います」

「どうも」

またそれかよと薫さんの顔を盗み見て、綺麗な子だなとごく自然

に思う。無愛想な対応にちよつとだけわだかまっていた不満も、現金なものですぐに氷解した。

確かに頼りがいのありそうな姐さんだが、彼女が藤倉さんを守ろうというなら、寄り添っているのが逆効果という気もしないでもない。女の子にしては高い身長が、すつと伸びた背筋でさらに強調される。シャープな顔立ちに、潔いほどに短い髪が似合う。要するに、藤倉さんよりも薦さんの方が目立つのだ。

薦さんは、黙って突っ立っている俺に首を傾げた。別にやましいことはないつもりだが、沈黙を不審がられただろうか。

それから薦さんは藤倉さんの腰をポンと叩く。それに促され、藤倉さんはぺこりと頭を下げ、ふんわりと笑った。

「じゃあ、私たちはこれで失礼しますね」

俺は取り繕うすが思いつかず、余計なことを知りつつも、サークルオリエンテーションの部屋を教えてみることにする。

「ああ。……暇だったら、俺、野鳥の会のサークル勧誘やってるから寄ってみてよ」

「わかりました。回れたらお邪魔します」

薦さんは相変わらずクールにそう答え、浅く一礼した。こりゃきつと来ないんだろつな、と直感したものの、社交辞令はきちんと押さえている彼女が意外でもある。

俺は二人の背中を見送りながら、ただ今の会合を反芻していた。

まずいな。

藤倉さんよりも薦さんの顔の方が先に浮かぶぞ。

——さて、どうしてくれようか。

「スピノフ」2 全部うどん

「山菜うどん温玉のせでお待ちのお客さま、お待たせしました」

夜の学食・西食堂、厨房から繋がるカウンターにはお客さま。うどんの乗ったトレーを爽やかな営業スマイルで差し出した俺に、彼女は微妙な笑顔で応えた。

「お久しぶりです、塩出先輩」

「……つれないっすね」

お客さま、もとい薦さんは「そんなことないです」と多少きまりが悪そうに言う。しかし彼女は演劇部だ。もしかしたら、本当は何とも思っていないのに反応する演技だけしてみたという程度かもしれない。その証拠に彼女は、何事もなかったようにトレーを受け取った。

「ここでバイトしてるんですか」

「入学してすぐの頃からね」

薦さんは俺の顔をちらりと見た後に、視線を斜め上へとやる。恐らく年数をカウントしているのだろう。

その間に彼女の背後を覗き込んでみたが、今日は藤倉さんの姿がない。薦さんと藤倉さんはいつでも二人セットなのだばかり思っていたが、どうやら違ったようだ。

こうして単品で見ると、薦さんの方はわりあい歳に見合った顔つきなのが意外だ。いつもは童顔の藤倉さんと並んでいるので、どうしても薦さんの大人っぽさが際だってしまふのだろう。

少し間があって、薦さんは「結構な年数ですよ」とぼかした結論を出した。数えている途中で勤続年数が分からなくなったらしい。彼女はごまかすように七味の入った容器を手に取り、うどんに振りかけ始めた。

「他に勤めてる誰よりも長いからね。……今日、相方は？」

彼女は俺の質問には答えず、七味を振り続けている。うどんの上

に（俺の手で）きれいに盛りつけられた温玉は、やがて赤や橙の粉末にすっかり覆われてしまった。俺は止めようと慌てて声を掛ける。

「かけすぎじゃない？」

「デートです」

「は？」

「デートです。生物教師と」

デートというのが『相方は？』への回答だと気付くまでには少々時間が要った。藤倉さんは、理雪と一緒になのだ。

薦さんが、静かに七味の容器を調味料置き場に戻す。感情が、七味を通して噴出したようだった。

大好きな藤倉さんのことを一番に考えると、自分は引かざるを得ない。むしろ、彼女のためになら喜んで引く――それが藤倉さんにとっても、一番いいことだと思っている。そして、門限を破らぬよう、おそらく律儀に家まで送るであろう理雪も、決して嫌いではない。

理雪から聞いていた話では、薦さんは皮肉を言いつつもカップル成立を助けてくれたということだったのだが、当の薦さんの中にはいろいろな思いがありそうだ。今のシーンだけを見ても、それくらいは分かる。しかし、残念ながら俺はそんな込み入った事情に言及できる立場ではない。今の俺にできるのは、あとで理雪に一言言つてやるという決意と、とりあえず彼女の舌と喉と胃の心配をするにとくらいだ。

「……それ、食べれる？」

彼女はそこで初めてうどんを注視する。井内の惨状にはじめて気付いたのか、大きな目が余計に丸くなった。

「無理しないほうがいいんじゃない」

「いえ、自分で注文したんですし、何とかします」

「喉、大事にしなきゃ駄目でしょ？」

薦さんは、はっとして顔を上げた。唐辛子で喉を焼いて声が出ないなんて、演劇部としては致命的なミスだろうに、今日の彼女はそ

んなことも見えていないらしい。

少し萎れた様子の蔦さん。こちらに向けられた瞳には、余裕の無さが浮かぶ。先日のとっつきにくい態度とは違って、ちっともクールじゃない。このギャップは——ちよっと可愛いじゃないか。

「無理しない無理しない」

「え？」

「……これ、俺が喰うよ」

返事を待たず、俺は蔦さんの丼を手にとった。見事な茜色に染まった汁に一瞬ひるみはしたが、彼女に突っ込まれる前にうどんをすすり始める。辛い、というよりは痛い。しかし、辛すぎることで、麺が多少伸びていることを除けば、まあまあうまい。

「何するんですか！」

俺は抗議を無視し、すっかり食べ尽くしてしまってから「ごちそうさま」と丼を置く。

「代わりに何かおこるよ。何か食べたい晩飯ある？」

「すいませんが」

「……つれないっすね」

蔦さんはしばし、苦笑いの俺を見ながらなにがしかを考えていた。彼女の表情は、驚きというよりは呆れへと変わっている。この、少し冷たい目線は初対面のときの蔦さんに近い。調子が戻ってきたのかもしれない。

やがて蔦さんはいつも通りのよく張った声で言った。

「じゃあ、『全部うどん』を」

「そんなんでもいいの？」

「はい」

掻き揚げと油揚げと山菜と温玉、それにわかめと蒲鉾。学食で可能なトッピングを全て乗せたうどんが『全部うどん』だ。俺の長いバイト経験の中でも、月に一度出るか出ないかのレア商品である。正直言つと、俺も食べたことはない。

席に着いた蔦さんの前に丼を置き、俺も向かいに座る。閉店時間

が近づいた西食堂はがらんとしていて、彼女の他に客はいない。少しぐらい持ち場を離れても構わないだろう。

一口食べた薦さんは、彼女に似合わないゆるゆるとした動作で顔を上げた。少し目を細めて、口角を上げる。

俺が言葉を探しているうちに、薦さんは再びうどんに目を落とし、旨そうに食べ始める。彼女が完食するまで、俺は見つめていた。

「ありがとうございます」

「俺、君のうどん食べちゃったんだよ。こっちが謝んなきゃ」

「いえ。……それでも、ありがとうございます」

「今度はほんとに外で晩飯でもどう？」

「……椿と若が一緒なら、行かないこともないですよ」

薦さんは、にっこりと笑ってさらりと言ったのけた。もう、すっかりいつもの彼女のペースに戻っている。

——晩飯も『NO』から一歩前進、『条件付きYES』。バイトやってて良かったと、俺は心から思った。

「スピノフ」3 絶叫ループコースター（前書き）

これがスピノフの最終話、「雪椿」の最終更新です。
なんとか鳶とのデートにこぎつけた塩出ですが……？

「スピンオフ」3 絶叫ループコースター

「じゃあ、あとは若い二人でごゆっくり。また閉園時間に会おうぜ」俺はそう言い残すと、振り返らずにその場を後にした。隣で藤倉さん達に手を振る薫さんの腕を取り、彼らとは反対方向に歩き出す。理雪と藤倉さん、それに俺たちの四人で来た遊園地。食事だけの約束が遊園地込みに膨らんだのは、藤倉さんと薫さんの間での協議の結果だと聞いた。

昼飯を終えたので、二手に分かれたところ。無事に向こうのカツプルを分離し終え、ようやく肩の荷が下りた、と俺は気を抜いていた。

「先輩！」

にこにこして振り返った俺に、薫さんは頬を膨らませて抗議の声を上げた。今度はこちらのお嬢さんがお怒りのようだ。何かまずいことをしただろうかと考えてみても、思い当たる節はない。

「何、どうかしたの？ とりあえずあっちの二人と離れられたけど、何か問題あったかな？」

「椿たちと別れたのはいいんですけど」

「うん」

「いきなり手を握るとか。もっと恥じらいが必要じゃないんですか」薫さんは自分の手に重なっている俺の手をそつと剥がす。問題があったのは、理雪たちのことではなくてこっちのことだったらしい。「馴れ馴れしかった？」

「……正直、そうです」

彼女は申し訳なさそうに、しかしきつぱりと言った。顔をやや赤らめて、自分の手を自ら握りしめている。

俺はもともとボディタッチに躊躇がない方だから、つい無意識にやってしまったらしい。

——それにしても。

手を握ったのは謝るとしても、そこまで恥ずかしがることもないように思う。薦さんは、俺が考えているよりもそういう方面への免疫がないのだろうか。

「ごめん。……とりあえず、せつかくだし何か乗らない？　俺、コースターがいいな」

「コースターですか？」

「だめかな」

「いえ。……わかりました。お供します」

頬の赤みが引かないまま、彼女は早足で俺に付いてくる。

この遊園地のジェットコースターは、走行中に二度の宙返りをするのが売りだ。園内のアトラクションの中ではいちばんの絶叫マシンであり、日曜の今日は行列ができるほどの人気である。

俺の経験上、大人が恐怖を味わうには少し物足りなくらいの乗り物だが、小さな地方都市の遊園地にしては頑張っている。それに、絶叫するためでなく、純粹に遊園地を楽しみたい家族連れや恋人達にとってはおちょうどいい。

俺たちに順番が回ってきて、薦さんと並んで座席に掛ける。周囲を見回すと男女の二人組が多く、俺たち以外はカップルであろうと推測される仲むつまじさ。さっき別れた友人達を思い出して、俺は薦さんに話を振った。

「理雪たちも乗ったかな」

「椿はこういうの苦手だから、乗らないと思いますよ。……あ、動いた」

ガクンという揺れと共に、コースターが進み始める。

「そっか。だったら、遊園地じゃない場所に誘えば良かったかな？」
「あの子なら、きっと若と一緒にならどこでも大丈夫ですよ」

彼女は、藤倉さんのことなら何でも知っている。友人同士にしては深すぎる繋がりじゃないか、と俺は首を傾げた。先日の、七味をかけすぎたうどんを思い出す。いっそ、絶叫ついでに洗いざらい吐き出したらいんじゃないだろうか。

「失礼かもしれないけど、一つ訊いていいかな」

「なんですか」

「薦さんって、女の子しか好きにならない人？」

「私が椿を好きなのは、『友達だから』です。残念ながら、違いますよ」

「えっと、じゃあ、理雪と藤倉さんが付き合うのは、薦さんの性的にはどうなの？」

「若が私に、椿のこと幸せにしてくれるって言ったから、許します」
元担任に対して許します、とはさすが保護者だ。あの理雪からそんな約束を引き出すなんてただ者ではない。藤倉さんの親友に泣きながら怒られたと理雪は苦笑いしていたが、さては薦さんのことだったか。

「それで、君は納得なわけ？」

「納得？　しませんよ。するわけがないじゃないですか」

コースターが二回転ループに差ししかかったところで、薦さんの声は絞り出すかのような叫びに変わった。

「私だって、椿のこと好きなのにつ！」

観覧車は、コースターほどは混んでいなかった。四人がけのゴンドラに、二人で向かい合って座る。

外の景色には目もくれず、彼女は無言で何かを考えていた。俺も何も言わず、ゴンドラは無音のまま、観覧車は動き続ける。

空は夕暮れへと色を変えるところで、眼下には暖かい光を浴びた町並みが広がっていた。小さな街のわりに造りは綺麗で、こうして上から見下ろすとなかなか絵になるものだ——という話を彼女とできたら良かったのだが、あいにくそういう雰囲気ではない。

ゴンドラが観覧車の一番上まで昇りきったあたりで、薦さんはやっと口を開いた。

「若の次でいいって思ってるのは、本当です。私は二番でいい。だって、いちばんの人に攫われちゃったら、手の出しようが無いじゃ

ないですか。椿のいちばんの友達にはなれても、いちばん大事な人には、たぶんもうなれない。……でも、私には、今もあの子がいちばんで」

藤倉さんの一番は理雪、でも薦さんの一番は藤倉さん。

熱烈な片思いだ。藤倉さんへの気持ちが友人としてのものでも、たとえ恋だったとしても、薦さんにとってはいちばんの人を取られたことに変わりはない。

しかし、彼女の思いはまだ敗れてはいない。自分に嘘がつけないために、折り合いの付くところが見つからないまま、それでも貫いていこうと足掻いているのだった。薦さんはそういう子だと、短い付き合いの俺ですら分かった。

「どうしたらすっきりするの」

聞き役に徹する姿勢だった俺が急に口を出してきたことに、薦さんは驚いたようだった。

大きく見開かれた目は、ややあって少し細められた。彼女は、笑ったのだ。形だけを見れば、完全な笑みだった。

「そういうキャラ、どうでしょう？」

いつもは良く通り、舞台映えするアルトの声が、細かく震えて消えていく。

悩んで悩んで、その結果が作り笑顔などというごまかしは、彼女には似合わない。俺は語気を強めた。

「演劇部としてはまずい演技だ。笑いたいのか泣きたいのか分からない。……茶化すなよ」

「先輩もそう。……私の周りは、どうしてみんな大人ばかり」

観覧車の向かいの椅子。雲間から夕陽が覗いて、彼女が背にした窓からは西日が差す。逆光で、薦さんの表情が霞んだ。

「何やってるんでしょうね。子供みたい。馬鹿みたいじゃない。友達に彼氏ができただけの話ですよ。そんなこと、どこにだってあるでしょう？」

「ありふれた話だからって、薦さんにとっちゃどうでもいい話って

訳じゃないだろ？」

「……どうでもよくはないですけど、どうしたらいいのかわからないんです」

恐らく、藤倉さんの中の『いちばんの友達』の席は、理雪には座れない。きっと鳶さんだけのものだ。

ならば、友人としていちばん側に——それでは満足できないだろうか、とは言えなかった。満足できないからこそ、彼女は悩んでいるのだから。

じゃあ、時間が解決してくれる、とでも言うのか。彼女にとっては、その忠告も何の助けにもならないだろう。

彼女の納得のいく答えは、彼女が探すしかない。俺ができるのは、その手伝いくらいのものだ。いくら十も年が上だからって——いや、下手に歳を取っているからこそ、半端なことは言いたくはない。自分なりの道を探そうとしている最中に迷わせたくはない。殊に、相手がこうも真っ直ぐな場合は。

「俺ができるのは、聞いて一緒に悩むことだけかな」

「大人ですね」

「取り繕うのに慣れてるだけだよ。君より余計に年取ってる分だけ、な」

「聞いてくれるだけでも——」

ブーッという間の抜けた警告音が、俺たちの会話を止めた。別のゴンドラが客を乗せてスタートする合図のブザー。いつの間にか、ゴンドラは一番下まで降りてきていた。

係員がゴンドラのロックを解き、ドアを開けた。地上に降りた鳶さんは、憑き物が落ちたかのような顔で言った。

「うん。先輩に話して良かったって、思いました。……本当は、自分で悩んで引きずって抱えて、納得するしかないんだって分かってたんです。でも、きっかけと勇気がなかった。ありがとうございました、背中を押してくれて」

ぺこりと頭を下げて、彼女は笑みを見せた。涙を浮かべて揺れて

いた瞳しか知らなかった俺は、瞬時に魅了された。

ただ単純に、綺麗だと思ったのだ。

「俺でよかったの」

「だって、頼りになるって自分で言ってたじゃないですか」

なんだか感謝されているが、俺は果たして役に立っていたのだろうか。そもそも俺は今日、下心だらけでここに来たわけであって、彼女に感謝されると心苦しい。黙っていればいいものを――そう考えつつも、言うか言うまいか迷って、結局白状することにする。

「俺さ、今日、実は、『付き合ってください』って言おうと思って」

「えっ？」

薦さんは、先ほどコースターのループのところで聞いたような声で短く叫んだ。

たちまち頬は赤くなり、まばたきを何度も繰り返す。このギャップは何度見ても楽しいが、いつまでも楽しんでるわけにはいかないので、俺は続きを一気に話す。

「でも、今日はやめたんだ。薦さんの中のランキングは、藤倉さんが一位だって分かったから。ただ、俺は付き合うからには相手のいちばんになりたい男だけど、今は相手の逃げ場という扱いでも、別に構わないと思ってる。たまに呼び出してもらって、愚痴を聞かされるだけでも……そうだね、最下位あたりに名前を足しといて貰えるとありがたいかな。それだけ言っとくよ」

「大人ですね」

「……あと、せっかくジェットコースターに乗ったんだから、手くらはいは繋がせて貰いたかった、とも思ってるんだけど」

照れて付け足した一言に、「前言撤回」と薦さんは肩をすくめた。相変わらず耳まで赤い彼女だが、ちゃんと突っ込みはしてくれる。おかげで、こちらにも必要以上に気負わなくて済む。こういう相性はいいんじゃないかと、俺は勝手に考えているわけだが、さて。

しばらく歩いて、観覧車の乗り場が見えなくなる頃、薦さんは突

然立ち止まった。

振り返る俺に、彼女は仁王立ちで強い視線を送っている。睨むような、射るような目は、こちらを捉えて放さない。

今日、これまでの彼女とは違う表情に、俺も何かを感じ取って身構える。

「……どうした？」

「本当に、本当に今の私で構わないんですか。椿のこと引きずってる私でもいいんでしょうか」

「いつか、いちばんになるまで待てる忍耐力はあるつもりだけど――それって、そういうこと？」

「最下位じゃないんです、先輩」

「ん？」

「椿の次くらい」

藤倉さんの次ってことは、二番手じゃないか！

「マジですか」

――これは、もう一押しするしかない。

薦さんは腕時計を見た。俺も、携帯電話で時刻を確認する。夕陽は沈む寸前だが、待ち合わせの閉園時間まではまだ楽しめるようだ。観覧車もいいが、ここはやはりあれだろう、と俺は自分の前方を指差した。その先には、今日いちばん最初に乗ったアトラクションがある。

「……コースター、もう一度乗らない？」

彼女は俺の方へと一歩踏み出し、控えめに手を差し出した。

「返事は、これでいいですか？」

「スピノフ」3 絶叫ループコースター（後書き）

塩出と薦のスピノフも、これでおしまい。

薦の可愛いところが書けているといいのですが…。

「番外編 6」週末はオレンジ色買いに

「こっちの紺色なんかはどうだ？」

「このアイボリーはどうですか？」

先生のマグカップを選びに来ているはずなのに、二人がそれぞれ手に取ったものはことごとく逆の傾向。同時に口を開き、私たちは顔を見合わせて笑った。

「藤倉は、明るい色が好きなんだな」

「先生は青とかグリーンがお好きなんですね。……確かに、みんなが先生に持つてるイメージは寒色系だと思うんですけど」

クールに見える外見、無愛想な性格、加えて『雪』という名前も原因だろう。若柳先生に似合う色を生徒たちに聞けば、みんな青やアイスブルー、黒などを挙げるはずだ。

「俺自身もそう思っているんだが、違うのか？ だいたい赤や黄色なんて、これまでの人生で身につけたのは運動会のハチマキくらいだ」

先生はそう言って首をひねった。

先生が赤いハチマキを締めている姿を想像して、私は笑いを噛み殺す。彼にも確実に学生時代はあったはずで、ハチマキだつてごく当たり前の話だけれど、私にとっては先生は初めて会ったときから『先生』だ。もつと昔の話も聞いてみたくなって三十センチ上を見ると、逆に先生の瞳が待ちかまえていた。

「その顔、なにか良からぬことを考えていたな」

口はへの字に曲げられていたが、その声は笑っている。慌てて否定しながら、私は特に目を引いた一つを手にとって示した。

「い、いえ、何でも。……私は、違うんです。先生の色は、これ……かな」

それは、鮮やかなオレンジのマグカップだった。カップの縁は白、そこからクリーム色、黄色、そして深い橙色にゆっくりと変化する

色調、底に向かつてすつと細くなるスマートさが、先生にぴったりと私には見える。

案の定、先生は不思議そうに「どの辺が俺なんだ？」と私に尋ねた。

「これは、初めて会ったときの色なんです。先生が夕日を背負っていて、横顔がオレンジ色で——素敵でした」

「そうか。……では、これにする」

しばらく沈黙した後、否定もせず、肯定もせずに先生は私から力uppを受け取る。一瞬触れた手がいつもの先生らしくなく熱いのに気付いて見上げると、彼は柄にもなく顔を赤らめてそっぽを向いていた。

「先生？」

「……予告もなくそういうことを言うな。慣れていないんだ」

「慣れましょう。私、たくさん言いますから」

「勘弁してくれ」

レジへと向かいながら、先生は肩をすくめてため息をついた。そのわりに嬉しそうな先生の足取りがおかしくて、私は気付かれないようにこっそり微笑んだ。

きつと月曜日には、このカップにミルク入りコーヒーがたつぷりと注がれることだろう。オレンジ色の思い出がまた一つ増える予感がして、私の胸は躍っていた。

【番外編 6】週末はオレンジ色を買いに（後書き）

昔書いたものが出てきたので、投稿させていただきます。
完結と連載の間を何度も行ったり来たりしてすみません…。

ではまたいつか、機会がありましたら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9434t/>

雪椿

2011年11月30日12時09分発行